山形県埋蔵文化財センター調査報告書第173集

南田遺跡発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

南田遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 173 集

2009

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

南田（みなみだ）遺跡

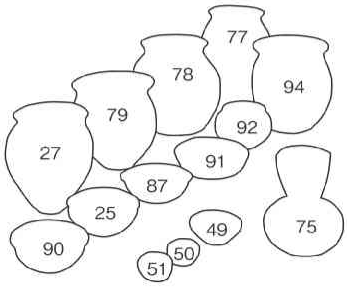
発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 173 集

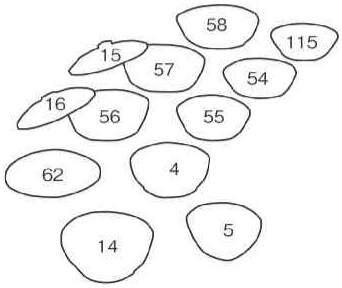
平成 21 年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

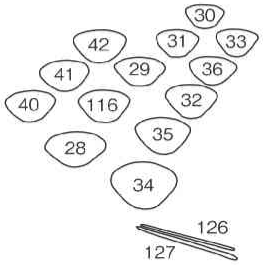
古墳時代の土器



奈良時代の土器



平安時代の土器と箸



調査区全景（北東から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した南田遺跡の調査成果をまとめたものです。

南田遺跡は、日本海に面した庄内地方の南半部を占める鶴岡市にあります。この鶴岡市は、従前の鶴岡市、藤島町、羽黒町、櫛引町、朝日村、温海町を廃し、平成17年10月1日をもって新設合併された都市です。その範囲は東西約43km、南北約56km、総面積は1311.49平方kmにおよびます。土地の利用状況をみると森林が73%、農用地が14%、宅地が3%ですから、豊かな自然とその恵みに育まれた地域であるといえるでしょう。

この度、国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所による日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）の建設事業にかかわり、工事に先立って南田遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、古墳時代の川、奈良・平安時代の溝、土坑、井戸などが見つかり、須恵器、土師器と呼ばれる焼き物や、箸、まじないに使った斉串（いぐし）などが出土しました。いずれも貴重な資料であり、鶴岡市の歴史、ひいては古代出羽国の歴史を解明する手がかりとなるでしょう。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を保護するとともに、祖先の歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が埋蔵文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援・御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

平成21年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　山口常夫

凡　　例

1　本書は、日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設に係る「南田遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、現地調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は水戸部秀樹が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、佐東秀行、安部実、長橋至、伊藤邦弘、黒坂雅人が監修した。

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

　　ＳＫ…土坑　　ＳＤ…溝跡　　ＳＥ…井戸跡　　ＳＰ…柱穴・ピット

　　ＳＧ…川跡

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。

8　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

9　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々から御協力と御助言をいただいた。（敬称略）

　　東北芸術工科大学歴史遺産学科准教授　北野博司

　　山形大学人文学部准教授　三上喜孝

　　佐渡市教育委員会　鹿取渉

調 査 要 項

遺　跡　名	南田（みなみだ）遺跡			
遺 跡 番 号	平成 17 年度登録			
所　在　地	山形県鶴岡市大字清水新田字南田			
調査委託者	国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所			
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター			
受 託 期 間	平成 18 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日			
現 地 調 査	平成 18 年 9 月 19 日～ 11 月 30 日			
調査担当者	平成 18 年度	調査第三課長	渋谷孝雄	
		専門調査研究員	黒坂雅人	
		調査研究員	水戸部秀樹（調査主任）	
		調査員	渡辺和行	
	平成 19 年度	調査課長	長橋至	
		整理課長	野尻侃	
		調査研究員	水戸部秀樹（調査主任）	
		調査員	山澤護	
	平成 20 年度	整理課長	安部実	
		課長補佐	黒坂雅人	
		調査研究員	水戸部秀樹（調査主任）	
調 査 指 導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室（平成 18 ～ 19 年度）			
	山形県教育庁文化遺産課（平成 20 年度）			
調 査 協 力	国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所			
	東日本高速道路株式会社東北支社鶴岡工事事務所			
	鶴岡市教育委員会			
	山形県教育庁庄内教育事務所			
委 託 業 務	地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務　日本特殊撮影株式会社			
	デジタルトレース業務　株式会社アサヒ印刷			
	理化学分析業務　株式会社パレオ・ラボ			
発掘作業員	伊藤清太郎　伊藤辰太郎　伊藤文二　遠藤哲雄　金子小一郎　小林恒弥　小林与一郎			
	小松勇三郎　今野正　斉藤律子　佐藤新一　佐藤一夫　佐藤賢治　佐藤とし子			
	佐藤登　佐藤みさを　佐藤ミヤエ　佐藤ヤエノ　島井純子　田中富治　土田恵子			
	長谷川謙三　長谷川富弥　松田健　松田由美　守屋純子　守屋亨治郎　矢口悦子			
	若公四郎　（五十音順）			
整理作業員	伊藤清毅　岩瀬順子　遠藤寛　大築忠雄　小笠原美名子　鏡清明　金田さち子			
	河田厚子　久連山朱美　後藤ゆり子　佐藤美恵子　土田友香　土谷玲子　中嶋美恵子			
	正野みゆき　村山郁子　吉田恵理子　渡邉由美子　（五十音順）			

目　次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 3
Ⅲ　調査の成果 …… 10
Ⅳ　理化学的分析 …… 20
Ⅴ　総　括 …… 39

報告書抄録 …… 巻末
遺構全体図 …… 付図

表

表１　遺跡位置図の遺跡名と時代・種別 …… 7
表２　遺物観察表 …… 16
表３　測定試料及び処理 …… 20
表４　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 …… 21
表５　胎土分析を行った須恵器試料 …… 25
表６　須恵器の蛍光Ｘ線分析結果 …… 26
表７　薄片の顕微鏡観察結果 …… 27
表８　花粉化石産出一覧表 …… 34
表９　樹種同定結果一覧 …… 38

図　版

第１図　調査区概要図（１：4,000） …… 2
第２図　南田遺跡周辺の地形分類図 …… 4
第３図　遺跡位置図 …… 6
第４図　暦年較正結果（PLD - 7221） …… 22
第５図　暦年較正結果（PLD - 7222） …… 22
第６図　暦年較正結果（PLD - 7223） …… 23
第７図　暦年較正結果（PLD - 7224） …… 23
第８図　暦年較正結果（PLD - 7225） …… 24
第９図　各元素定量値（１） …… 28
第10図　各元素定量値（２） …… 29
第11図　酸化ケイ素 SIO_2 - 酸化アルミニウム Al_2O_3 分布図 …… 29
第12図　土器胎土の顕微鏡写真 …… 30
第13図　土器胎土の顕微鏡写真 …… 31
第14図　土器胎土の顕微鏡写真 …… 32
第15図　花粉化石分布図 …… 35
第16図　産出した花粉化石 …… 37
第17図　南田遺跡出土木片材組織の光学顕微鏡写真 …… 38
第18図　南田遺跡出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真 …… 38
第19図　遺構全体図の割付 …… 41
第20図　遺構全体図１ …… 42
第21図　遺構全体図２ …… 43
第22図　遺構全体図３ …… 44
第23図　遺構全体図４ …… 45
第24図　調査区壁土層ａ - ａ’と
セクションポイントの配置 …… 46
第25図　調査区壁土層図ａ - ａ’ …… 47
第26図　調査区壁土層図ａ - ａ’ …… 48
第27図　溝跡ＳＤ１・７，川跡ＳＧ８・129 …… 49
第28図　溝跡ＳＤ１・７，川跡ＳＧ８・129 …… 50
第29図　溝跡ＳＤ２・３・４・６・78・82・128 …… 51
第30図　溝跡ＳＤ２・３・78 …… 52
第31図　溝跡ＳＤ４・６・78・82・128 …… 53
第32図　川跡ＳＧ81・130・141・248・356 …… 54
第33図　川跡ＳＧ81 …… 55
第34図　川跡ＳＧ130・141・248・356 …… 56
第35図　土坑ＳＫ５・142 …… 57
第36図　土坑ＳＫ143・145，井戸ＳＥ80 …… 58
第37図　柱穴ＳＰ10・11・12・14・25・30・32・33・34・36 …… 59
第38図　柱穴ＳＰ37・38・40・44・46・49・66・68 …… 60
第39図　柱穴ＳＰ69・74・77・84・110・116・119・131 …… 61

第40図　柱穴ＳＰ133・134・137・138・150・152・170
ＳＰ155・164 …… 62
第41図　柱穴ＳＰ167・174・176・177・178・185・197
川跡ＳＧ323 …… 63
第42図　柱穴ＳＰ215・216・218・220・257・259・286 …… 64
第43図　柱穴ＳＰ292・335・342・350・353・368 …… 65
第44図　溝跡ＳＤ２・３・４出土の土器・土製品…… 66
第45図　溝跡ＳＤ78・322・325出土の土器 …… 67
第46図　川跡ＳＧ81出土の土器 …… 68
第47図　川跡ＳＧ81出土の土器 …… 69
第48図　川跡ＳＧ81出土の土器 …… 70
第49図　川跡ＳＧ130出土の土器…… 71
第50図　川跡ＳＧ130出土の土器…… 72
第51図　川跡ＳＧ248出土の土器…… 73
第52図　川跡ＳＧ248出土の土器…… 74
第53図　川跡ＳＧ356出土の土器…… 75
第54図　土坑ＳＫ142・143出土の土器・フイゴの羽口
井戸跡ＳＥ80出土の土器 …… 76
第55図　溝跡ＳＤ１，川跡ＳＧ８，遺構外出土の土器・紡錘車
環状土製品・砥石…… 77
第56図　木製品…… 78

写真図版

巻頭写真１　古墳時代の土器
巻頭写真２　奈良時代の土器
巻頭写真３　平安時代の土器と箸
巻頭写真４　調査区全景（北東から）
写真図版１　調査区全景（上が北東）
写真図版２　調査区遠景，溝ＳＤ２・78
写真図版３　溝跡ＳＤ３
写真図版４　溝跡ＳＤ４・６・78・82・128
写真図版５　溝跡ＳＤ１・７・８・129
写真図版６　川跡ＳＧ81
写真図版７　遺物出土状況（川跡ＳＧ130，南東から）
写真図版８　川跡ＳＧ130・141
写真図版９　川跡ＳＧ248・356
写真図版10　土坑ＳＫ５・142・143・145
写真図版11　井戸ＳＥ80，柱穴ＳＰ10・11・12・14・25・30
写真図版12　柱穴ＳＰ32・33・34・36・37・38・40・44・46
写真図版13　柱穴ＳＰ49・66・68・69・74・77・84・110
写真図版14　柱穴ＳＰ116・119・131・133・134・137・138・150
写真図版15　柱穴ＳＰ152・170・155・164・167・174
ＳＰ176・374・177・178
写真図版16　柱穴ＳＰ185・197・215・216・218・220・257・259
写真図版17　柱穴ＳＰ286・292・335・342・350・353・368
作業状況
写真図版18　溝跡ＳＤ２・３・４・322・325出土の土器
写真図版19　溝跡ＳＤ78出土の土器
写真図版20　川跡ＳＧ81出土の土器
写真図版21　川跡ＳＧ81出土の土器
写真図版22　川跡ＳＧ130出土の土器
写真図版23　川跡ＳＧ130出土の土器
写真図版24　川跡ＳＧ248出土の土器
写真図版25　川跡ＳＧ248出土の土器
写真図版26　川跡ＳＧ356出土の土器
写真図版27　土坑ＳＫ142，井戸ＳＥ80出土の土器
写真図版28　溝跡ＳＤ１，川跡ＳＧ８，土坑ＳＫ143
遺構外出土の遺物
写真図版29　砥石，木製品
写真図版30　無台皿と箸

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

南田遺跡の発掘調査は、国土交通省東北整備局酒田河川国道事務所による日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設に伴って行われた。

現在、庄内地方の高規格幹線道路は、東北横断自動車道酒田線の湯殿山インターチェンジ～酒田みなとインターチェンジ間の53kmが共用されている。発掘調査の原因となった日本海沿岸東北自動車道は、日本海沿岸地域を結ぶ重要な高規格幹線道路として建設が始まった。平成15年からは、温海から鶴岡までの26kmが新直轄事業により進められている。

南田遺跡は平成17年度に新たに発見された遺跡として登録された。同年行われた山形県教育委員会による試掘調査は、工事の施工範囲内に南北方向の試掘坑を7カ所（計372平方m）設けて行われた。検出された遺構は、柱穴7基、土坑1基、溝跡1条、出土した遺物は、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土器などがあると報告された（阿部ほか2007）。北西に隣接する清水新田遺跡でも、昭和62年に県営ほ場整備事業（鶴岡西部地区）に伴い発掘調査が実施されており、同様の遺物の出土が報告されている（阿部ほか1988）。

試掘調査の成果を受け、山形県教育委員会は、遺跡範囲内において道路建設工事を行う際には、事前に発掘調査による記録保存が必要であるとの判断に至った。調査対象面積は、工事の施工範囲と試掘調査の成果により2,000平方mとされたが、発掘調査開始後に遺跡範囲が南北に広がることが確認されたため、3,400平方mへと変更された。

平成18年4月1日付けで、国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所長と財団法人山形県埋蔵文化財センター理事長の間で委託契約書が交わされ、南田遺跡の発掘調査が行われることとなった。

4月11日に国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所、山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室（現：文化遺産課）、庄内教育事務所、鶴岡市教育委員会、東日本高速道路株式会社鶴岡工事事務所、財団法人山形県埋蔵文化財センターなどの関係機関による事前打ち合わせを行い、調査期間や方法、実施計画、問題点などについて協議した。併せて同事業にかかわって発掘調査が実施される木の下館跡、行司免遺跡、興屋川原遺跡、玉作1遺跡、岩崎遺跡、矢馳A遺跡についても同じ内容で協議を行った。

発掘調査開始前に、文化財保護法第92条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」を山形県教育委員会へ提出、受理された後「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を受け取り、発掘調査に着手することとなった。

2　発掘調査の経過と方法

A　発掘調査の経過

当初調査期間は平成18年8月21日～11月29日と予定されていたが、調査担当者の変更などの事由により、9月19日～11月30日（実働51日間）へと変更された。

調査開始日より重機にて表土除去を行い、同時に遺構検出作業を進めた。その際、南東端で調査区外へと遺構が続いて行くことが確認された。また、北側でも同様に遺構と遺物が確認されたため、文化財保護室との協議の上調査区を拡張した。当初予定した2,000平方mの調査区に対して、南東側に800平方m、北側に600平方mを加え、計3,400平方mとなった。調査区の拡張に伴い調査期間の見直しも行ったが、検出されている遺構数、出土が見込まれる遺物量が、想定した数量に至らないこともあり、期間については変更を行わないこととした。

遺構検出作業の後、10月4日から順次遺構の掘り下げ作業を開始した。各遺構ごとに遺構平面図・遺構断面図の作成、遺構の断面・完掘状況・遺物の出土状況の写真撮影などの記録作業も進めた。11月28日に業務委託による、ラジオコントロールヘリコプターを用いた空中写真撮影を行い、調査区完掘状況の全景・鳥瞰写真などを撮影し、11月30日にはすべての作業を終了し、現場を撤収した。

なお、11月19日（日曜日）には現地での調査説明会を開催し、南田遺跡での調査成果を一般公開した。参加人数は58名であった。

遺物の出土地点の記録については、遺構から出土したものは遺構と層位とグリッドにより、遺構外から出土したものは層位とグリッドによった。

B　グリッドの設定

調査区内に設置したグリッドの方角は平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）に沿う。グリッドの名称はハイフンによって繋げられた二組の数値（例：40 - 20）で表した。この数値は座標値を省略したものである。つまり、南北に増減するⅩ軸の数値の下２桁と、東西に増減するＹ軸の下２桁の数値の組み合わせでグリッドの位置が表されるようになっている。また、本来はⅩ軸、Ｙ軸とも負の値であるが、ここでは自然数の値に置き換えて使用した。例えば、Ⅹの値が“-140,640”、Ｙの値が“-92,920”を示すグリッドならば、“40 - 20”と表されることになる。グリッドは５ｍおきに設置しているので、隣接するグリッドに移動すると数値が“５”ずつ増減する。グリッド名が示す範囲は、Ⅹ軸とＹ軸の交点の第一象限となる５ｍ四方の25平方ｍである。

3　整理作業の経過

報告書刊行は平成20年度と予定されていたことから、整理作業は平成18年度の発掘調査終了後から２年４カ月にわたって実施した。

出土遺物には洗浄作業後に注記を行った。遺物には遺跡名称として“ミナミダ”を、さらに遺構名、層位、グリッドを記入した。なお、出土した年月日は省略した。次に復元、実測・拓本、墨入れ、写真撮影を行い、すべての作業が終了した後にコンテナへ収納した。

遺構の断面図・平面図は、業務委託によるデジタルトレースを行った後に編集した。

出土木製品のうち重要なものについては糖アルコール含浸法による保存処理を施した。糖はラクチトールを使用した。また業務委託による理化学分析では、放射性炭素年代測定、須恵器の胎土分析、花粉分析、樹種同定を行った。分析結果は第Ⅳ章に掲載した。

出土遺物は、報告書に掲載したものを別にして収納した。なお、報告書掲載遺物については図番号を注記に追加している。

第１図　調査区概要図（１：4,000）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

南田遺跡は、山形県鶴岡市大字清水新田字南田に位置する。調査区中心の経緯度は、北緯38度43分40秒、東経139度45分52秒、標高は14～15ｍである。市街地の西側に広がる田園地帯の中で、国道７号線の北側である。広大な庄内平野の南西端を占める地域であり、新潟県側から日本海沿岸部を北上すると、庄内平野への入り口部分となる。

山形県は村山地方、最上地方、置賜地方、庄内地方の四つの地方に分けられる。今回調査する地域である庄内地方の東部は、出羽山地と出羽丘陵、西部は庄内平野と砂丘地となり、南端の県境付近には、羽越山地の北端部に当たる金峰山地と高館山地がある（第３図）。

出羽山地の北部には標高2,236ｍの出羽富士と呼ばれる鳥海山が、南部には出羽三山に数えられる月山、羽黒山、湯殿山がそびえ立つ。出羽丘陵は、最上川が南北に二分するものの、庄内平野東縁を南北にのびており、南端には月山の火砕流が乗り上げている。庄内平野は、これらの山々に囲まれており、赤川の扇状地と、最上川の低い氾濫源、三角州性の低地、庄内砂丘から構成される（米地ほか1979）。

鶴岡市は、従来の鶴岡市、藤島町、羽黒町、櫛引町、朝日村、温海町を廃し、平成17年10月１日をもって新設合併された都市である。その範囲は東西約43km、南北約56km、総面積は1,311.49平方kmにおよぶ。土地の利用状況をみると森林が73％、農用地が14％、宅地が３％である。豊かな自然と起伏が少なく天与の穀倉地帯である庄内平野の恵みに育まれた地域といえる。

遺跡の西には赤川の支流である大山川が北流し、東には大山川の支流である湯尻川が同じく北流する。遺跡の南西には大山川氾濫原が、東には赤川扇状地が見られる。これら大山川・赤川をはじめとした、庄内平野に流れ込む幾多の河川によって形成された庄内河間低地に南田遺跡は立地している。大山川により形成された自然堤防から、やや東側にはずれており、集落遺跡の立地には適しない地形と言える。

2　歴史的環境

A　古墳時代

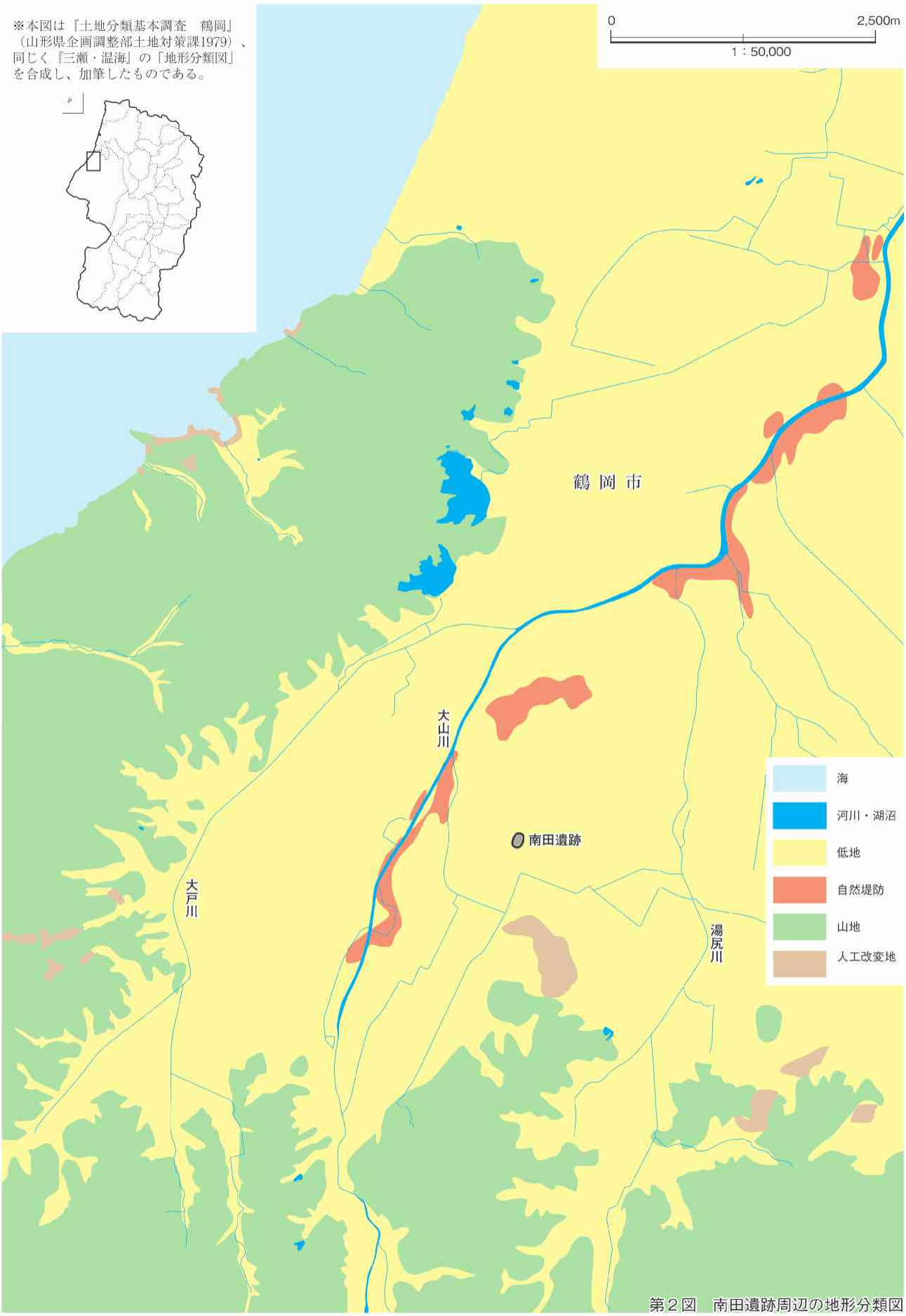
庄内地方で確認されている古墳時代の遺跡数は、村山地方などと比較して少ないと言われていたが、近年その数は増加しつつある。開発にかかわる緊急発掘調査時に、古代の遺物のほかに古墳時代の遺物が出土したことから同時代の遺跡として再認識される場合や、開発予定地内での分布調査が増加したためである。南田遺跡も同様に日本海沿岸東北自動車道の建設予定地と重複しており、平成17年度に古墳時代・奈良時代・平安時代の遺跡として新たに登録された（阿部ほか2007）。

庄内地方では、南田遺跡の周辺に古墳時代の遺跡が比較的多く確認されている。道路や工場の建設、ほ場整備などの開発が行われたことがその一因である。現在の鶴岡市の北西部に当たり、北の高館山地と南の金峰山地にはさまれた低地を大山川が北流する。大山川は緩やかに左岸側に膨らんでおり、遺跡の多くはその右岸に立地している。

庄内地方は古墳分布の日本海沿岸部における北限といわれている。鶴岡市菱津にも墳丘は失なわれているものの、６世紀前半のものと考えられている凝灰岩製の組合式長持形石棺が出土した菱津古墳（29）[※1]が存在する。発見されたのは明治43年、高館山地の南東縁に位置し、古墳からは南東に広がる平野部を見渡すことができる。この平野部に南田遺跡をはじめとする古墳時代の遺跡が数多く見られ、古墳の被葬者との関連が想起される。

南田遺跡から西へ15km、出羽丘陵西端の鶴岡市添川・鷺畑にある鷺畑山古墳群は、東北芸術工科大学歴史遺産学科考古学研究室の測量調査により、４世紀後半から５世紀中頃の円墳と方墳であることが分かった（民報藤島2004・2006）。

※１　遺跡名の後の括弧内の数字は「第３図　遺跡位置図」の番号に対応する。



第２図　南田遺跡周辺の地形分類図

B　古　　代

『続日本紀』によると和銅元年（708）に、庄内地方へ越後国出羽郡の設置が上申され、許可されている。しかし、在地には出羽郡設置に対して強く反発する勢力があり、和銅２年（709）には朝廷から兵が派遣されている。征夷は同年中に遂げられ、律令国家に組み入れられるようになった（新野 1982）。この時、兵器が出羽柵に運び込まれるという記事もあり、出羽郡の中心的な施設として、すでに出羽柵が存在していたと考えられている。

出羽柵の所在地については、明示する史料が無く、発掘調査でも有力な候補地は見つかっていない。鶴岡市大山に位置する大山柵が出羽柵と比定されたこともあったが、出土遺物の再検討により戦国時代末期～近世初期の遺構である可能性が高く、隣接する尾浦城（17）の北門跡と推定（佐々木 1997）されている。出羽柵の推定地としては、水運の利便が求められたとして、赤川水系の流域が挙げられている（新野 1982）。

和銅５年（712）には、出羽郡は越後国から分立して出羽国となり、さらに陸奥国から最上郡と村山郡が分割され編入された。和銅７年（714）には尾張・上野・越後・信濃などの国から 200 戸を割いて出羽国への移民が行われている。このような移民は、以後記事に幾度も見られるようになり、出羽国の開拓経営が進んだものと理解されるが、現在のところ８世紀第１四半期に該当する遺跡は庄内地方では確認されていない。８世紀中頃に至り、ようやく南田遺跡やその周辺の遺跡が散見されるようになる。

日本海沿岸東北自動車道にかかわり、南田遺跡を含む 10 個所の遺跡の発掘調査が行われることになり、上記の記事や出羽柵に該当する遺構の検出が大きく期待されたものの、南田遺跡では、８世紀第１四半期に該当する遺構・遺物は確認されなかった。ほかの遺跡についても同様であるが、なお整理作業は進行中であり、結論は各報告書の刊行を待たなければならない。

天平５年（733）、出羽柵は秋田村高清水岡（秋田市寺内の高清水丘陵）へ北進した。律令国家の枠に組み入れられた庄内平野もある程度安定したために可能になったと考えられる。

天平宝字４年（760）年頃には、出羽柵は秋田城と呼ばれるようになる。北方の蝦夷の平定も順調に進んだかに見えたが、８世紀から９世紀にかけての宝亀および延暦年間には、陸奥国・出羽国において蝦夷の叛乱が頻発する。大きいものでは、宝亀 11 年（780）に陸奥国で起こった「伊治公呰麻呂（これはりのきみあざまろ）の乱」があり、多賀城が陥落している。一向に鎮まらない蝦夷に対し、朝廷側もいよいよ本格的に軍を動員し、延暦 13 年（794）からは、坂上田村麻呂が鎮圧にあたった。さらに、弘仁２年（811）には文室綿麻呂の征夷が、現在の岩手県東北部を対象に行われた。

秋田城周辺も決して安定しているとはいえず、９世紀初頭には、ついに国府を秋田城から庄内平野へ戻すことになった。秋田城周辺は、土地が痩せていて収穫の良くないこと、北方に孤立して有事の際にも援軍を見込めないことが理由とされた。このとき戻された国府が酒田市の城輪柵跡である。

その後、天長７年（830）には秋田城付近で、嘉祥３年（850）には出羽国で大地震が起こった。さらに貞観 13 年（871）には鳥海山が噴火し、甚大な被害があったことが記録に残っている。これらは兵乱の前兆とされ、大物忌神社などの神位を進めるなどの対策がとられた。

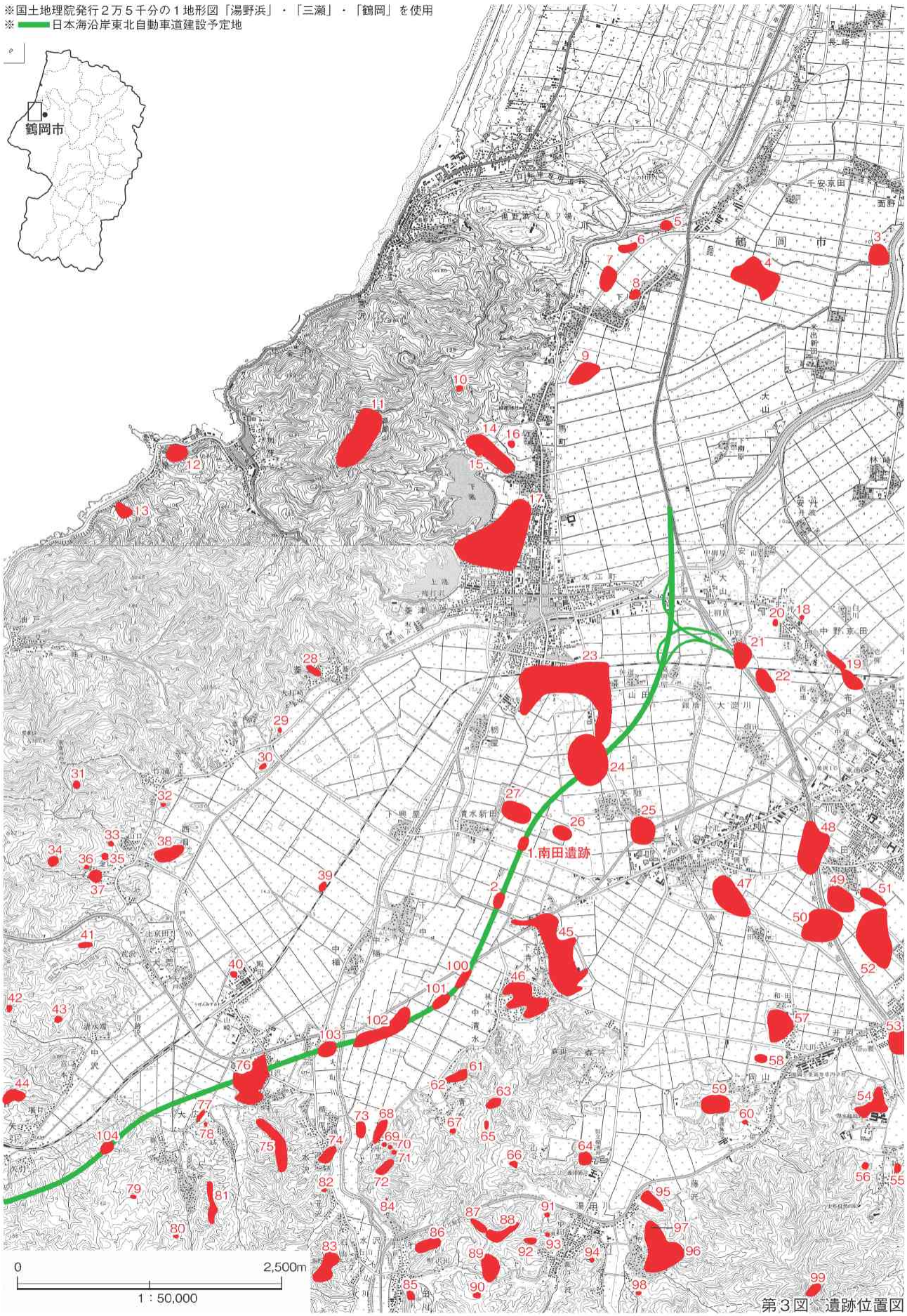
秋田城は、国府が庄内平野へ戻ったため、軍事的にも手薄になったと考えられる。また、先に挙げた自然災害なども背景として想起されるが、元慶２年（878）および、天慶２年（939）に秋田城下の俘囚が叛乱を起こした。鎮圧のため朝廷は、幾多の兵を動員したものの容易には叛乱を収めることができず、当事国である出羽国は大きく疲弊したものと考えられる。

これらの戦は、主に陸奥国、出羽国北半の秋田城周辺を舞台としており、同じ出羽国でも南半の庄内平野では大きな戦闘は行われていないようである。ただし、常に後方基地として戦を背後から支える立場であった。あまたの兵や兵糧を提供したため、税を減ずるなどして朝廷側もこれに応えている。

南田遺跡出土の古代に位置づけられる土器は８世紀中頃から、10 世紀第１四半期のものである。前述のとおり戦乱の絶えない時代とほぼ一致している。

C　周辺の遺跡

南田遺跡周辺では、これまで幾つもの発掘調査が行われており、かつての様相が明らかになりつつある。以下


※国土地理院発行２万５千分の１地形図「湯野浜」・「三瀬」・「鶴岡」を使用
※ 日本海沿岸東北自動車道建設予定地
鶴岡市
1.南田遺跡
0
2,500m
1：50,000

第３図　遺跡位置図

表1　遺跡位置図の遺跡名と時代・種別

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	南田遺跡	古墳～平安	集落跡	36	金山B墳基	平安・鎌倉	墳基	71	中里C遺跡	旧石器	遺物包含地
2	岩崎遺跡	古墳～平安	集落跡	37	金山館		館	72	中里館		砦
3	地ノ本遺跡	平安	集落跡	38	山口B遺跡	古墳～奈良	遺物包含地	73	中里D遺跡	平安・鎌倉	遺物包含地
4	五百刈遺跡	古墳	集落跡	39	谷地館		館	74	神楽館		館
5	下川2遺跡	平安～室町	散布地	40	水沢遺跡	平安	遺物包含地	75	水沢館		楯
6	西ノ川遺跡	平安	集落跡	41	荒沢須恵器窯跡	平安・鎌倉	窯跡	76	木の下館跡	縄文・中世	遺物包含層・城館跡
7	西谷地遺跡	奈良～室町	散布地	42	麓山遺跡	縄文	遺物包含地	77	大谷1	平安・中世	散布地
8	西田面遺跡	平安	集落跡	43	玉林坊跡	鎌倉	社寺跡	78	大広A遺跡	縄文	遺物包含地
9	八幡田遺跡		散布地	44	矢引館		楯	79	大広菊台遺跡	平安・鎌倉	祭祀遺跡
10	越中台窯跡	平安	窯跡	45	出張坂城		館	80	大広A遺跡	平安・鎌倉	墳基
11	高館		館	46	栗館		館	81	広浜館		楯
12	館山館		砦	47	囲地田遺跡	古墳・平安	集落跡	82	地蔵堂山経塚	平安・鎌倉	経塚
13	今泉館		楯	48	大道下遺跡	平安～近世	集落跡	83	石山館		楯
14	正法寺館		館	49	月記遺跡	平安・中世	集落跡	84	宮の前墳基	鎌倉	墳基
15	正法寺山遺跡	縄文	遺物包含地	50	後田遺跡	古墳～近世	集落跡	85	七日台館		楯
16	駒繁遺跡	平安	遺物包含地	51	大東遺跡	平安・中世	集落跡	86	大蔵院館		砦
17	尾浦城		城	52	地ノ内遺跡	平安・中世	集落跡	87	鎮台館		楯
18	中野京田遺跡	平安	遺物包含地	53	塔の腰遺跡	平安～室町	集落跡	88	石堂山館		楯
19	上大坪遺跡	古墳・平安	集落跡	54	赤坂館			89	大日坂館		楯
20	三軒在家遺跡	平安	遺物包含地	55	杉ヶ沢D遺跡	縄文	遺物包含地	90	大蔵台A遺跡	縄文	遺物包含地
21	中野遺跡	古墳～平安	集落跡	56	仏供沢窯跡	平安	窯跡	91	石清水遺跡	縄文	遺物包含地
22	畑田遺跡	古墳～鎌倉	集落跡	57	井岡城		館	92	深沢館		砦
23	山田遺跡	古墳～近世	遺物包含地	58	井岡遺跡	平安・鎌倉	遺物包含地	93	湯田川経塚	平安・鎌倉	経塚
24	矢馳A遺跡	古墳・平安	集落跡	59	岡山A遺跡	縄文・平安	集落跡	94	隼人山墳基	平安	墳基
25	助作遺跡	古墳	遺物包含地	60	岡山B遺跡	平安	遺物包含地	95	鍋倉館		館
26	矢馳B遺跡	古墳	遺物包含地	61	上清水館		砦	96	藤沢館		楯
27	清水新田遺跡	古墳～平安	遺物包含地	62	上清水B遺跡	室町	墳基	97	鍋鞍A遺跡	縄文	遺物包含地
28	菱津館		砦	63	柴館		楯	98	遊行上人墳基	室町	墳基
29	菱津古墳	古墳	古墳	64	鉢巻山館		楯	99	高館		砦
30	火打崎B遺跡	奈良・平安	遺物包含地	65	馬場山A遺跡	縄文	遺物包含地	100	玉作2遺跡	平安	集落跡
31	山口館		砦	66	馬場山B遺跡	縄文	遺物包含地	101	玉作1遺跡	弥生～中世	集落跡
32	西目経塚	室町	経塚	67	上清水A遺跡	縄文	遺物包含地	102	興屋川原遺跡	古墳・平安	集落跡
33	山口C須恵器窯跡	平安・鎌倉	窯跡	68	中里前	平安・中世	散布地	103	行司免遺跡	平安	集落跡
34	楯のそ			69	中里B遺跡	奈良・平安	遺物包含地	104	万治ヶ沢遺跡	縄文・平安	集落跡・生産跡
35	金山A須恵器窯跡	平安・鎌倉	窯跡	70	中里A遺跡	縄文	遺物包含地				

に主要な調査についてその摘要を記す。

最も近接している清水新田遺跡（27）では、６世紀第１四半期を中心とした竪穴住居10棟が検出された。遺物では、土師器の良好な資料が得られており、清水新田式が提唱された。また、滑石製の子持勾玉の出土も特記される（阿部ほか1988）。

６世紀第２四半期から第３四半期を中心とする矢馳Ａ遺跡（24）が南田遺跡の約700ｍ北北東に位置する。1987年に県営ほ場整備事業にともなう第１次調査、2005～2007年には日本海沿岸東北自動車道建設にともなう２～４次調が行われた。第１次調査では、主たる遺構として古墳時代の竪穴住居が24棟、平安時代の建物が７棟が検出された（阿部ほか1988）。２～４次調査でも同様の成果が得られたが、詳しくは報告書の刊行を待たなければならない。

南田遺跡の東、約700ｍの地点にある助作遺跡（25）は湯尻川の左岸に隣接する、６世紀第２四半期から第３四半期を中心とした遺跡である。1988年に国道７号線鶴岡バイパス建設工事にかかわる第１次調査（黒坂1990）、同年に県営ほ場整備事業にかかわる第２次調査（阿部1989）、2003年に鶴岡防災ステーション建設事業にかかわる第３次調査（黒坂ほか2004）が行われた。第１次調査で検出された竪穴住居ＳＴ９からは良好な一括遺物が出土しており、器種組成を示唆する重要な資料となった。第２次調査では竪穴住居が５棟、第３次調査では２棟検出されている。

鶴岡市山田にある山田遺跡（23）は220,000平方ｍに及ぶ広大な遺跡であり、これまで幾度も発掘調査行われてきた。1988年の県営ほ場整備事業にかかわる調査では、奈良・平安時代の遺物を主体として、ほかに古墳時代、中世のものが出土した（阿部1989）。1996～1999年には鶴岡大山工業団地造成事業にかかわる調査が行われた。古墳時代では５・６世紀の遺物が出土しており、中でも竪穴住居から続縄文土器（北大Ⅰ式）の鉢が出土したことは特筆される。平安時代では、田川郡に所属する「田川・甘祢郷」といった郷名が記載された木簡（平川ほか2001）が出土している。ほかに奈良時代後半や中世の遺物などが出土している（眞壁ほか2002・2004，松田ほか1999・2003）。1999年には、都市計画街路事業山田善宝寺線にかかわる発掘調査も行われた。６世紀後半、８・９世紀に属する遺構・遺物が検出された。川跡から駅家に関する木簡が出土し、延喜式に記載のない駅家・官道の存在が明らかとなったことが特筆される（須賀井2001）。

湯尻川以東では、東北横断自動車道酒田線にともなう発掘調査が行われている。1994年に調査された塔の腰遺跡（53）は青龍寺川左岸の河岸段丘に営まれた平安・鎌倉・江戸時代の遺跡である。鎌倉時代から現代まで使用されていた道路と、鎌倉時代の屋敷跡の検出が注目される（水戸1997）。

古墳時代前期に属する畑田遺跡（22）は1993年に調査され、竪穴住居３棟などを検出した。出土した土師器には北陸系のものが含まれていることから、人的・物的な交流が示唆される。同年に調査された中野遺跡（21）からは古墳時代前・中期、平安時代の遺構・遺物が検出された（眞壁1995）。

湯尻川以東のほ場整備事業では、1990年に囲地田遺跡（47）、1989年に大道下遺跡（48）、月記遺跡（49）、大東遺跡（51）などが調査されている。囲地田遺跡では、溝跡から６世紀第２・３四半期と奈良・平安時代の遺物が出土した（渋谷1991）。大道下遺跡では、中世の区画溝と掘立柱建物が１棟検出された。月記遺跡は中近世の遺跡であり、橋脚のほか「阿弥陀如来」、「南無阿弥陀仏」と墨書された塔婆の出土が特記される。大東遺跡は13～14世紀を中心とする。掘立柱建物４棟、井戸５基、区画溝などが検出されており、往時の集落構成を示す資料が得られた（野尻1990）。

大山川のさらに下流、庄内砂丘の手前にある鶴岡市下川でも発掘調査が行われている。県営ほ場整備事業にかかわる五百刈遺跡（４）は1993年に調査が行われ、古墳時代（６世紀中頃）の竪穴住居４棟、平安時代（９世紀後半）の掘立柱建物３棟などが検出された（佐藤ほか1994）。西谷地遺跡（７）は1993年の主要地方道酒田鶴岡線道路改良工事、1994年の県営ほ場整備事業にかかわり調査が行われ、主に奈良・平安時代の掘立柱建物や区画溝などが検出された。９世紀後半から10世紀に属する土師器甕を用いた合口甕棺が出土し、葬送形態を示す事例となった（斎藤1994，尾形1995）。同年、やはりほ場整備事業にかかわり西ノ川（６）遺跡が調査され、平安時代（９・10世紀）、中世（15世紀）を中心とする

遺構・遺物が検出された。特に平安時代の遺構で注目されるのは、総柱の掘立柱建物２棟が重複しており、建て替えを行ったことが分かることである。さらにこれらの建物には雨落ち溝が巡っている（尾形 1995）。

D　日本海沿岸東北自動車道にかかわる調査

南田遺跡以外の日本海沿岸東北自動車道建設にかかわる調査は９個所の遺跡で行われた。いずれも報告書作成中である。矢馳Ａ遺跡（24）、木の下館跡（76）、川内袋遺跡以外は、この度の道路建設に先立つ分布調査で発見された遺跡である。北からあげると最初に矢馳Ａ遺跡があるが、これについては既に触れた。次が南田遺跡であり、岩崎遺跡の順となる。岩崎遺跡（２）では奈良時代後半から平安時代の掘立柱建物、円面硯、風字硯などが検出された。玉作１・２遺跡（101・100）からは古墳時代に属する管玉の未製品やその原石が出土しており、玉造工房の存在を示唆する。興屋川原遺跡（102）からは古墳時代中期の竪穴住居のほか子持勾玉などが見つかっている。また、奈良・平安時代ではＬ字形に配置された大型の掘立柱建物群、多量の農具や食器などの木製品、鉄滓、鞴の羽口が検出され、公的施設にかかわるものと考えられている。行司免遺跡（103）も奈良・平安時代に属する。木棺墓５基、土壙墓３基、火葬にかかわる遺構１基などが検出されたことと、出土遺物から、葬送に関する祭祀が行われたとされている。木の下館跡（76）は戦国時代の山城であり、７段の曲輪が造成されている。万治ヶ沢遺跡（104）からは土師器の焼成遺構 20 基、炭窯３基、鉄滓などが検出され、土器、鉄の生産地であったことが判明した。川内袋遺跡は五十川右岸の舌状に張り出した丘陵の端部に立地している。竪穴住居４棟などを含む縄文時代前期の遺跡であるが、２点の奈良・平安時代の須恵器が出土している。庄内平野と新潟県側の日本海沿岸部を結ぶ経路を考える上では注目される発見といえる。

E　生産遺跡

生産遺跡としては、先に触れた万治ヶ沢遺跡のほか数個所で窯跡が見つかっている。高館山の麓にある越中台窯跡（10）、高館山地の南西麓にある山口Ｃ須恵器窯跡（33）、金山Ａ須恵器窯跡（35）、荒沢須恵器窯跡（41）などである。荒沢窯跡では現在まで 11 基の窯が確認（秋保 1992）され、出土する須恵器には８世紀後半のものも含まれる。他に内面が黒色処理された土師器、ロクロ成形された土師器などもあり、９世紀後半頃までは操業されていたと考えられる。これらの生産遺跡で作られた土器や鉄が、同時代の平野部の諸遺跡に供給されたことは論を待たないであろう。

F　延喜式内社

高館山地に南面する金峰山地の北端には、縄文時代中期の著名な遺跡である岡山遺跡（59・60）がある。江戸時代より石鏃などが出土することで好事家に知られており、明治 33 年には犬塚祐吉・酒井忠純によってはじめて発掘調査が行われた。1964 年から５次に及ぶ調査が致道博物館などにより行われた。1974 年には山形県教育委員会による調査が行われ、竪穴住居 15 棟などが検出された（佐藤 1975）。

岡山遺跡のそばには、かつて延喜式神名帳に記載された遠賀（おが）神社があった。現在は塔の腰遺跡に隣接する鶴岡市井岡に移っている。岡山という地名は遠賀山からきているとも言われている（誉田 1982）。延喜５年（905）に醍醐天皇の命により、藤原時平・忠平らによって編纂され、康保４年（967 年）に施工された延喜式神命帳に記載のある神社ということは、少なくともその以前から存在し、しかもほかより伝統と格式を備えていたと理解される。

出羽国には９座の延喜式内社がある。飽海郡の大物忌（おおものいみ）神社、月山神社、小物忌（おものいみ）神社、田川郡の遠賀神社、由豆佐売（ゆずさめ）神社、出羽神社、平鹿郡の鹽湯彦（しおゆひこ）神社、波宇志別（はうしわけ）神社、山本郡の副川（そえがわ）神社であり、うち大物忌神社と月山神社は大社として、ほかは小社とされている。山形県内において式内社が存在するのは庄内地方に限られるが、内陸地方にも『三大実録』に叙位の記録がある蔵王連峰刈田岳山頂の苅田嶺神社などがある。

南田遺跡とその周辺遺跡からは遠賀神社、湯田川の由豆佐売神社とも近い位置にあり、出羽神社も真東にそびえる羽黒山に鎮座している。社殿や位置などは既に過去のものとは異なっているかもしれないが、その存在自体は前述した遺跡などと同時代からのものである。当時の人々の精神・行動に影響を与えていたと十分に考えられる。歴史的背景の一つとして注意する必要があろう。

Ⅲ　調査の成果

1　概　　要

A　調査区の設定

調査区は日本海沿岸東北自動車道の敷設範囲に合わせて、山形県教育委員会の指示通りに設定したが、第Ⅰ章第２節に記したような経緯を経て変更された。幅41ｍ、長さ92ｍの長方形であるが、東端部は遺構・遺物の検出状況に合わせて調査区の拡張を止めたため、不整形となった。

遺構検出を行った地山面の標高は、13.7～13.5ｍである。遺構検出面は、調査区全面でほぼ平坦であったが、わずかに傾斜しており、南側から北側へ向かい低くなる。

調査区の西側は自動車道の敷設範囲外であり、調査区からも当然はずれる。調査区以南へは、近現代の溝ＳＤ１と川跡ＳＧ８のみが続くと見られる。調査区以北、以東も自動車道敷設範囲内であるが、遺構・遺物は調査区外へは続かないと見られる。川跡ＳＧ81が調査区の北端と東端で検出されているため、遺物の出土する岸部分は調査区内に収めた。

B　基本層序

調査区の西壁を図化（第24～26図）し、基本層序とした。遺跡の層序は、上から耕土、旧耕土、地山の順である。遺構検出面は、地山である78層以下の灰色系の砂・シルト・粘土とした。これらの地山の土質は、遺跡の立地する場所が沖積平野であることを示すものである。

C　遺構と遺物の分布

遺構の全体図を第20～23図に掲載し、各図の割付図第19図に示した。また、各図を統合した図は、付図として巻末に収納している。遺構の配置、遺構の番号などはこれらの図を参照されたい。

遺構の密度は、調査区北半部が濃く、南側に行くに従って薄くなる傾向を示す。特に、古墳時代および古代の遺構は、南端付近ではほとんど検出されなかった。

調査区北端、および東端で検出された川跡ＳＧ81が、調査区内では最も大きい川跡であり、ほかの溝・川跡はこの川跡ＳＧ81に注ぐように分布する。これらは調査区の南西側から発し、一定量の遺物を含んでいた。調査区内では、住居跡などは確認されなかったが、付近に明確な集落跡があるとすれば、その位置は調査区の西側とみて良いだろう。

調査区の北半部では、北西から南東へ向かう細い溝が多く検出された。これらは耕作溝と考えられるが、遺構内からは遺物が検出されなかったため、時期は判然としない。ただし、古代に該当する遺構と重複しており、いずれもこれらより新しいことが分かっている。

調査区中央部以北からは、小型の柱穴が数多く検出されているが、建物として組合うものは確認できなかった。中には柱根を残すものもあったが、ほかの遺物は出土しなかった。柱痕の年代測定結果（測定番号：PLD-7222）は、ほぼ平安時代に該当しており、簡単な建物類が存在したとみられよう。

2　遺　　構

A　溝　跡（第27図～31図）

溝跡ＳＤ１・７

調査区南端付近で検出された東西方向のＳＤ１と、これに接続する南北方向のＳＤ７は、いずれも近世～現代の遺物を含んでいる。ＳＤ１は、第24図調査区壁土層図ａ－ａ’の16～20層に該当する。旧耕土である25層を切り込み、同じく旧耕土である12層の下位の層位となっている。ＳＤ１が機能していた時点、さらに廃棄後も周囲では耕作が行われていたことを示す。これらの状況からＳＤ１は水田に水を回すための用水路と考えられる。

第28図の断面図に示したとおり、ＳＤ１は、溝にある程度の堆積物が溜まった後に、人為的な埋め戻しが行われたことが分かる。また、溝の掘り直しが行われていることも観察される。ａ－ａ’、ｄ－ｄ’の１～４層、

ｂ－ｂ’、ｃ－ｃ’の１～３層が掘り直し後の溝である。

ＳＤ７は、ＳＤ１に対してほぼ直交して接続している。断面図からは、掘り直し以前のＳＤ１と同時に使用されていたと考えられる。ＳＤ１とともに埋め戻され、掘り直しは行われなかった。17 世紀前半の陶磁器などが出土している。

溝跡ＳＤ２・６

調査区の南半部で検出された、幅 20 ～ 56cm、底面の標高 13.52 ～ 13.6 ｍを測る南西から北東へ延びる溝である。溝の北端部は、幅１ｍまで広がる。ＳＤ２とＳＤ６は、幅・底面の標高・覆土の特徴から同一の溝であると考えられる。

ＳＤ２の北端部では、より古い溝ＳＤ 78 と重複し、中央部付近では、より新しい溝ＳＤ１と重複している。溝の両端部どうしの高低差に乏しく、水流の方向は判然としないが、南高北低の周辺地形と、第 30 図ｂ－ｂ’の断面図に見られる北東側へ傾斜した土層の堆積状況から、北東方向であったと推察される。

溝跡ＳＤ３・４・128

調査区の南半部で検出された、幅 38 ～ 80cm、底面の標高 13.34 ～ 13.49 ｍを測る南北方向の溝である。これら３条の溝は、幅・底面の標高・覆土の特徴などが類似しており、本来は一繋がりの溝であると考えられる。溝ＳＤ２・６と同様に、周辺地形の状況から、南から北へと水が流れた推察される。ＳＤ３の断面ｈ－ｈ’付近から遺物が多く出土している（写真図版３）。遺物の出土地点の土層は、土器のほかに炭・焼土を多く含み、覆土も均質ではない。溝の廃絶時に土器・炭・焼土などを棄てたものと考えられる。

溝跡ＳＤ 78

調査区中央部を縦断する現行の用水路の東端部で重複している溝である。南東から北西方向に延び、幅 56 ～ 150cm、底面の標高 13.4 ～ 13.63 ｍを測る。より新しい溝 SD ２と重複している。底面の標高差から、水流があったとすれば、南東から北西へ向かったと推察される。断面ｐ－ｐ’付近から遺物が炭とともに多く出土した（写真図版４）。溝の廃絶時に棄てられたものと考えられる。

溝跡ＳＤ 82

調査区中央部で検出された東西方向の溝である。西端部で南西へ屈曲し川跡ＳＧ 130 と重複する。また、東端側は川跡ＳＧ 81 と重複するが、いずれもその新旧は判然としない。幅 20 ～ 25cm、底面の標高 13.53 ～ 13.6 ｍを測る。溝は西へ向かって傾斜している。遺物は出土しなかった。

Ｂ　川　　跡（第 27・28，32 ～ 34 図）

川跡ＳＧ８

調査区南端部で検出された南北方向の川跡である。覆土には多量の植物遺体が含まれていた。東へ大きく湾曲した個所のみ遺存しており、これより北側では検出されなかった。第 24 ～ 26 図調査区壁土層図ａ－ａ’では確認されており 48 ～ 52 層に該当する。土師器坏の底部を転用した紡錘車 114 が出土している。ほかに出土遺物はなく、紡錘車 114 も遺構検出面直上での出土であり、表土・旧表土からの混入の疑いがある。

川跡ＳＧ 81

調査区中央部の東端から北端部で検出された、古墳時代と平安時代の遺物を内包する川跡である。その全体は検出していないため、川幅、深さは確認できなかったが、調査区内で検出された川跡の中では最も規模が大きく、ほかの川跡、および溝などの本流、あるいは水源となっていた可能性がある。

検出した中で最も川幅が広い部分は 4.8 ｍ、底面の標高は 12.06 ｍを測る。ただし、削平により当時の地表面は失われているため、本来はもっと川幅は広いはずである。第 33 図ａ－ａ’の３層、ｂ－ｂ’５層、ｃ－ｃ’の３・５層、ｄ－ｄ’２～５層からは、火山灰と見られる土が検出された。十和田湖を起源とする火山灰の可能性がある。

十和田ａ火山灰は、青森県と秋田県にまたがる十和田湖が、延喜 15 年（915）に噴火した際に噴出したものと考えられている。十和田ａ火山灰を含む層と、より上位の層からは、10 世紀に属する土器が、より下位の層からは古墳時代の土器が出土しており、火山灰の降下年代との矛盾はないが、なお詳しい分析が行われていないため注意を要する。遺物の取り上げ時は、10 世紀に属する土器を包含する層を１層、古墳時代に属する土器を包含する層を２層とした。遺物観察表に記した出土層位はこの層順に拠る。

ＳＧ 81 は、南から北へ流れた後、調査区の北端部で

西へ向きを変えている。河川の湾曲部の外側は、増水時の被害が大きいため、集落などは形成されなかったと想定されるが、南田遺跡は湾曲部の内側に位置するため、増水時でも大きな被害は無かったのではないだろうか。南田遺跡に住居などの遺構が存在したとすれば、やはり調査区の西側とみて間違いはなさそうである。

川跡ＳＧ 130

調査区中央部で検出された、最大幅 3.5 ｍを測る、古墳時代と奈良時代の遺物を内包する川跡である。最大幅は、第 25 図調査区土層図ａ－ａ’の 55 ～ 58 層に示されている。底面の標高は 13.14 ～ 13.26 ｍを測り、北西から南東へ向かって低くなる傾斜を示す。調査区中央部の用水路によってＳＧ 130 の南端部は失われている。また、これより以南では検出されなかった。地表面の削平によるものとすれば、検出されている個所より高位に川跡が存在したと考えられ、やはり川の流れる方向は南東から北西方向となる。

第 34 図の川跡ＳＧ 130 の断面図ｅ－ｅ’、ｇ－ｇ’の１層には十和田ａ火山灰の可能性がある土が含まれている。同層以下からは奈良時代より新しいものは出土していないため、火山灰の降下時期とは矛盾しない。

出土遺物は断面ｆ－ｆ’から断面ｇ－ｇ’の間にかけて特に多く出土した。中には８世紀中頃までさかのぼる土器も含まれている。

川跡ＳＧ 141

調査区中央部で検出された東西方向の川跡である。東端部で川跡ＳＧ 81 とする。最大幅は 1.8 ｍ、底面の標高は 13.5 ～ 13.6 ｍを測る。遺物は出土しなかった。

川跡ＳＧ 248

調査区北部で検出した古墳時代の遺物を内包する東西方向の川跡である。流れは南側に膨らむ。東端部から先は検出されなかったが、本来は北へ延びて川跡ＳＧ 81 と接合したものと推察される。最大幅は第 25 図調査区土層図ａ－ａ’の 67 ～ 70 層に示されている 4.28 ｍ、底面の標高の最低値は 13.3 ｍである。

川跡ＳＧ 356

調査区北部、川跡ＳＧ 81 の南岸に接する個所で検出された深さ 20cm ほどの浅い川跡である。古墳時代と平安時代の遺物を含む川跡ＳＧ 81 に切り込まれているため、川跡ＳＧ 356 の方が古いことが分かる。ただし、ＳＧ 81 の出土遺物の中でも古墳時代に属するものは、川跡ＳＧ 356 の遺物とほぼ同じ年代である。古墳時代においては、同じ川であった可能性が高い。

Ｃ　土　　坑（第 35・36 図）

土坑ＳＫ５

調査区中央部で検出された、径 80cm、深さ 36cm を測る円形の土坑である。木製の箸 126 が出土している。

土坑ＳＫ 142

調査区南半部で、溝ＳＤ２と溝ＳＤ３に挟まれた個所で検出された長方形を呈する土坑である。東端部は、現代の暗渠により失われている。また、底面は全体的に平滑であるが、東側は一段低くなっており、その高低差はおよそ 20cm である。特に４層から炭・焼土・土器が多く出土している。廃絶時に棄て込まれたものであろう。

土坑ＳＫ 143

土坑ＳＫ 142 の西側に隣接して検出された不整長方形を呈する土坑である。深さ 15cm ほどの浅い土坑であるが、中央部には深さ３cm の溝がある。フイゴの羽口 109 が出土している。ＳＫ 142 で出土した多量の炭・焼土と併せて考えると、両遺構には有機的な関連があり、鍛冶などに関する遺構の可能性が指摘される。

土坑ＳＫ 145

土坑ＳＫ５と同様に円形を呈する土坑である。径 60cm、深さ 20 を測る。２層には十和田ａ火山灰と見られる土が含まれている。出土した遺物はない。

Ｄ　井　戸　跡（第 36 図）

井戸跡ＳＥ 80

深さ 180cm を測る井戸と考えられる遺構である。井戸枠は無かった。４層には多量の植物遺体が含まれていた。ロクロ成形による土師器の甕 110 が出土した。

Ｅ　柱　　穴（第 37 ～ 43 図）

58 基を検出し、図化した。そのほとんどの柱穴で柱痕を確認している。いずれも小型で、掘り込みも浅いが、柱穴ＳＰ 131 と柱穴ＳＰ 164 には柱根が残っていた。調査区中央部から北に向かって検出され、南西部分ではほとんど検出されなかった。柱穴の配置が、建物跡として認識されるものは見られなかった。柱穴の規模も小さく、

また、川に隣接した個所でもあるため、常置するような建物があったとは考えにくい。検出された多数の柱穴、ピット群は、柵や杭列などの簡便な構造物が何度も作り替えられた結果として残されたものと推察される。

3　遺　　物

A　遺構出土の遺物

溝跡ＳＤ１（第 55 図 111 ～ 113）

３点とも 17 世紀前半に属する。111・112 は初期伊万里の皿、113 は砂目段階の肥前陶器皿である。

溝跡ＳＤ２（第 44 図１・２）

１は須恵器の坏類、欠損のため、底部形態は不明である。２は成形にロクロを使用している土師器の小型の甕である。

溝跡ＳＤ３（第 44 図３～ 11）

３は底部を欠損する須恵器の坏類、４は須恵器の有台坏である。５も有台坏であるが、４とは異なるタイプである。口径は 107mm と小さく、器厚も薄い。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。底部から急角度に立ち上がり、直線的に外傾して口縁部へと続く器形である。６は上半部を欠損した壺、高台が付く。長頸壺と見られる。

７・９は土師器の小型の甕、両者とも体部下半を欠損している。８は土師器の甕、底部のみ遺存している。

10・11 は管状土製品とした。土錘と呼ばれる土製品である。棒状の型上に粘土を固定し焼成したものと考えられる。いずれも端部が欠損する。

溝跡ＳＤ４（第 44 図 12）

12 は土師器の鉢である。

溝跡ＳＤ 78（第 45 図 13 ～ 21）

ＳＤ 78 は溝ＳＤ２より古いことが、両者の切り合い関係から確認されているものの、遺物に明確な時期差は認められない。13 ～ 17 は須恵器、18 ～ 21 は土師器である。13 の底部は欠損しており高台の有無は不明である。14 は有台坏、15･16 は坏蓋である。15 の外面には「物」と読める墨書が確認された。物部氏に関連する墨書と推察される[※1]。17 の甕の内面には青海波の当て具痕、外面には平行叩きの痕跡が残る。

18 ～ 21 は甕、18・19 は長胴甕、20・21 は小甕と考えられる。18 は土坑ＳＫ 142 出土の土器片と接合する。19 の底部は平底で、切り離しは回転糸切りによる。21 の頸部は、屈曲し口縁部へ向かって直線的に外傾する。内外面ともロクロナデによる調整のみ施されるため、凹凸が器面に残る。

溝跡ＳＤ 322（第 45 図 22）

古墳時代の台付甕の台部であると考えられる。内面には輪積み痕が見られる。ＳＤ 322 は耕作溝と考えられるが、ほかの耕作溝も含め出土遺物は非常に少ない。出土遺物から遺構の時期を判断するのは難しい。

溝跡ＳＤ 325（第 45 図 23）

ロクロ成形による土師器の無台坏が１点出土している。川跡ＳＧ 81 に類似する器形が認められる。

川跡ＳＧ８（第 55 図 114）

土師器無台杯の底部を利用した紡錘車である。中心部に径６mm の穿孔が施される。底部の切り離しは回転糸切りによる。

川跡ＳＧ 81（第 46 ～ 48 図 24 ～ 48）

古墳時代（24 ～ 27）と９～ 10 世紀（28 ～ 48）に属する土器が出土している。

24 は口縁部が屈曲し外傾する坏である。25 は内面に黒色処理が施された坏、24 と同様に口縁部が外傾する。底部は丸底で、その外面の中央部には細かい剥離や摩滅が見られる。使用痕と見られる。26 は小型の甕、口縁部が大きく外傾する。27 は体部上半に最大径を持つ甕、底部は小さい平底である。

28・29 は須恵器の無台杯、底部の切り離しは回転糸切りによる。28 は焼成が良く灰褐色を、29 は焼成が悪く灰白色を呈する。28 は底部からの立ち上がりが丸みを帯びて緩やかであるが、29 は急角度となる。

30 ～ 41 は土師器の無台杯である。いずれもロクロを使用して成形され、底部の切り離しは回転糸切りによる。35 の口縁部にはススが付着し、内外面とも被熱により表面が剥離している。灯明皿としての使用が想定される。38･39 は、体部が内湾しながら急角度で立ち上がるため、口径は小さくなる。38 の口径は 84mm である。40・41 の内面に黒色処理とヘラミガキが施される。42 は内面に黒処理の施された土師器の有台坏、内外面にヘラミガキが施される。低い高台は削り出しによる。43 ～ 45 は甕、43・44 は長胴甕、45 は小甕の底部と考えられる。

※1　三上喜孝氏のご教示による。

46は須恵器の長頸壺で、頸部と体部は別作りであり、それぞれ成形した後に接合している。また、体部外面の下端には格子状と見られる叩き板の痕跡が残る。47・48は甕、47の内面には青海波の当て具痕、外面には平行叩きの痕跡、48の内面には平行の当て具痕、外面には平行叩きの痕跡がある。

川跡ＳＧ130（第49・50図49～74）

49～53が古墳時代、54～74が８世紀に属する土器である。49は小型の坏、内面に黒色処理とヘラミガキが、外面にはハケメが施される。50・51の手づくね土器の内面には、粘土の輪積み痕と成形時の指頭痕が明瞭に残る。52は口縁部に片口が設けられた鉢、53は口縁部が直立する甕である。

54～64は須恵器である。54・55が無台杯、底部の切り離しは両者とも回転ヘラ切りによる。54の底部には「×」のヘラ描きが施される。56～61が有台坏、58の口径は160mmを測る。60は転用硯である。内外両面とも硯面として使用されたため摩滅し、外面には墨痕が見られる。61は小型、薄手の有台坏である。62･63は坏蓋、口径の大きさから56などの有台坏と組合う。64は甕の口縁部である。

65～73は土師器の甕である。いずれも成形にロクロは使用していない。口縁部はヨコナデ、体部内外面にはハケメを施している。71・73では、底部外面にもハケメがおよぶ。65～67・68・69・72は頸部が強く屈曲し、口縁部が外傾する。70の頸部の屈曲は弱く、口縁部の外傾も少ない。胴部の最大径は、頸部直下となるものが大半であるが、72・73は体部の中央となる。74は土師器の鉢、成形にロクロは使用していない。

川跡ＳＧ248（第51～52図75～86）

ＳＧ248からは古墳時代の土器が出土した。75は器高が194mmを測る直口壺、外面と口縁部内面にヘラミガキが施される。底部は丸底で、胴部中位に最大径を有する。川跡ＳＧ81から出土した土器片と接合する。76は口縁部に段を有する壺である。77～86は甕、口縁部にはヨコナデ、体部内外面にはハケメが施される。77は底部外面までハケメがおよぶ。スス・コゲなど使用による付着物が残るものが多い。器形、寸法など多岐にわたり、一様でない。

川跡ＳＧ356（第53図87～100）

ＳＧ356もＳＧ248と同様に、出土した遺物は古墳時代に限られる。87～89が土師器の坏、内外面にヘラミガキが施される。89の底部は平底で、外面には木葉痕が残る。90は内面に黒色処理の施された土師器の坏、頸部が強く屈曲し口縁部が外傾する。91は脚部を欠損する高坏、内面にヘラミガキが施される。口縁部はほぼ直立し、端部でわずかに外傾する。92・93は頸部を持たない壺、口縁部が短く直立する。94～100は甕、口縁部にはヨコナデ、体部の内外面にはハケメが施される。外面にススが付着するものが多い。

土坑ＳＫ142（第54図101～108）

101～104が須恵器、105～108が土師器である。101・102は器形は異なるが両者とも有台坏である。101は、底部を欠損するが、口縁部の開き、薄手の器厚が類似することから、溝ＳＤ３出土の有台坏５と同様の器形と考えられる。102は身の深いタイプの有台坏である。体部は底部から緩やかに立ち上がり、口縁部まで直線的に外傾する。103・104は坏蓋である。

105はロクロ成形によらない甕、口縁部のヨコナデにより体部との境に段を有する。口縁部は緩やかに外反し、体部の上半部に最大径を有する。体部の膨らみは小さく、底部に向い直線的にすぼむ。106はロクロ成形による甕、頸部で急角度に屈曲し、口縁部が直線的に外傾する。口唇部はわずかに上方につまみ上げられる。体部には内外面ともカキメが、体部下半の外面にはヘラケズリが施される。107は小型であるが、器形は106に類似する。痕跡が不明瞭だが、106と同様の器形であり、ロクロによる成形と推察される。108は鉢の体部、退化した把手が残る。内外面にカキメが施される。

土坑ＳＫ143（第54図109）

フイゴの羽口が１点出土した。先端部は被熱により、ガラス化し黒色を呈する。

井戸跡ＳＥ80（第54図110）

ロクロを使用して成形した土師器の甕が１点出土している。頸部が強く屈曲し、口縁部が直線的に外傾する。

Ｂ　遺構外出土の遺物

表土、旧表土、あるいは遺構検出中に出土した遺物の内、９点を図化した。土器のほかに土製品、砥石がある。

115～119は須恵器である。無台杯115の出土した00

-25グリッドでは、溝ＳＤ２と溝ＳＤ78が検出されている。本来はどちらかの遺構に属する遺物であった可能性が高い。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。撹乱から出土した無台杯116の底部の切り離しは回転糸切りによる。付近に同様の遺物が出土する遺構は無い。117の底部は欠損するが、身の深いタイプの有台坏と考えられる。102と同様の器形と見られる。118は壺の肩部で、長頸壺の可能性が高い。出土したグリッドには川跡ＳＧ130がある。本来はＳＧ130に包含されると考えられる。119は甕の口縁部、外面に櫛描き波状文が施される。

120は古墳時代の土師器の壺であり、口縁部に段を有する。川跡ＳＧ248出土の76と同類の壺である。

121の土製品は、両端部を欠損した土製耳環の可能性がある。122･123は砂岩製の砥石、欠損した個所以外は、全て砥面である。123には２個所の穿孔がある。

Ｃ　木　製　品

124・125は斉串、頭部が三角形状に切り落とされる。124は井戸ＳＥ80､125は川跡ＳＧ81からの出土であり、両者とも水にかかわる祭祀に用いられたと考えられる。126～128は箸、両端を削り落として成形する。129は有台皿、130は無台皿である。131は曲物の底板である。側板を留めるための木釘が、側面の４個所に打ち込まれる。

4　小　　結

遺構の切り合いと出土した遺物から、その変遷を追ってみたい。古墳時代の遺物が出土した主な遺構は、川跡ＳＧ81、ＳＧ130、ＳＧ248、ＳＧ356である。いずれも川跡であり、出土する遺物に年代的な差違は認められない。また、隣接する清水新田遺跡とも類似する遺物である。清水新田遺跡出土の土師器は、共伴する須恵器の年代から、６世紀第１四半期（阿部ほか1988）とされており、南田遺跡でも同様の年代が与えられると考えられる。

８世紀中頃の遺物が出土する遺構は、川跡ＳＧ130のみである。有台坏56～59の口径、高台の取り付け位置が底部の末端付近となることなどから、山三賀Ⅱ遺跡の土器編年のⅡ期（８世紀第２～３四半期）に当たる（坂井ほか1989）。ただし、ＳＧ130の出土遺物は、$Ⅱ_1$期と$Ⅱ_2$期の中間的様相であるため、８世紀中頃とする。

溝ＳＤ２、ＳＤ３、ＳＤ４、ＳＤ78、土坑ＳＫ142出土の遺物は８世紀第４四半期～９世紀第１四半期と考えられる。有台坏５・101・102などは９世紀第１四半期から目立つようになる器種である（阿部ほか1999）。井戸ＳＥ80から出土した甕110は、ＳＫ142出土の甕と類似していることから、同じ年代幅でとらえたい。

川跡ＳＧ81から出土した古代の土器（28～48）は９世紀第４四半期から10世紀第１四半期と考えられる。坏類の内28・29は須恵器であるが、ほかは成形にロクロを使用した土師器となる。底部の切り離しは須恵器・土師器とも糸切りによる。口径が130mm前後にまとまり、木原遺跡土坑ＳＫ3302などの出土遺物と類似（植松2008）する。

ＳＧ81からは十和田ａ火山灰が堆積したと見られる土層が検出されている。上記の土器群はこの層と、より上位の層から出土している。堆積した火山灰が、十和田湖を起源とし、かつその降下年が延喜15年（915）であれば、ＳＧ81出土の平安時代の土器の主体は、10世紀第１四半期以降のものとなる。火山灰の分析は行っていないため判然とせず、今後の課題としたい。

古墳時代の遺構は川跡のみであり、生活の痕跡に乏しい。集落の本体を調査区の外に求めるほか無いであろう。８世紀中頃の遺構も川跡ＳＧ130のみであり、やはり調査区内に生活の本拠はない。８世紀第４四半期～９世紀第１四半期の遺構は溝と土坑と井戸である。いずれも人為的な遺構であり、ようやく生活の痕跡が現われる。９世紀第４四半期～10世紀第１四半期の遺構は再び川跡のみとなる。出土遺物は少なくないが、生活の痕跡は見られない。調査区内で検出された小柱穴群は、遺物が含まれないことから年代が明確でないが、人為的な遺構が目立つ時期に属するとの見方が自然であろう。ここでは、８世紀第４四半期～９世紀第１四半期にその多くが構築されたと考えている。

□□□□□□□□　　□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□	□□□	□□□	□	□	□	□	□	□	□	□
	□□□			□□					□□	□□
	□□□			□□	□				□□	□□
	□□□			□□					□□	□□
	□□□			□□	□□				□	□□
	□□□			□□	□□				□	□□
	□□□			□□					□	□□
	□□□			□□	□				□□	□□
	□□□			□□	□□				□□	□□
	□□□			□□	□				□□	□□
	□□			□□	□□□□				□□	□□
	□□□			□□	□□□□				□□	□□
	□□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□				□	□
	□□			□□	□				□	□□
	□□			□□					□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□				□□	□□
	□□			□□	□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□
	□□			□□	□□				□□	□
	□□			□□	□□				□□	□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□
	□□			□□	□□				□□	□□
	□□			□□	□				□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□	□□
	□□			□□					□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□	□□□□□				□□	□□
	□□			□□	□□□□□				□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□	□□				□□	□
	□□			□□	□□				□	□□
	□□			□□	□□				□	□□
	□□			□□	□□				□	□□
	□□			□□	□□				□	□□
	□□			□□	□□				□	□□
	□□			□□	□□				□	□□
	□□			□□	□				□□	□□
	□□			□□	□				□□	□□
	□□			□□					□	□□
	□□			□□					□□	□□

□			□			□	□
□□	□	□	□□	□	□		
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□	
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□□	
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□	
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□		
	□□			□□	□□□□□	□□□□□□□□	
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□□	
		□□□□					
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□□	
						□	
						□	
	□						
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□	
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□			
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□	□□□□□□□	
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□	□□□□□		
□□□□	□□□□□□		□□□□	□□□			
□□	□□		□□□□				
		□□□□			□□□□		
□□□□	□□		□□□□	□□□□		□□□□	
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□□	
					□□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□			
□□□□	□□□□		□□□□	□			
□□□□	□□□□	□□□□				□□□□	
□□□	□□□□		□□□	□□□□		□	
□□□			□□□	□□		□	
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□□□□□□	
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□			
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□	
	□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□	□□□□	□□□□□□□□	
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□	
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□			
	□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		
	□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□□	
□□□□	□□□□□□		□□□□□□	□□□			
	□□□□□			□□□			
□□□□	□□□□	□□□□	□□□	□□	□□	□□□□□	
□□□□□	□□□□□	□□					
□□□□□	□□□□□	□□					
□□	□□						
			□□□	□□□□□			
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□	□□□□□□□	
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□	□	
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□		
		□□□□			□□□□□		
		□□□□			□□□□□	□□□□□□□□□□	
	□□□□	□□□□		□□□□	□□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□		
□□□□			□□□□				
□□□	□□	□□	□□□	□□		□□□□□□□□□	

□	□□□	□□□	□	□	□	□	□	□	□	□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□	□□		□		□□	□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□			□		□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□□			□		□□	□□
	□□			□□	□				□□□□□	□□
	□□			□□			□		□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□	□□
	□□			□□					□□□	□□
	□□□			□□	□□				□	□□
	□□□			□□	□□				□	□□
	□□□			□□	□				□□	□□
	□□□			□□	□				□□	□□
	□□□			□□	□□				□□	□□
	□□□			□□	□□				□□	□□
	□□□			□□	□				□□	□□
	□□□			□□					□□□	□□
	□□□			□□	□□□□□				□□	□□
	□□□			□□	□□				□□	□□
	□□□			□□□□						
	□□□			□□□□						
	□□□			□□□						
	□□□			□□	□□			□	□□	□□
				□□	□□				□□	□□
				□□	□□				□□	□□
				□□	□□				□	□□
			□	□□					□	□
				□□					□	□□
				□□					□□	□□
				□□	□□□□				□□	□□
				□						
			□	□						
	□□□			□□	□		□	□	□□□□□	
	□□			□□	□			□	□□□□□	
	□□□□			□□			□	□	□□□□□	
	□□			□□			□	□	□□□□□	
	□□			□□			□	□	□□□□□	
	□□			□□	□□					
	□□			□□	□□					
	□□			□□	□□□□			□		

□			□			□	□
□□	□	□	□□	□	□		
□□□	□□		□□□	□□			
□□□	□□		□□□	□□			
□□□	□□	□□	□□□	□□			
□□□	□□□□□		□□□	□□			
	□□		□□□	□□		□	
	□□	□□		□□	□□		
□□□	□□		□□□	□□		□	
	□□	□□		□□	□□	□	
□□□□□	□□□□□		□□□□□	□□□□□			
□□□□	□□□□□□□	□□		□□□□			
			□□□				
□□□	□□	□□	□□□	□□	□□	□□□□	
□□□	□□		□□□□□	□□		□	
	□□	□□		□□□□□□		□	
□□□	□□		□□□□	□□		□□□□	
□□□	□□		□□□	□□		□□□□	
□□□	□□		□□□	□□		□	
			□□□			□	
	□□	□□		□□		□	
□□□	□□		□□□	□□		□	
				□□			
□□□	□□□□	□□□□	□□□	□□□□	□□□□		
			□□□□	□□□□			
		□□□□				□□□□	
□□□□		□□□□	□□□	□	□		
	□□□□		□□□			□□□	
□□□	□□□□	□□□□			□□□□		
□□□			□□□□	□□□□			
□□□	□□□□		□□□	□□		□□□□	
	□□		□□□	□□		□□□□	
□□□	□□		□□□	□□			
□□□	□□□□		□□□	□□□			
	□□	□□		□□		□	
	□□	□□		□□	□□□□		
	□□	□□		□□	□□		
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□□□	
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□			
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		□□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		
	□□			□□			
□□□□	□□□		□□□□			□	
□□□			□□□				
	□□			□□		□□□	
						□□□□□□□□□□□	
□□□□	□□		□□□□	□□		□	
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□		□□□□□	
		□□□□		□□□□		□□□□□	
		□□□□		□□□□□	□□□□	□□□□	
		□□□□			□□□□	□□□□□□□□□□	
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□	□□□□□		
□□□□	□□□□	□□□□	□□□□		□□□□		
□□□□	□□□□		□□□□	□□□□			
	□□□□			□□□□		□□□	
□□□□			□□□□			□□□□□□□□	
□□□			□□□				
						□□□□	
						□□□□□□	
						□□□□□□□□	
						□□□□□□□	
						□□□□□□□	
						□□□□□□□	
						□□□□□□	

Ⅳ　理化学的分析

1　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・佐々木由香

はじめに

南田遺跡より検出された試料５点について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。試料調製は山形、瀬谷、Lomtatidze、Jorjoliani が、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は佐々木、伊藤が作成した。

試料と方法

測定試料の情報、調製データは表３のとおりである。

試料は炭化材（いずれも形状不明の破片）３点、生材（柱根・形状不明の木片）２点の計５点である。試料の部位はいずれも不明である。ＳＧ 81 は川跡で、出土遺物の年代観から上層が平安時代（10 世紀頃）、下層が古墳時代（６世紀頃）と想定され、測定試料の炭化材は平安時代（10 世紀頃）のものと考えられている。ＳＰ 34 は柱穴で、試料は柱根より採取された。また年代試料と同一試料で樹種同定が行われた（詳細は別報参照）。ＳＰ 34 の年代は不明である。ＳＥ 80 は井戸？と考えられ、年代は不明である。ＳＧ 356 とＳＧ 248 は川跡であり、遺物の年代観から古墳時代（６世紀頃）と考えられている。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5 ＳＤＨ）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結　果

表４に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行い、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、第４～８図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はＡＤ 1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（ｙｒＢＰ）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標

□□□□□□□□□□□

□□□	□□□□	□□□□	□□	□
	□□□□□□ □□□	□□□□□□□□□□□□ □□□□□□□□ □□ □□□	□□□□□□□ □□□□□□□□□□□	□□□□□
	□□□□ □□□□	□□□□□□□□□□□　□□ □□□□□□□□ □□ □□□	□□□□□□□ □□□□□□□□□□□	□□□□□
	□□□□	□□□□□□□□□□□ □□□□□□□□ □□ □□□□	□□□□□□□ □□□□□□□□□□□	□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□□ □□
	□□□□ □□□□	□□□□□□□□□ □□□□□□□□ □□ □□□	□□□□□□□ □□□□□□□□□□□	□□□□□
	□□□□ □□□□	□□□□□□□□□ □□□□□□□□ □□ □□□	□□□□□□□ □□□□□□□□□□□	□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□	□□	□□ □　□□	□□□□□□□□□□□□□□□□ □□□□□□	□□□□□□□ □□□□
			□□ □□	□□ □□
			□ □□	□□
			□□ □□	□□
			□□ □□	□□
			□□	□□

準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正　暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

考　察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

２σ（95.4％の確率）の暦年代範囲で整理すると、次のとおりである。

ＳＧ 81 から出土した炭化材（PLD - 7221）の年代範囲は 1380-1430calAD（54.2%）と 1310-1360calAD（41.2%）で、２つの年代範囲はほぼ同じ確率で、中世の年代範囲を示し、想定年代より新しい年代範囲であった。

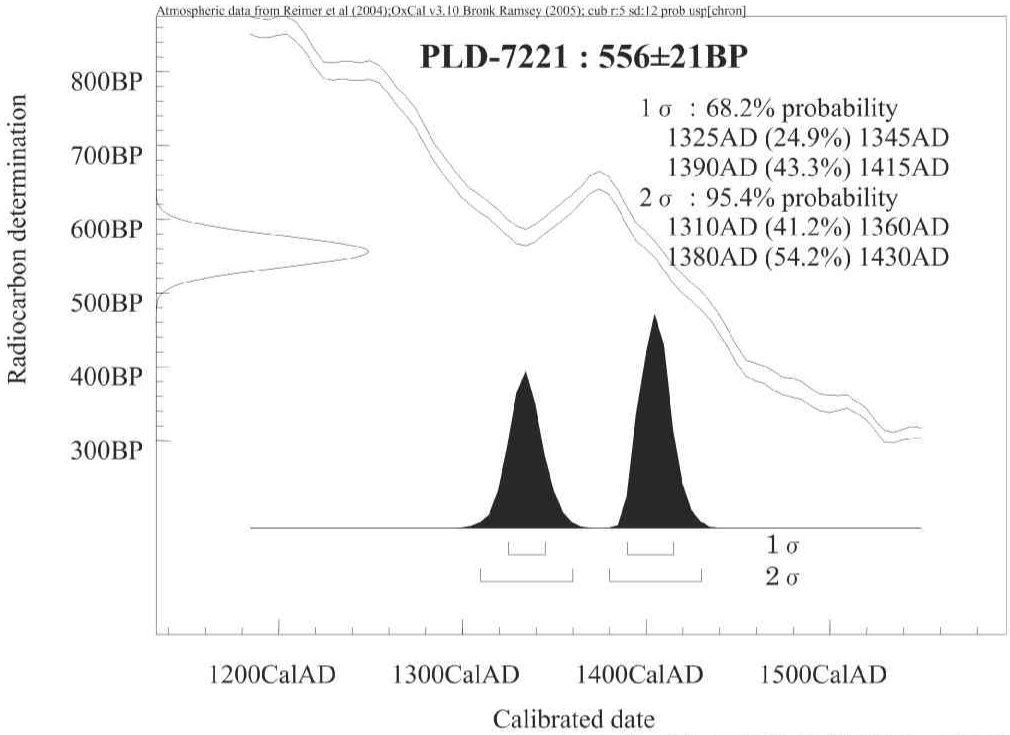
ＳＰ 34 とＳＥ 80 から出土した生材は比較的近い年代範囲を示した。ＳＰ 34 から出土した生材（PLD - 7222）は 770 - 900calAD（95.4%）で、ＳＥ 80 から出土した生材（PLD - 7223）は 670 - 780calAD（95.4%）の年代範囲を示した。この２点は古代の年代範囲で、PLD - 7222 は概ね平安時代、PLD - 7223 は概ね奈良時代に含まれる年代範囲を示した。なお、760 - 880calAD 前後に相当する暦年較正曲線が平坦なため、この時期で暦年較正を行うと得られる年代幅は広くなる（第６図）。

ＳＧ 356 とＳＧ 248 から出土した炭化材は比較的近い年代を示した。ＳＧ 356 から出土した炭化材（PLD - 7224）は 430 - 600calAD（95.4%）で、ＳＧ 248 から出土した炭化材（PLD - 7225）は 420 - 550calAD（95.4%）の年代範囲であった。この２点は古墳時代中期から後期、５世紀前半～７世紀にかけての範囲を示し、想定年代が含まれる年代範囲であった。なお、400 - 520calAD 前後に相当する暦年較正曲線が平坦なため、この時期で暦年較正を行うと得られる年代幅は広くなる（第７・８図）。

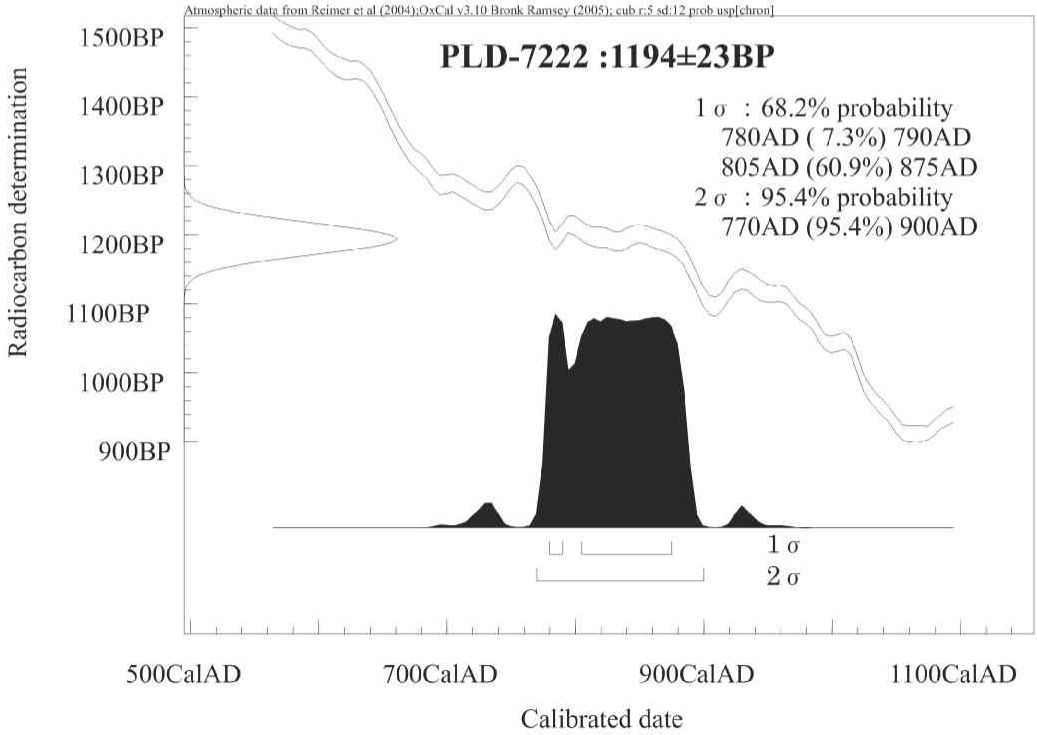
試料の材は最外年輪以外で部位不明であるため、試料の採取位置が最外年輪（＝伐採年）から何年離れているかによって、伐採年より古い年代値が得られている可能性を考慮する必要がある。

参考文献

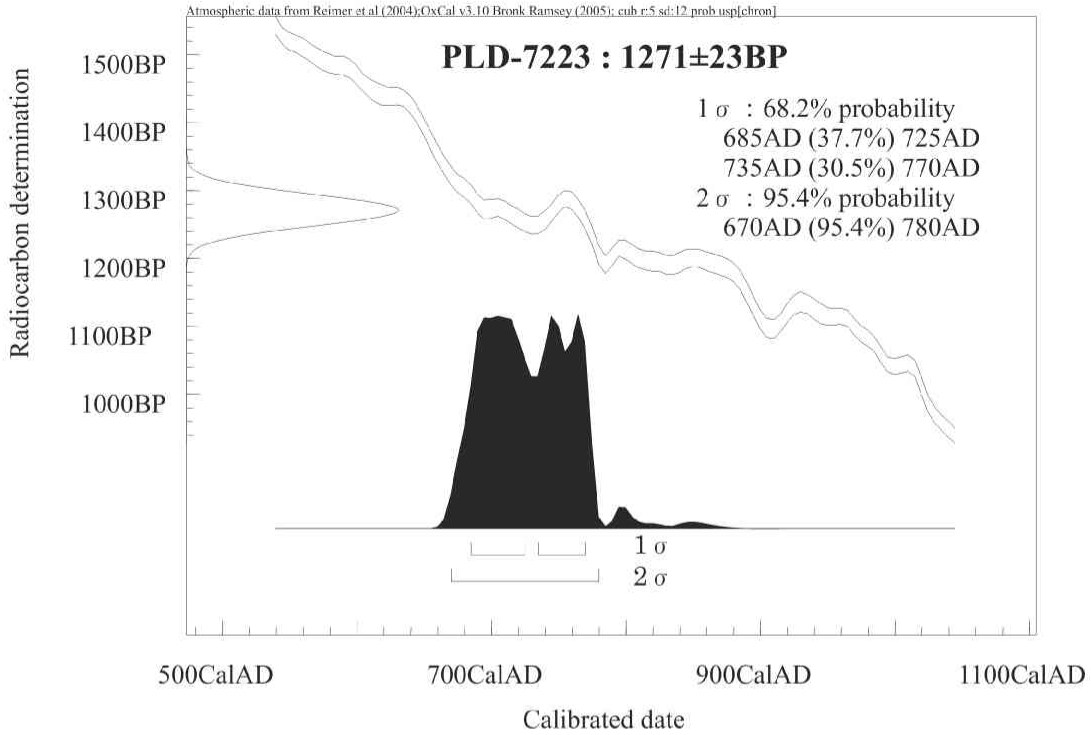
Bronk Ramsey C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.
Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代 , 3-20.
Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer.（2004）IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.



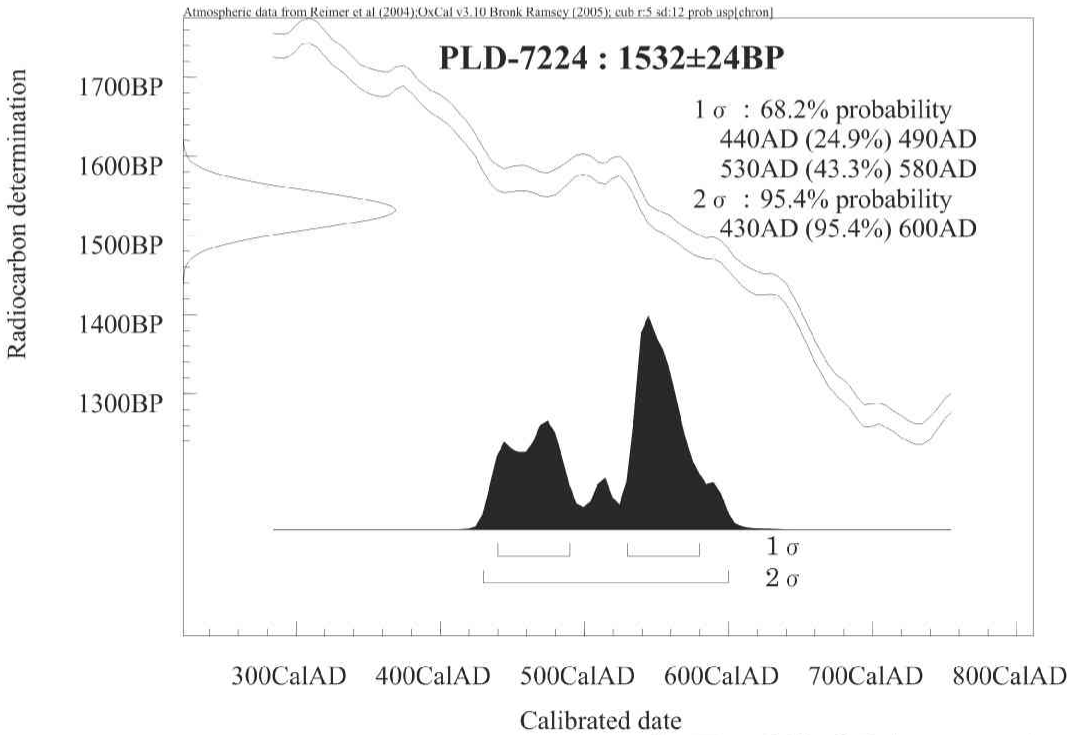
第４図　暦年較正結果（PLD - 7221）



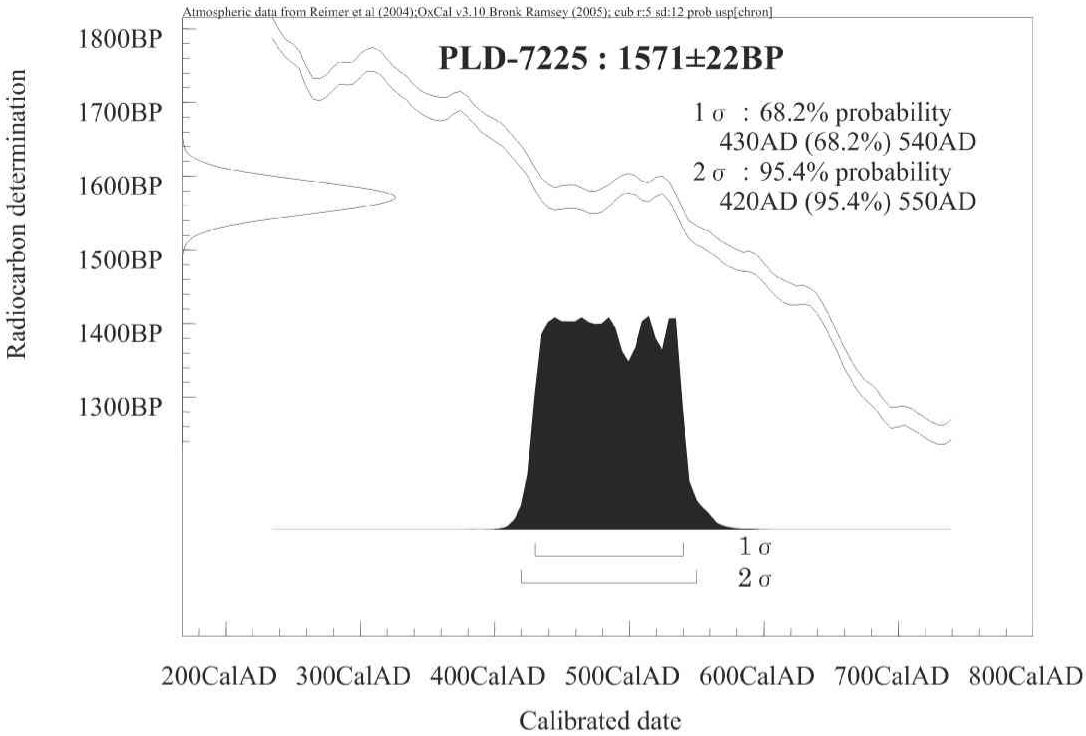
第５図　暦年較正結果（PLD - 7222）



第６図　暦年較正結果（PLD - 7223）



第７図　暦年較正結果（PLD - 7224）



第８図　暦年較正結果（PLD - 7225）

２　須恵器の胎土分析

藤根久・竹原弘展・長友純子（パレオ・ラボ）

はじめに

ここでは、奈良時代（８世紀後半）の須恵器について、蛍光Ｘ線分析および鉱物分析を行い、須恵器胎土の特徴について調べた。

試料と方法

試料は、南田遺跡から出土した須恵器15点である。器種は、坏及び坏と見られる破片が７点で内２点は有台坏、蓋が３点、甕が４点、瓶類と見られる破片が１点である（表５）。蛍光Ｘ線分析と鉱物分析の試料は共通の試料を用いた。

蛍光Ｘ線分析　分析は、必要量を各試料から岩石カッターで切り取り、胎土以外の部分を除去するために表面を削った後、精製水にて超音波洗浄を行った。試料は、セラミック乳鉢で粉末にして、0.9000 g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $Li_2B_4O_7$ と、リチウムメタボレイド $LiBO_2$ を８：２の割合で調製した融剤4.5000 gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラー（NT - 2000型：（株）東京科学製）にて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作成した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光Ｘ線分析装置MagiX（PW2424型）を使用した。定量は、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計14種類を用いた検量線法による定量分析を行った。定量元素は、酸化ナトリウム Na_2O、酸化マグネシウム MgO、酸化アルミニウム Al_2O_3、酸化ケイ素 SiO_2、酸化リン P_2O_5、酸化カリウム K_2O、酸化カルシウム CaO、酸化チタン TiO_2、酸化マンガン MnO、酸化鉄 Fe_2O_3 の主成分10元素と、ルビジウム Rb、ストロンチウム Sr、イットリウム Y、ジルコニウム Zr の微量成分４元素の計14元素である。

薄片法による鉱物分析　試料は、以下の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。

（１）試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これは、スライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。（２）研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。（３）精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げと

して、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各試料は、偏光顕微鏡を用いて、薄片全面について重鉱物について同定・計数した。なお、微化石類（珪藻化石、骨針化石）や大型の岩石片の特徴について観察・記載を行った。

結　果

蛍光Ｘ線分析　表６に、各須恵器試料の蛍光Ｘ線分析の結果を示す。

主な成分について見ると、最も多く含まれる酸化ケイ素 SiO_2 が 68.02 - 77.82%、酸化アルミニウム Al_2O_3 が 16.00 - 23.70%、酸化鉄 Fe_2O_3 が 2.24 - 3.86%、酸化カリウム K_2O が 1.28 - 2.75%、酸化チタン TiO_2 が 0.69 - 1.40%、酸化ナトリウム Na_2O が 0.45 - 1.22%、酸化マグネシウム MgO が 0.55 - 2.55% であった。その他の酸化リン P_2O_5、酸化カルシウム CaO、酸化マンガン MnO は１％以下であった。微量元素のルビジウム Rb が 72 - 135ppm、ストロンチウム Sr が 54 - 117ppm、イットリウム Y が 28 - 34ppm、ジルコニウム Zr が 143 - 203ppm であった（表６）。

試料 No. １や No. ２あるいは No.10 は、酸化ケイ素 SiO_2 が多く酸化アルミニウム Al_2O_3 が少ない。これら以外は全体的には比較的良くまとまった値を示している。

薄片法による鉱物分析　須恵器胎土中の重鉱物組成を調べるために、プレパラート全面を精査･観察した。なお、珪藻化石や骨針化石などの微化石類や岩石片についても記載した。

表７の岩石片および微化石類の出現頻度は、◎が特徴的に多い、○が多い、△が少ない、空欄は検出されないことを示す。

No. １：高温焼成によるガラス化し、重鉱物組成はジルコンのみ検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が見られた。

No. ２：重鉱物組成は、ジルコンと雲母類が検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が特徴的に多く見られた。

No. ３：高温焼成によるガラス化し、重鉱物組成はジルコンのみ検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が見られた。また、骨針化石が含まれていた。

No. ４：高温焼成によるガラス化が著しく、重鉱物組成は雲母類のみ検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が見られた。

No. ５：高温焼成によるガラス化が著しく、重鉱物組成は雲母類のみ検出された。

No. ６：高温焼成によるガラス化が著しく、重鉱物組成は雲母類のみ検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が多く、深成岩類の粒子が見られた。

□□□□□□□□□□□□□□□

□□	□	□□□	□	□	□	□	□
	□□			□	□		□□
	□□			□	□		
	□			□□	□□□□□□□□		
	□			□	□		
	□□		□□	□	□□□□□□□□		□□
	□□		□□	□	□□□□□□□		
	□			□	□		
	□		□□□	□□□□□	□□□□□□□□□□		
	□			□□	□□□□□□□□		□□
	□			□□	□		
	□		□□	□	□		
	□			□□□□□□□□□□	□□□□□□□□		
	□			□□	□		
	□		□	□□	□□□□□□□□		
	□			□□□□□□□	□		

□□□□□□□□□□□□□□□

□	□□															
		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□				
	□□															
	□□															
	□□□															
	□□															
□□																
□□																

No. 7：高温焼成によるガラス化が著しく、重鉱物組成はジルコンのみ検出された。岩石片は、堆積岩類や深成岩類の粒子が見られた。

No. 8：高温焼成によるガラス化し、重鉱物組成は輝石類のみ検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が見られた。

No. 9：高温焼成によるガラス化が著しく、重鉱物組成は輝石類のみ検出された。岩石片は、深成岩類の粒子が多く、堆積岩類の粒子が見られた。また、骨針化石が含まれていた。

No.10：高温焼成によるガラス化し、重鉱物組成は輝石類と角閃石類が検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が見られた。

No.11：高温焼成によるガラス化が著しく、重鉱物組成は輝石類のみ検出された。

No.12：高温焼成によるガラス化し、重鉱物組成は雲母類のみ検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が見られた。

No.13：重鉱物組成は輝石類、ジルコン、角閃石類が検出された。岩石片は、堆積岩類と深成岩類の粒子が見られた。また、骨針化石が含まれていた。

No.14：高温焼成によるガラス化が著しく、重鉱物組成は輝石類と角閃石類のみ検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が見られた。

No.15：高温焼成によるガラス化し、重鉱物組成は輝石類と角閃石類のみ検出された。岩石片は、堆積岩類の粒子が見られた。

考　察

奈良時代の須恵器について、蛍光X線分析および鉱物分析を行った。

薄片の顕微鏡観察では、全体的に高温焼成されているためガラス化が著しく重鉱物は溶融している須恵器が多かった。なお、試料No. 3やNo. 9およびNo.13の須恵器胎土中には骨針化石が含まれていたことから、水成粘土を利用していることが理解される。

蛍光X線分析による化学組成では、試料No. 1やNo. 2あるいはNo.10は、酸化ケイ素 SiO_2 が比較的多く、酸化アルミニウム Al_2O_3 が比較的少ない。これら以外の須恵器では、いずれの元素も比較的良くまとまった値を示している（表6，第9・10図）。

□□□□□□□□□□□□

□□	□□	□□□□□□					□□□			□□□		□□□□
		□□□	□□□	□□□	□□□	□□	□□□	□□□	□□□	□□□	□□□	
												□□□□□
												□□□□□
												□□□
	□□											□□□
	□□											□□□
												□□□
	□□□											□□□□□
												□□□
												□□□□□
	□□											□□□
												□□□□□
												□□□
												□□□□□□

第11図に、酸化ケイ素 SiO_2 - 酸化アルミニウム Al_2O_3 の分布図を示す。酸化ケイ素 SiO_2 は、石英や長石などの鉱物や岩石に特徴的に多く含まれる成分であり、混和材としての砂粒分を指標する成分である。また、酸化アルミニウム Al_2O_3 は、粘土鉱物を構成する主な成分であり、粘土分を指標する成分である。この分布図は、全体として逆相関を示すが、左上に位置する試料 No. 6 などは、粘土分が多く、砂粒分が少ないことを示している。一方、右下に位置する試料 No. 2 などは、砂粒分が多く、粘土分が少ないことを示している。

小村・藤根（2001）は、酸化ケイ素 SiO_2 - 酸化アルミニウム Al_2O_3 分布図が粘土と砂粒の混合割合を示していることを示した。さらに、東海地域における山茶碗の分析では、燃焼室内の最終焼成のような同一材料を使用した場合には、直線上に分布すると同時に、狭い範囲に分布することを示している。このことは、直線上に分布する試料は、粘土と砂粒の混合割合が異なることを示し、粘土の種類あるいは砂粒組成といった胎土材料の違いを示すものではないことを示している。

対象とした須恵器は、全体的に直線分布していることから、粘土の種類あるいは砂粒組成について大きな違いはないと考えられる。

試料 No. 1 や No. 2 あるいは No.10 は、砂粒分が多く、粘土分が少ない。その他の須恵器試料は、比較的まとまった直線分布を示していることから、粘土分と砂粒分の混合割合も大きな違いはないと考えられる。なお、器種による成分の違いは見受けられなかった。

E　おわりに

南田遺跡出土須恵器 15 点を蛍光 X 線分析および薄片観察を行った結果、以下のことが理解された。

（1）全体的に高温焼成されているためガラス化が著しく、重鉱物は溶融している須恵器が多かった。

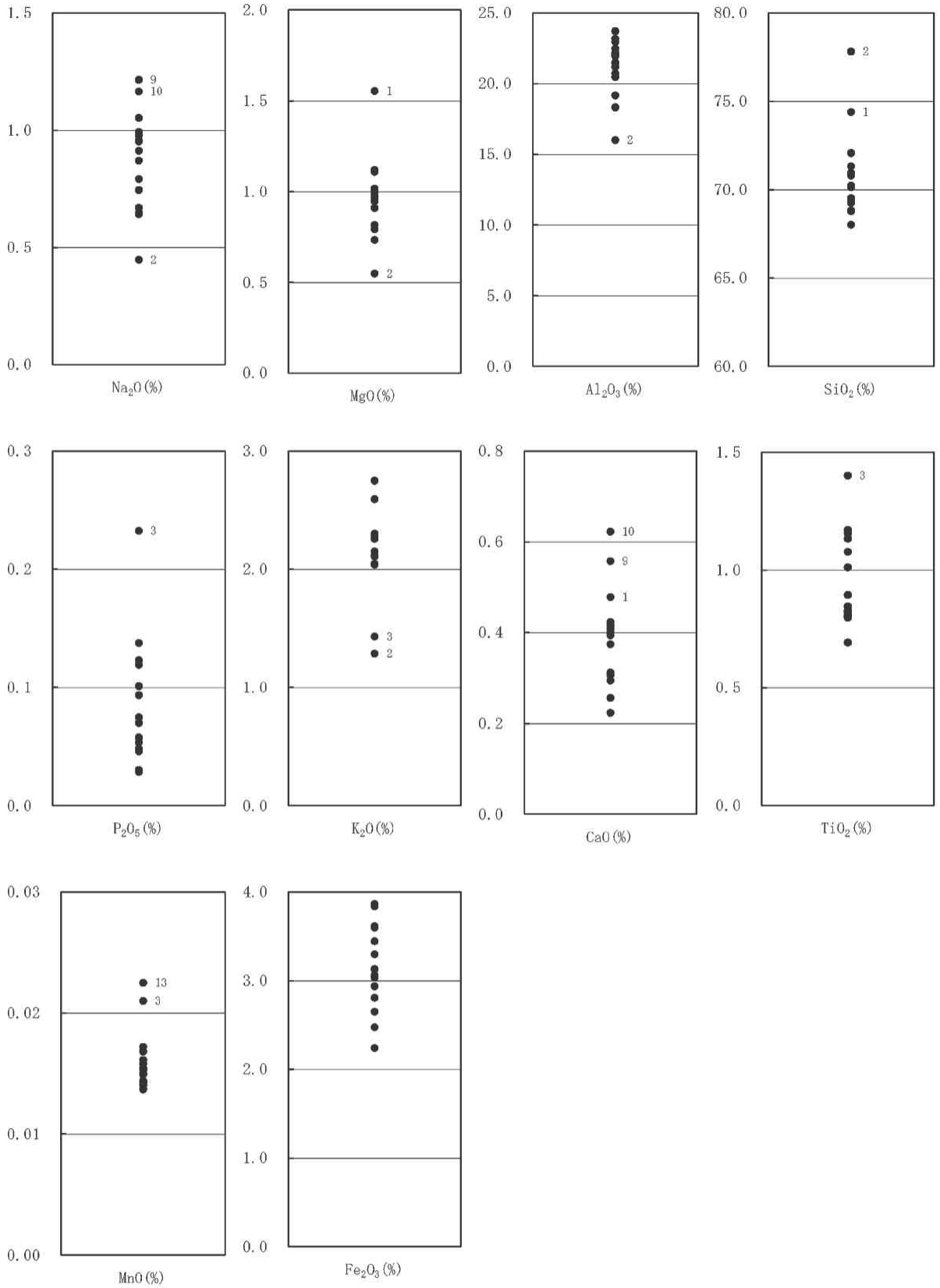
（2）化学組成の検討では、粘土または砂粒の組成に違いは見当たらなかった。

（3）化学組成の検討では、試料 No. 1 や No. 2 あるいは No.10 の須恵器は、砂粒分が多く粘土分が少ない。

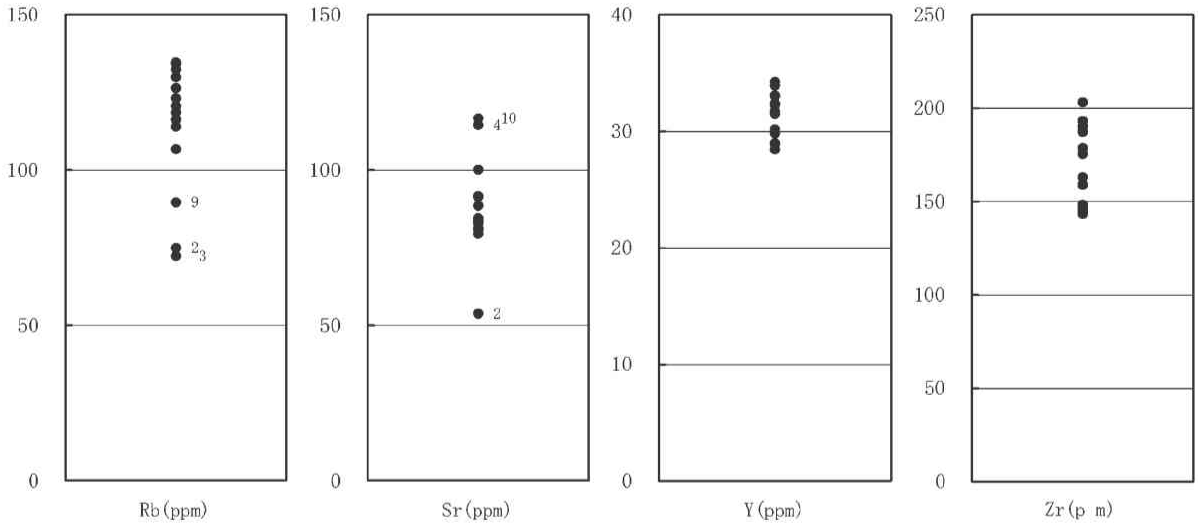
（4）化学組成の検討では、器種による成分の違いは見受けられなかった。

引用文献

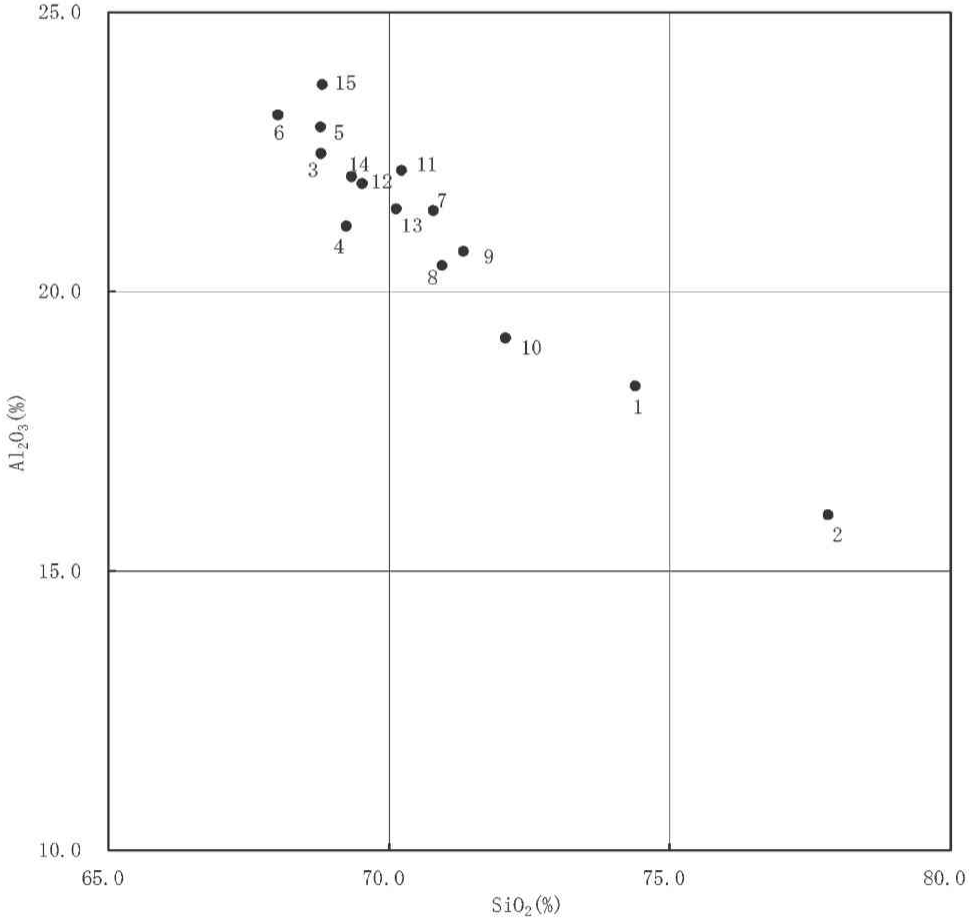
小村美代子・藤根久（2001）須恵質土器胎土中の砂粒分の化学的評価．日本文化財科学会第 18 回大会研究発表要旨集、114-115.


1.5
1.0
0.5
0.0
9
10
2
Na_2O(%)
2.0
1.5
1.0
0.5
0.0
1
2
MgO(%)
25.0
20.0
15.0
10.0
5.0
0.0
2
Al_2O_3(%)
80.0
75.0
70.0
65.0
60.0
2
1
SiO_2(%)
0.3
0.2
0.1
0.0
3
P_2O_5(%)
3.0
2.0
1.0
0.0
3
2
K_2O(%)
0.8
0.6
0.4
0.2
0.0
10
9
1
CaO(%)
1.5
1.0
0.5
0.0
3
TiO_2(%)
0.03
0.02
0.01
0.00
13
3
MnO(%)
4.0
3.0
2.0
1.0
0.0
Fe_2O_3(%)

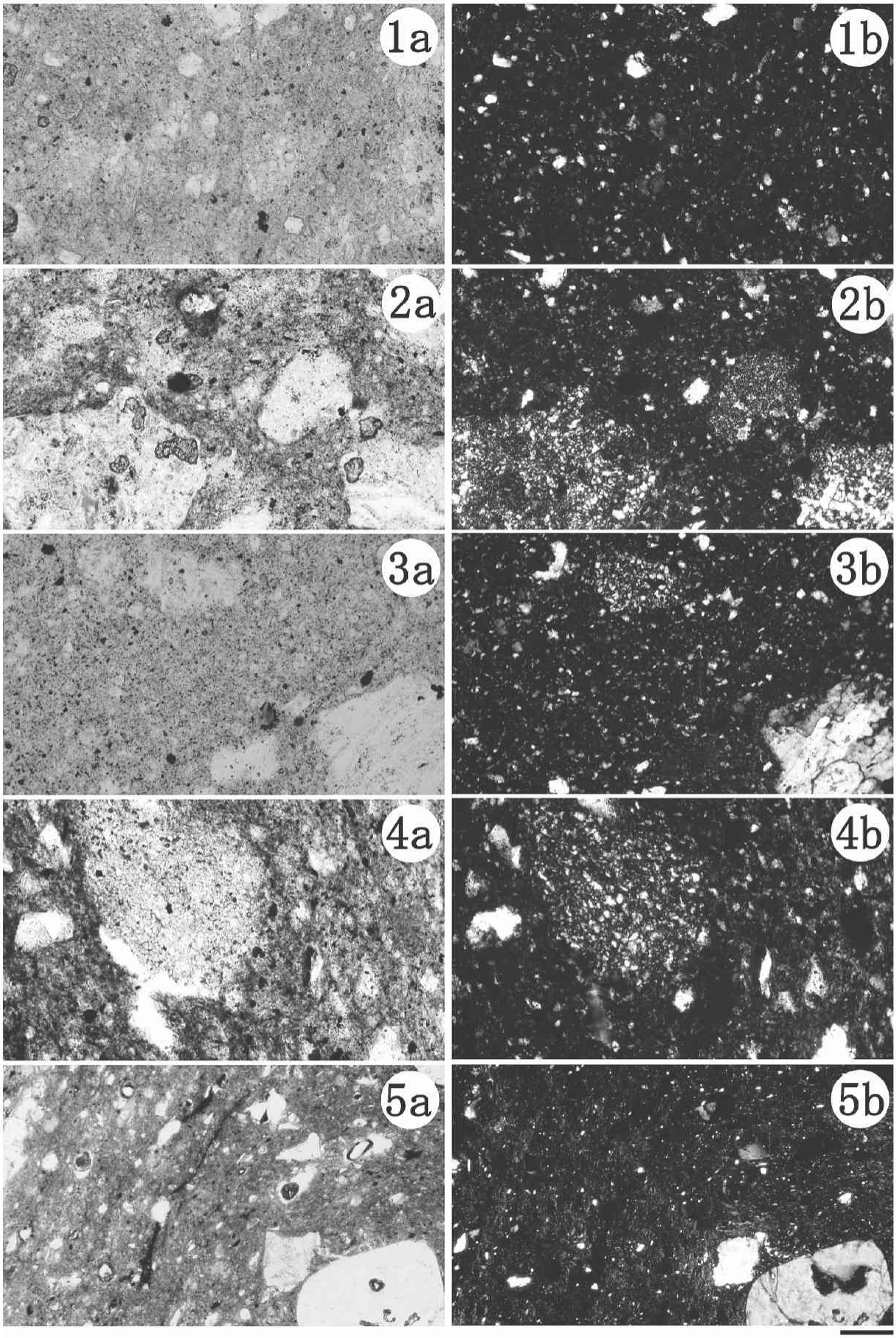
第９図　各元素定量値（１）



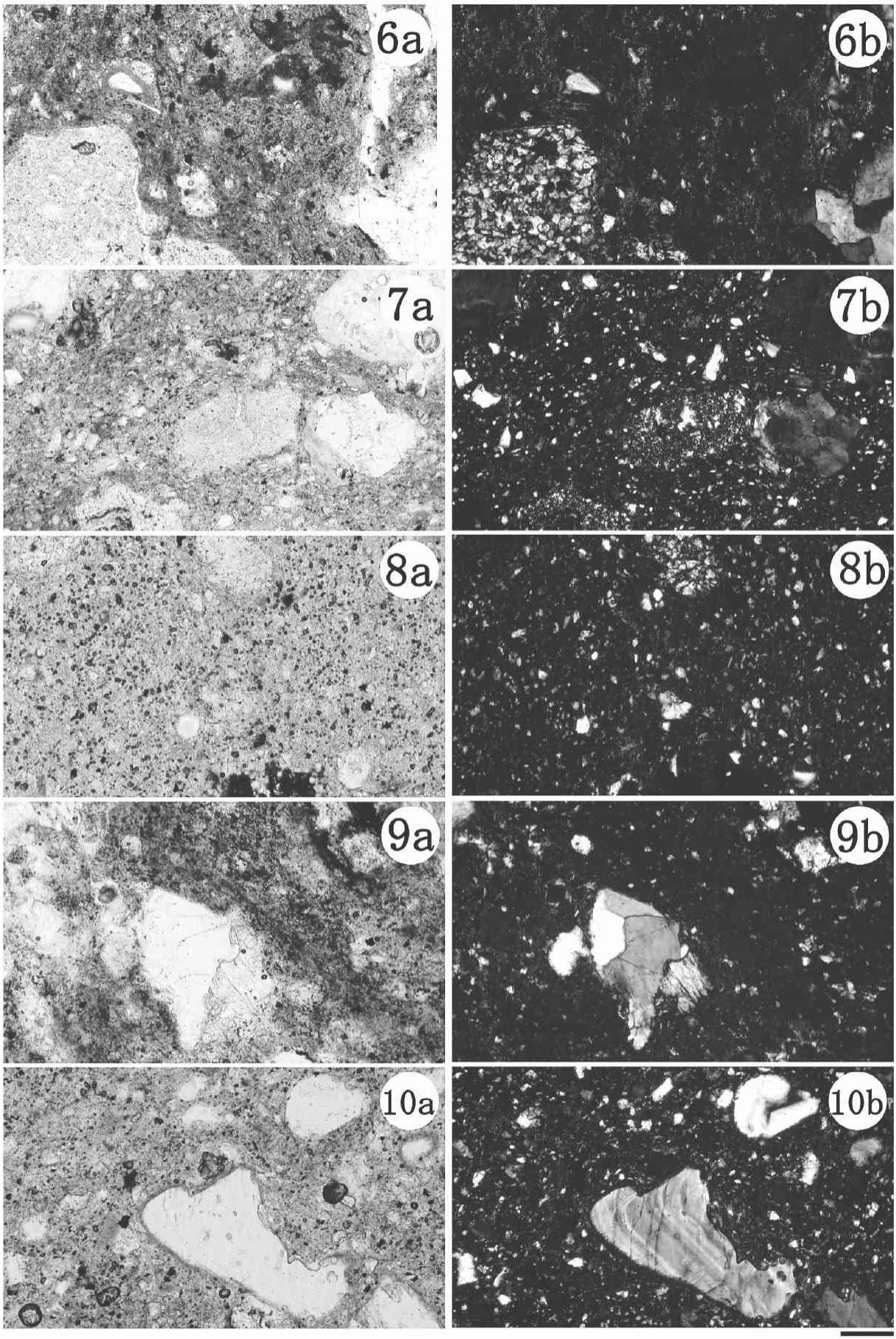
第 10 図　各元素定量値（2）



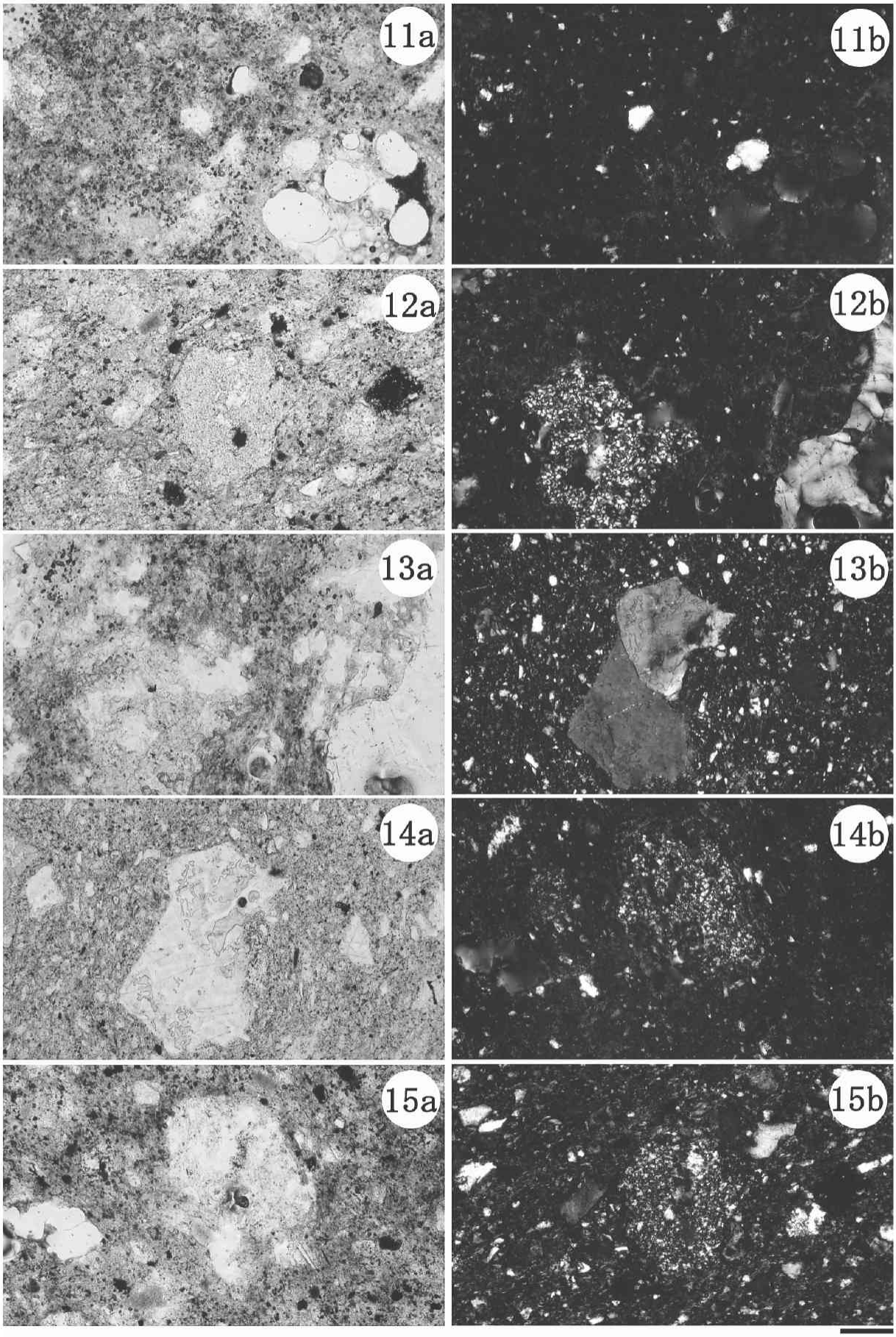
第 11 図　酸化ケイ素 SIO_2 - 酸化アルミニウム Al_2O_3 分布図



第 12 図　土器胎土の顕微鏡写真（スケール 100 μm）
※番号は、分析番号に対応，a：解放ニコル，b：直交ニコル



第 13 図　土器胎土の顕微鏡写真（スケール 100 μ m）
※番号は、分析番号に対応，a：解放ニコル，b：直交ニコル



第 14 図　土器胎土の顕微鏡写真（スケール 100 μ m）
※番号は、分析番号に対応，a：解放ニコル，b：直交ニコル

3　花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

はじめに

ここでは、古墳時代終末期～中世の古植生および古環境を推定する目的で花粉化石群集の検討を行った。

試　料

花粉化石群集の検討は、試料番号１～５の合計５試料について行った。各試料の簡単な記載は、以下の通りである。

試料１：ＳＧ81（35 - 35グリッド）の１層出土木製品に付着していた堆積物試料であり、暗オリーブ褐色粘土。なお、時代については、ＳＧ81北東隅より出土した炭化材について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、１σ歴年代範囲においてcal AD1390 - 1415年（43.3％）、２σ歴年代範囲においてcal AD1380 - 1430年（54.2％）と測定され、14世紀末～15世紀初めの年代であった。

試料２：川跡のＳＧ356（40 - 35グリッド）出土土器に付着していた堆積物試料である。黄褐色粘土質シルトで炭化物片を含み、褐鉄鉱が認められる。なお、時代については、ＳＧ356より出土した炭化材について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、１σ歴年代範囲においてcal AD530 - 580年（43.3％）、２σ歴年代範囲においてcal AD430 - 600年（95.4％）と測定され、古墳時代中期～後期の年代であった。

試料３：川跡のＳＧ130（90 - 45グリッド）出土土器に付着していた堆積物試料である。暗灰黄色砂混じりシルト質粘土であり、褐鉄鉱が認められる。なお、時代については、ＳＧ130からは奈良時代（8世紀中頃～後半）の土器が出土している。

試料４：ＳＥ80出土土器に付着していた堆積物試料であり、暗灰黄色シルト。なお、時代については、ＳＥ80より出土した生材について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、１σ歴年代範囲においてcal AD685 - 725年（37.7％）、２σ歴年代範囲においてcal AD670 - 780年（95.4％）と測定され、古墳時代終末期～奈良時代の年代であった。

試料５：ＳＧ81の２層出土土器に付着していた堆積物試料であり、黄灰色粘土質シルト。

方　法

花粉化石の抽出は、試料約２ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理･化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定･計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉･胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

花粉化石群集の記載

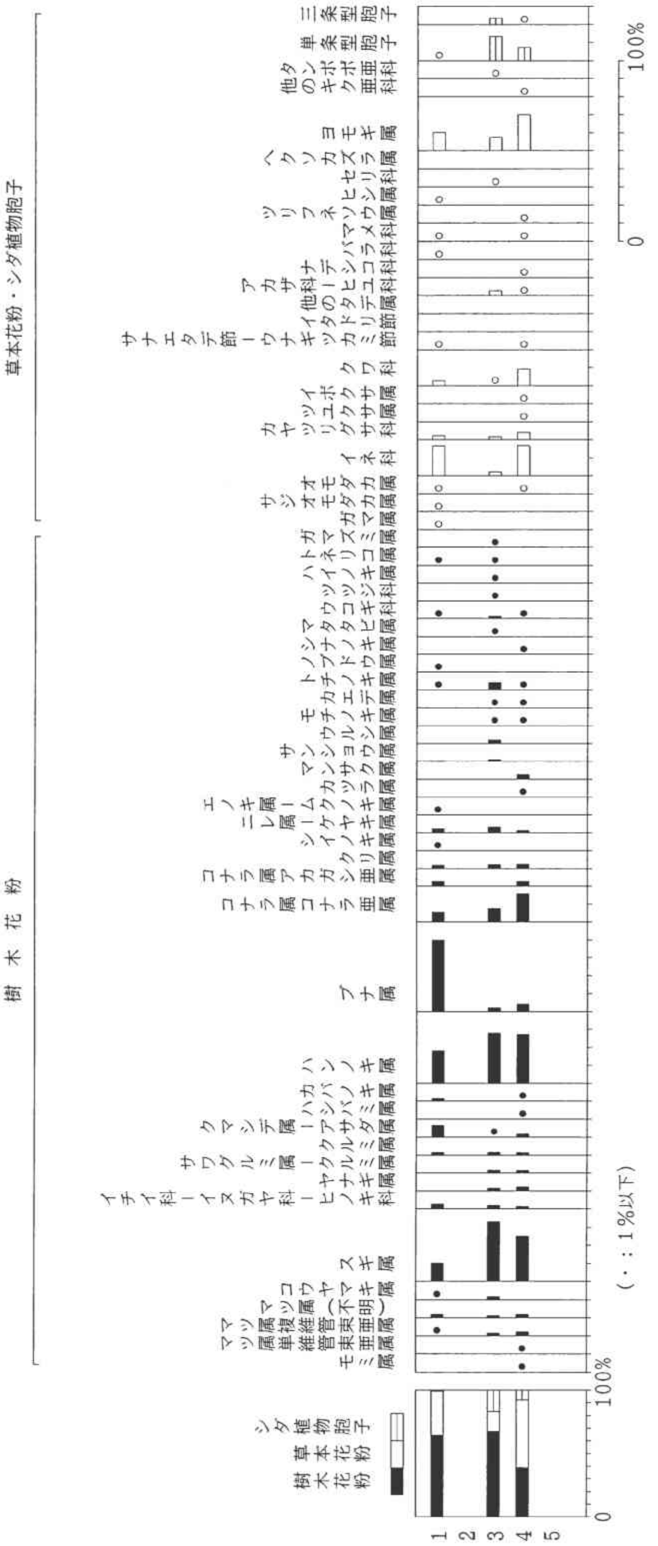
全試料で同定された分類群数は、樹木花粉36、草本花粉22、形態分類で示したシダ植物胞子２である。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。なお、試料２、５は、十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。

試料１（ＳＧ81）：樹木花粉の占める割合は約64％である。その中で、ブナ属が約40％と最も高率であり、次いでハンノキ属（約18％）、スギ属（約10％）の順に高率である。他に、クマシデ属 - アサダ属･コナラ亜属（各約６％）が比較的目立ち、マツ属（不明）、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、アカガシ亜属、クリ属、ニレ属 - ケヤキ属が２～３％程度で出現する。また、クルミ属、シイノキ属、エノキ属 - ムクノキ属、トチノキ属、ノブドウ属、ウコギ科などが概ね１％以下で出現する。草本花粉は、イネ科が約17％と最も高率であり、次いでヨモギ属が約10％で出現する。他は、カヤツリグサ科、クワ科が３％未満で若干目立ち、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、バラ科、ヒシ属、シダ植物の単条型胞

表８　花粉化石産出一覧表　（試料１：ＳＧ81　試料２：ＳＧ356　試料３：ＳＧ130　試料４：ＳＥ80　試料５：ＳＧ81

和名	学名	1	2	3	4	5
樹木						
モミ属	*Abies*	-	-	-	1	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	1	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	2	-	3	5	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	4	-	2	4	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	2	-	3	-	-
スギ属	*Cryptomeria*	22	-	62	54	4
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	6	-	4	3	-
ヤナギ属	*Salix*	-	-	3	5	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	-	3	3	1
クルミ属	*Juglans*	3	-	3	3	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	14	-	1	4	-
ハシバミ属	*Corylus*	-	-	-	1	-
カバノキ属	*Betula*	3	-	-	1	-
ハンノキ属	*Alnus*	39	-	53	59	4
ブナ属	*Fagus*	86	-	4	9	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	12	-	14	34	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	6	-	-	6	-
クリ属	*Castanea*	4	-	4	5	-
シイノキ属	*Castanopsis*	1	-	-	-	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	5	-	6	3	-
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	1	-	-	-	-
カツラ属	*Cercidiphyllum*	-	-	-	1	-
マンサク属	*Hamamelis*	-	-	-	6	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	2	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	4	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	1	2	-
カエデ属	*Acer*	-	-	1	2	-
トチノキ属	*Aesculus*	2	-	8	2	-
ノブドウ属	*Ampelopsis*	1	-	-	-	-
シナノキ属	*Tilia*	-	-	-	1	-
マタタビ属	*Actinidia*	-	-	1	-	-
ウコギ科	Araliaceae	2	-	3	1	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	1	-	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	-	1	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	1	-	1	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	1	-	-
草本						
ガマ属	*Typha*	1	-	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	1	-	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	1	-	-	1	-
イネ科	Gramineae	56	-	6	93	2
カヤツリグサ科	Cyperaceae	8	-	5	23	3
ツユクサ属	*Commelina*	-	-	-	1	-
イボクサ属	*Aneilema*	-	-	-	1	-
クワ科	Moraceae	9	-	1	51	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	3	-	-	1	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	-	1
他のタデ属	other Polygonum	-	-	-	-	2
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	8	5	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	3	-
バラ科	Rosaceae	1	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	1	-	-	1	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	-	-	1	-
ヒシ属	*Trapa*	2	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	1	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	1
ヨモギ属	*Artemisia*	34	-	21	111	4
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	4	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	-	-	1	-	-
シダ植物						
単条型胞子	Monolete spore	3	1	38	40	1
三条型胞子	Trilete spore	-	-	10	4	-
樹木花粉	Arboreal pollen	216	0	189	216	10
草本花粉	Nonarboreal pollen	117	0	43	296	16
シダ植物胞子	Spores	3	1	48	44	1
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	336	1	280	556	27
不明花粉	Unknown pollen	16	1	32	38	7

Ｔ．－Ｃ．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



第15図　花粉化石分布図

（試料１：ＳＧ81　試料２：ＳＧ356　試料３：ＳＧ130　試料４：ＳＥ80　試料５：ＳＧ81）

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

子などが１％未満で出現する。

試料２（ＳＧ356）：単条型胞子が１点産出したのみであった。

試料３（ＳＧ130）：樹木花粉の占める割合は約68％である。その中で、スギ属が約33％と最も高率であり、次いでハンノキ属が約28％で出現する。他は、コナラ亜属が約７％で比較的目立ち、イチイ科‐イヌガヤ科‐ヒノキ科、ブナ属、クリ属、ニレ属‐ケヤキ属、ウルシ属、トチノキ属が２～４％程度で出現する。また、マツ属複維管束亜属、ヤナギ属、クルミ属、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、マタタビ属、ウコギ科、ツツジ科、ハイノキ属、トネリコ属、ガマズミ属などが１％未満～２％未満で出現する。草本花粉は、ヨモギ属（約８％）がやや目立つ程度であり、２～３％程度でイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科‐ヒユ科、１％未満でクワ科、セリ科、タンポポ亜科が出現する。シダ植物胞子は約17％を占め、単条型胞子が約14％である。

試料４（ＳＥ80）：樹木花粉の占める割合は約39％とやや低率である。その中で、ハンノキ属が約27％と最も高率であり、次いでスギ属（25％）、コナラ亜属（約16％）の順に出現する。他は、マツ属複維管束亜属、ヤナギ属、ブナ属、アカガシ亜属、クリ属、マンサク属が２～４％程度で出現し、モミ属、マツ属単維管束亜属、イチイ科‐イヌガヤ科‐ヒノキ科、クルミ属、クマシデ属‐アサダ属、ハシバミ属、ニレ属‐ケヤキ属、カツラ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ属、シナノキ属、ウコギ科などが１％未満～２％未満で出現する。草本花粉は、ヨモギ属が約20％と最も高率であり、次いでイネ科（約17％）、クワ科（約９％）の順に高率である。他は、カヤツリグサ科（約４％）が若干目立ち、オモダカ属、ツユクサ属、イボクサ属、アカザ科‐ヒユ科、ナデシコ科、ツリフネソウ属、他のキク亜科などが１％未満で出現する。シダ植物胞子は約８％を占め、単条型胞子が約７％で出現する。

試料５（ＳＧ81）：樹木花粉は、スギ属、サワグルミ属‐クルミ属、ハンノキ属、コナラ亜属が僅かに産出した。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節‐ウナギツカミ節、イタドリ節、アカザ科‐ヒユ科、ヘクソカズラ属、ヨモギ属などが僅かに産出した。

考　察

［古墳時代終末期～奈良時代頃（試料３：ＳＧ130，試

料４：ＳＥ80)]

スギ属、ハンノキ属をはじめ、コナラ亜属の高率出現で特徴付けられる。従って、遺跡周辺丘陵部や低地部との境界付近は、スギ林が優勢であり、コナラ亜属をはじめ、ヤナギ属、クルミ属、クマシデ属 - アサダ属、ブナ属、クリ属、ニレ属-ケヤキ属、マンサク属、ウルシ属、カエデ属、トチノキ属などが混じる落葉広葉樹林が成立していたと考えられる。また、低地部には、ハンノキ属湿地林が成立していたであろう。川跡のＳＧ130周辺には、シダ植物をはじめ、ヨモギ属、アカザ科 - ヒユ科などが生育する幾分乾き気味の場所が見られたと考えられる。一方、ＳＥ80付近には、ヨモギ属、イネ科、クワ科、シダ植物などが繁茂していたであろう。ヨモギ属が生育する路傍のような幾分乾き気味の場所も見られたが、オモダカ属、イボクサ属、ツリフネソウ属などが生育する水位の低い湿地ないし水溜りのような場も存在していたと考えられる。抽水植物のオモダカ属は、水田にしばしば雑草として生育する分類群であるが、水田が存在していたにしては、イネ科の出現率はやや低いように思われる。

[14世紀末～15世紀初め（試料１：ＳＧ81)]

ブナ属の急増、スギ属の急減で特徴付けられる。遺跡周辺丘陵部には、ブナ属が卓越し、クマシデ属 - アサダ属、コナラ亜属を主要素とした落葉広葉樹林が発達しており、スギ林も林分を縮小しながらも成立していたであろう。これら森林には、マツ属複維管束亜属、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科などの針葉樹や、クリ属、ニレ属 - ケヤキ属、クルミ属、エノキ属 - ムクノキ属、トチノキ属、ノブドウ属などの落葉広葉樹のほか、僅かながらもアカガシ亜属、シイノキ属といった常緑広葉樹も混じっていたであろう。ＳＧ81内あるいは、その周辺には、イネ科をはじめ、抽水植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、浮葉植物のヒシ属などが生育していたと考えられ、池や沼に生育するヒシ属の産出から、流れをさほど伴わない幾分水深のある水域の存在が推定される。サジオモダカ属、オモダカ属は、いわゆる水田雑草であるが、水田の存在については、プラント･オパール分析など多方面からの検討を要するであろう。また、周辺には、ヨモギ属が繁茂するような幾分乾き気味の場所も見られたであろう。

なお、試料１は、１層出土木製品に付着していた堆積物試料であるが、花粉化石が良好に保存されていたことから、水成堆積物と考えられる。一方、試料５は、ＳＧ81の２層出土土器に付着していた堆積物試料であるが、花粉化石は良好に保存されていなかった。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では化学的風化により分解･消失し､更にバクテリアによる蝕害も受ける｡従って､２層は、少なくとも水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。つまり、常時滞水した環境ではなく、乾燥ないし乾湿を繰り返す環境で堆積したことが示唆される。このことは､試料２（ＳＧ356）についても同様のことが言える。

おわりに

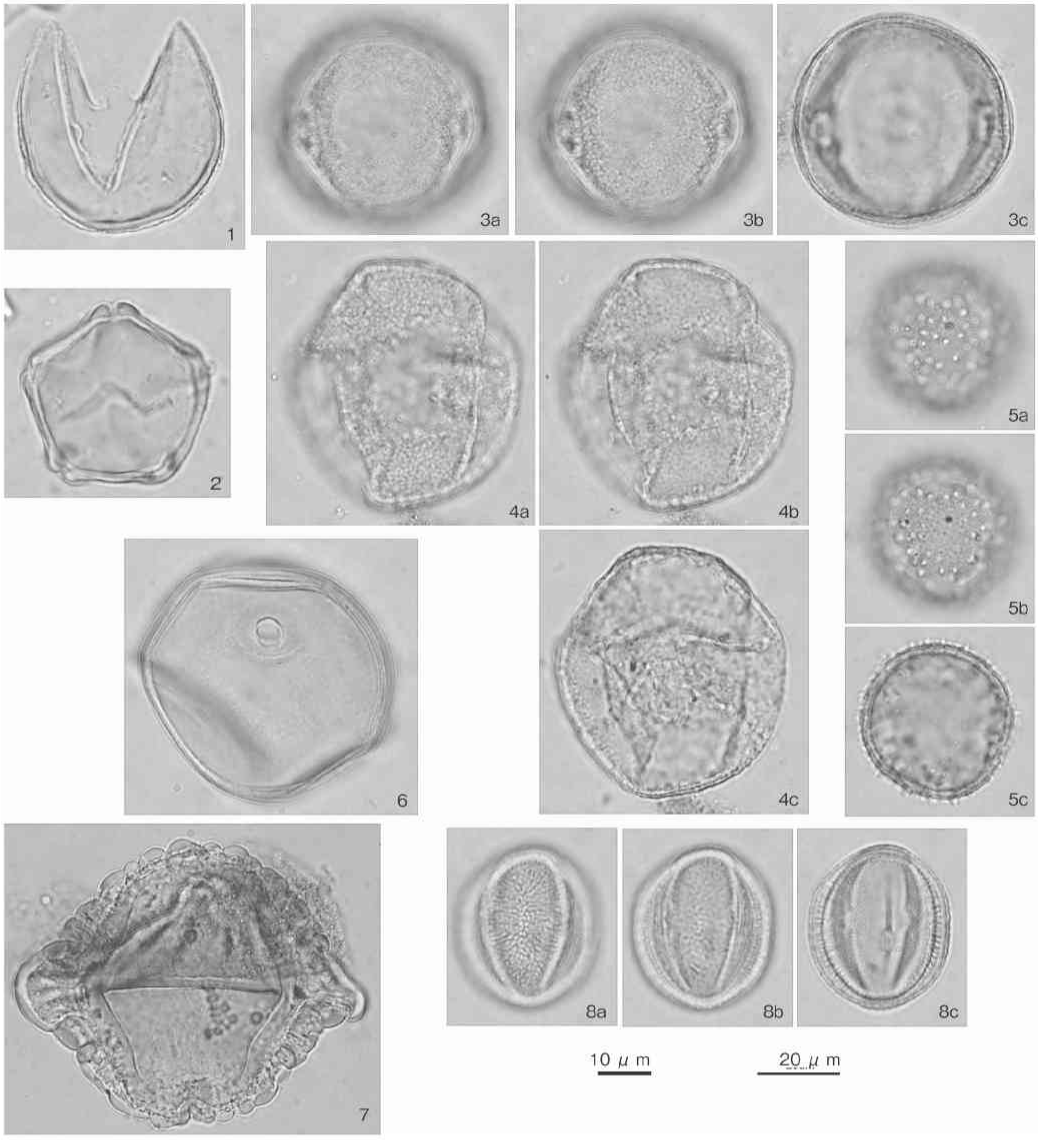
花粉化石群集を検討した結果、以下のような古植生および古環境が推定された。

古墳時代終末期～奈良時代頃（試料３：ＳＧ130，試料４：ＳＥ80）には、スギ林が優勢であり、コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林も成立していた。また、低地部には、ハンノキ属湿地林が成立していた。川跡のＳＧ130周辺には、シダ植物やヨモギ属などが繁茂していた。ＳＥ80付近には、ヨモギ属、イネ科、クワ科、シダ植物などが繁茂しており、ヨモギ属が生育する乾き気味の場所や、オモダカ属が生育する水位の低い湿地ないし水溜りが存在していた。

14世紀末～15世紀初め（試料１：ＳＧ81）には、ブナ属の卓越する落葉広葉樹林が発達しており、スギ林も成立していた。ＳＧ81内あるいは、その周辺には、ヒシ属が生育する幾分水深のある水域が存在していた。ＳＧ81の１層（試料１）は、水成堆積物と考えられたが、２層（試料５）堆積期には、安定して水が溜まってはいなかったと考えられた。

参考文献

財団法人山形県埋蔵文化財センター（2006）南田遺跡現地説明会資料．



1．スギ属、試料３（ＳＧ130），PAL.MN　2576
2．ハンノキ属、試料４（ＳＥ80），PAL.MN　2579
3．ブナ属、試料１（ＳＧ81）、PAL.MN　2573
4．コナラ属コナラ亜属、試料４（ＳＥ80），PAL.MN　2577
5．オモダカ属、試料４（ＳＥ80），PAL.MN　2581
6．イネ科、試料４（ＳＥ80），PAL.MN　2578
7．ヒシ属、試料１（ＳＧ81），PAL.MN　2575
8．ヨモギ属、試料４（ＳＥ80），PAL.MN　2580

第16図　産出した花粉化石（scale bar 10 μ m：１～６・８，20 μ m：７）

４　出土木片・炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

はじめに

ここでは、ＳＰ34から出土した木片とＳＧ81から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

試　料

試料１の木片は､90-55グリットのＳＰ34から出土し、時代不明の柱穴から出土した柱根である。同一試料を用いて、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定が実施されている（別報参照）。

試料２の炭化材は、北東隅グリットのＳＧ81から出土し、この遺構は平安時代（10世紀頃）の川跡である。

方　法

木片から材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

炭化材は、材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５mm

角以下の大きさに整え、直径１cm の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV 型）で観察と写真撮影を行った。

結　果

同定の結果、木片と炭化材はいずれもクリであった。以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の３方向の組織写真を提示した。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.，ブナ科　第17図　１ａ－１ｃ（ＳＰ34）　第18図　２ａ－２ｃ（ＳＧ81）

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

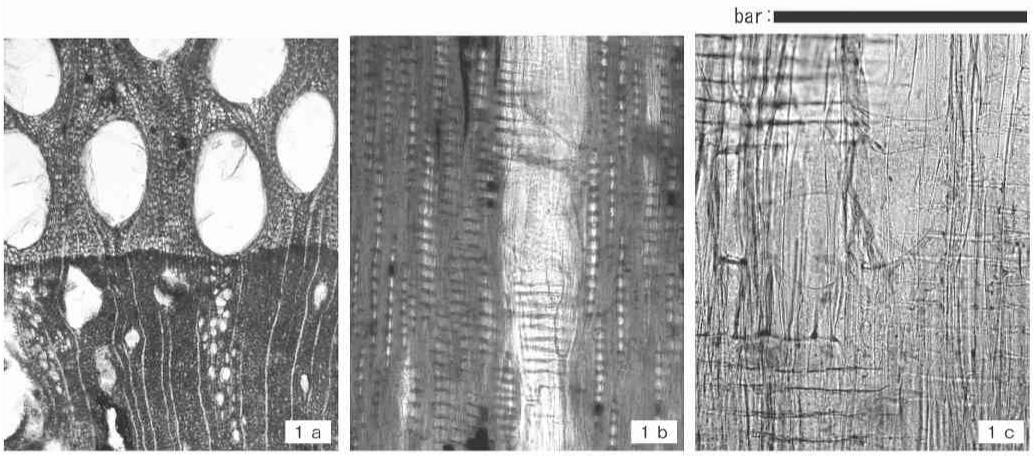
考　察

ＳＰ34の柱根の木片は、クリであった。ＳＰ34は時期不明の柱穴から出土した原型をとどめていない柱根であるが、年代測定値からは平安時代に相当する結果が得られている（別報参照）。また、平安時代の川跡ＳＧ81から出土した炭化材もクリであった。

鶴岡市の岩崎遺跡から出土した平安時代の柱根には、クリが非常に多く使われていたことからも、平安時代には地域一帯でクリが非常に多く利用されていた可能性がある。

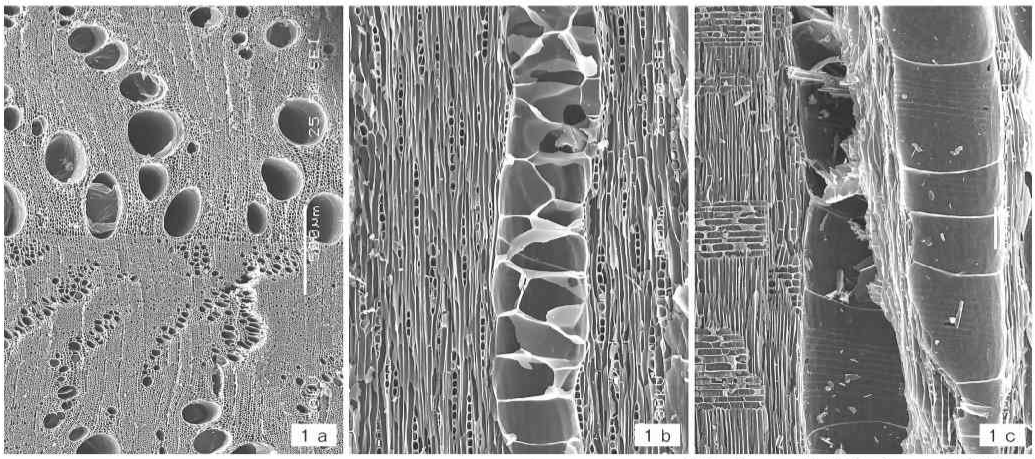
表９　樹種同定結果一覧

番　号	遺　構	出土グリット	種　類	樹　種	備　考
1	ＳＰ34	90－55	木片（柱根）	クリ	年代測定 PLD－7222，時期不明の柱穴出土
2	ＳＧ81	北東隅	炭化材（破片）	クリ	平安時代（10ｃ頃），川跡出土



１ａ－１ｃ：クリ（ＳＰ34）　ａ：横断面　ｂ：接線断面　ｃ：放射断面

第17図　南田遺跡出土木片材組織の光学顕微鏡写真



１ａ－１ｃ：クリ（ＳＧ81）　ａ：横断面　ｂ：接線断面　ｃ：放射断面

第18図　南田遺跡出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真

Ⅴ 総　括

各遺構と遺物の年代などについては、第Ⅲ章第４節小結にまとめている。

放射性炭素年代測定の結果（表４）によれば、川跡ＳＧ81出土の炭化材（PLD - 7221）の２σ暦年代範囲が、14世紀末～15世紀前葉頃となる。ＳＧ81の出土遺物は新しいものでも10世紀第１四半期であり、測定結果とは整合しない。ＳＧ81の出土遺物は、下層出土の６世紀第１四半期と上層出土の９世紀第４四半期～10世紀第１四半期の二つの時期にまとまっており、遺構の時期としても動かしがたい。ＳＧ81付近に散見される暗渠・耕作溝などから混入した炭化材を試料としてしまった可能性が高い。

一方、ほかの４点の試料については、発掘調査で得られた知見と整合する。柱穴ＳＰ34出土の柱根（PLD - 7222）は、８世紀後半～９世紀代という測定結果であり、第Ⅲ章第４節小結で記したように８世紀第４四半期～９世紀第１四半期とした柱穴群の年代と矛盾しない。井戸跡ＳＥ80出土の木片（PLD - 7223）も同じ時期と考えたが、測定結果は７世紀後半～８世紀後半となった。遺構の時期より幾分古くなっているが、やはり矛盾はない。川跡ＳＧ356・248出土の炭化材（PLD - 7224・7225）は、５世紀前葉～６世紀代という測定結果になり、６世紀第１四半期とした土器群の年代と整合する。いずれの試料も最外年輪を含まない試料であることが、測定結果が古くなったことの要因であろう。

須恵器の胎土分析では、主要な遺構出土の須恵器を試料とした（表５）。須恵器がほとんど出土しないＳＧ356出土の試料も含まれるが、隣接するＳＧ81から混入したものであろう。また、器種も甕・蓋・有台坏・無台杯など数種を選択した。分析結果では、15点の試料の粘土・砂粒の組成に違いが見当たらなかった。器種を違えても同様である。試料は、８世紀中頃～10世紀第１四半期までの遺物を含んでいるが、常に同一の供給元から須恵器を得ていた可能性を示唆しているものと考えられる。

花粉化石群集の分析では、南田遺跡の古環境の復元に供する結果が得られた。ＳＧ130より採取した試料３とＳＥ80より採取した試料４の結果では、遺構の年代より８世紀中頃～９世紀第１四半期の古環境を表す花粉化石が検出された。杉林のほか、落葉広葉樹林、低地には湿地林が見られる。ほかにヨモギ属が生育する乾き気味の場所、オモダカ属が生育する水位の低い湿地・水溜りなどが、存在したことが明らかとなった。また、イネ科の出現率が低く、水田の存在に疑問が呈された。

ＳＧ81の２層の試料５、およびＳＧ356の試料２は、６世紀第１四半期のものである。花粉化石の保存状況が悪く、両試料が花粉化石が良好に保存される水成堆積物ではなかったことを示す。６世紀第１四半期のＳＧ81、ＳＧ356は、川跡ではあるものの、常時帯水した環境ではなかったことになる。

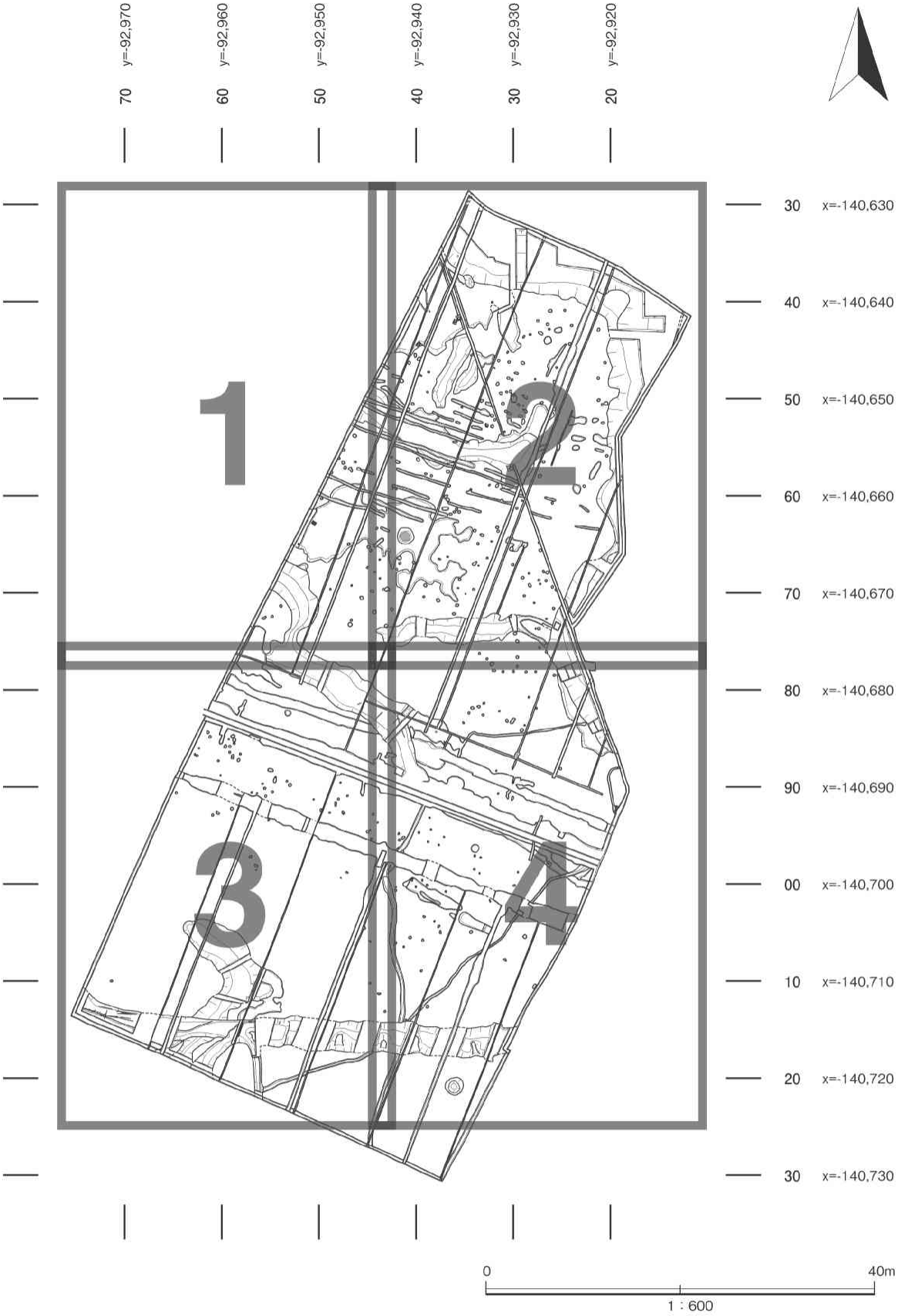
樹種同定では、ＳＰ34出土の柱根を試料とした。結果はクリであり、花粉分析の結果とも整合した。

南田遺跡で確認された遺構・遺物は大きく４つの時期に分けられる。６世紀第１四半期、８世紀中頃、８世紀第４四半期～９世紀第１四半期、９世紀第４四半期～10世紀第１四半期となる。いずれの時期においても、主たる遺構としては、川跡・溝跡・土坑・井戸跡・小柱穴などであり、集落の本拠とは言い難い。溝跡・土坑・井戸跡・小柱穴などが構築される８世紀第４四半期～９世紀第１四半期に、わずかに生活の痕跡が垣間見られる程度である。調査区の東側には、ＳＧ81が北流しており、集落の本拠となる住居跡などは、調査区の西側にあると見て良いであろう。隣接する清水新田遺跡と接続する可能性も考慮される。いずれにせよ今回の調査区を東限とした集落が存在する可能性が、強く示唆される調査成果となった。

ＳＧ130から出土した８世紀中頃の土器群は、これまで庄内地方で出土することが少なかった。８世紀前葉に設置された出羽柵までさかのぼる遺物は出土しなかったが、庄内地方の奈良時代の様相を明らかにする貴重な資料を得ることができたと言える。

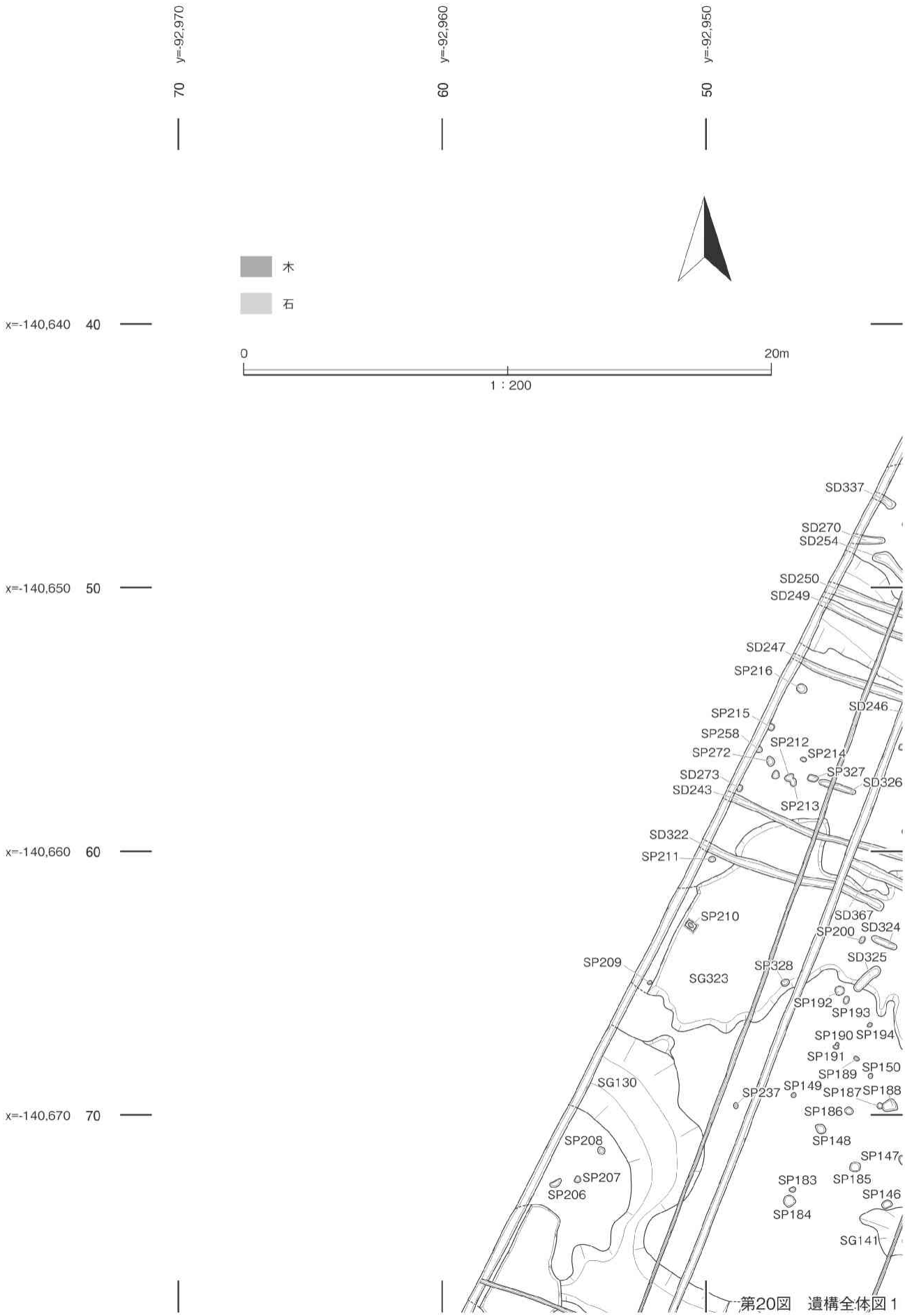
引用文献

青山崇　2004「鷺畑山２号墳測量調査で古墳と判明」『民報藤島　第475号』日本共産党藤島町委員会
青山崇　2006「大西山古墳は円墳ではなく方墳」『民報藤島　第544号』日本共産党藤島町委員会
秋保良　1992『荒沢窯跡　玉林坊遺跡分布調査報告書』鶴岡市教育委員会
阿部明彦ほか　1988『鶴岡西部地区遺跡群　矢馳Ａ遺跡　矢馳Ｂ遺跡　清水新田遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第127集）山形県教育委員会
阿部明彦ほか　1989『鶴岡西部地区遺跡群　助作遺跡　山田遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第143集）山形県教育委員会
阿部明彦ほか　1999「山形県の土器編年」『第25回古代城冊官衙遺跡検討会資料』古代城冊官衙遺跡検討会
阿部明彦ほか　2007『分布調査報告書報告書（33）』（山形県埋蔵文化財調査報告書第207集）山形県教育委員会
尾形與典ほか　1995『西谷地遺跡第２次　西ノ川遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第26集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
植松暁彦　2008「庄内地方北部の10～11世紀代の土器群の様相」『研究紀要　第５号』財団法人山形県埋蔵文化財センター
黒坂雅人　1990『助作遺跡発掘調査報告書（１）』（山形県埋蔵文化財調査報告書第162集）山形県教育委員会
黒坂雅人ほか　2004『助作遺跡　第３次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第133集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
斎藤俊一ほか　1993『西谷地遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第12集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
坂井秀弥ほか　1989『新新バイパス関係発掘調査報告書　山三賀Ⅱ遺跡』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集）新潟県教育委員会　建設省新潟国道工事事務所
佐々木七郎　1997「大山柵」『山形県中世城館遺跡調査報告書　第３集　（庄内・最上地域）』山形県教育委員会
佐藤鎮雄ほか　1975『岡山遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第４集）山形県教育委員会
佐藤庄一ほか　1994『五百刈遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第10集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
渋谷孝雄　1991『囲地田遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第167集）山形県教育委員会
須賀井新人　2001『山田遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第83集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
新野直吉　1982「第六章　第二節　出羽国建置と地方政治の展開」『山形県史　第一巻　原始・古代・中世編』山形県
野尻侃　1990『大道下・月記・大東遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第153集）山形県教育委員会
平川南ほか　2001「山形県鶴岡市山田遺跡出土木簡」『市内遺跡分布調査報告書　山田遺跡　平成10年度発掘調査概報』（山形県鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第９集）鶴岡市教育委員会
誉田慶恩　1982「第九章　第一節　古代出羽の神々」『山形県史　第一巻　原始・古代・中世編』山形県
眞壁建ほか　1995『畑田遺跡　中野遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第22集（財団法人山形県埋蔵文化財センター
眞壁建ほか　2002『山田遺跡発掘調査報告書（Ａ～Ｈ区）』（山形県鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第18集）鶴岡市教育委員会
眞壁建ほか　2004『山田遺跡発掘調査報告書（Ｌ・Ｍ区）』（山形県鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第24集）鶴岡市教育委員会
松田亜紀子ほか　1999『山田遺跡発掘調査報告書（市道改良部分）』（山形県鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第16集）鶴岡市教育委員会
松田亜紀子ほか　2003『山田遺跡発掘調査報告書（Ｉ～Ｋ・Ｍ１区）』（山形県鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第21集）鶴岡市教育委員会
水戸弘美　1997『塔の腰遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第50集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
米地文夫ほか　1979『土地分類基本調査　鶴岡』山形県企画調整部土地対策課

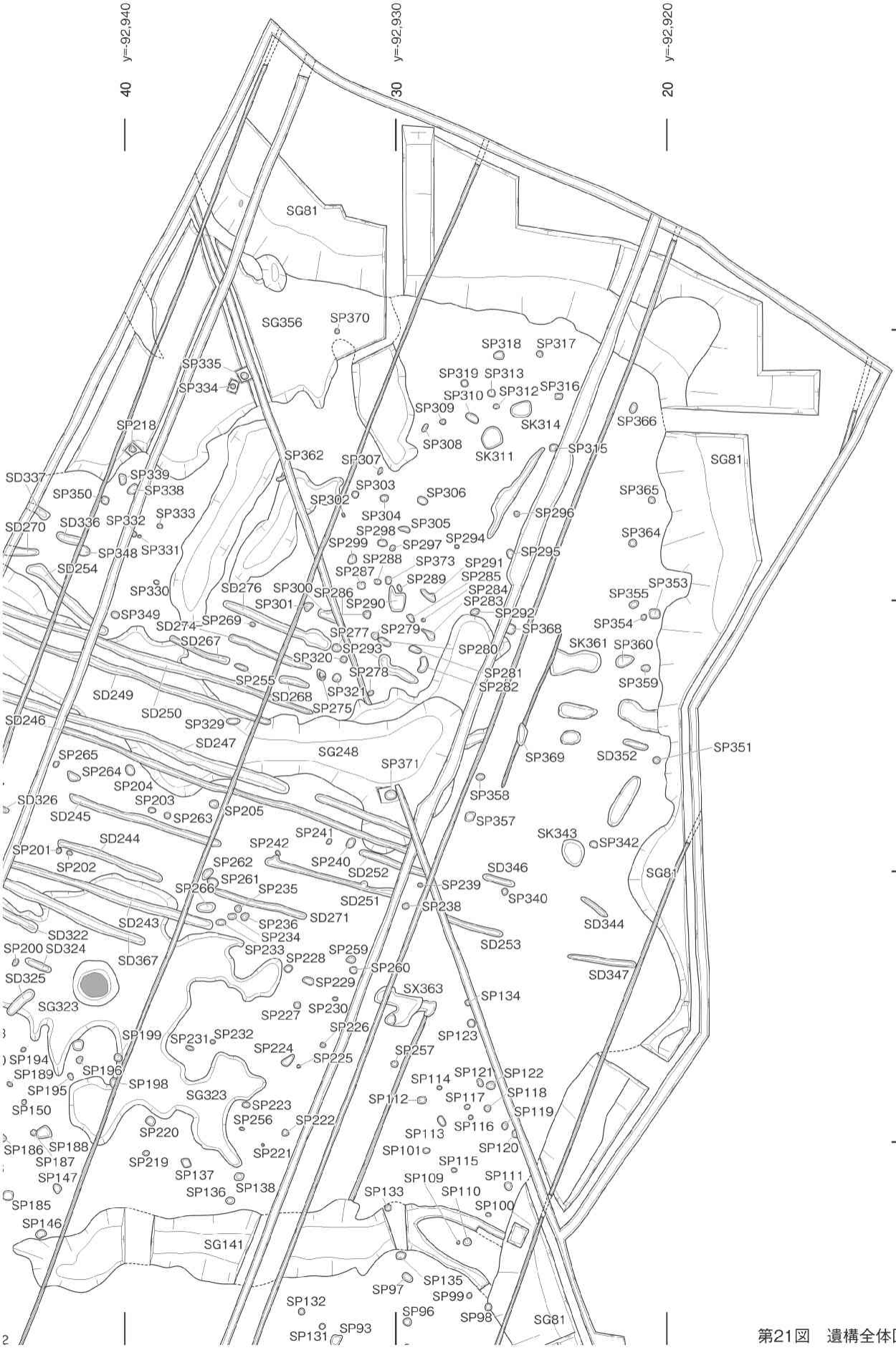


※これらを結合した図（1：200）は付図に収録

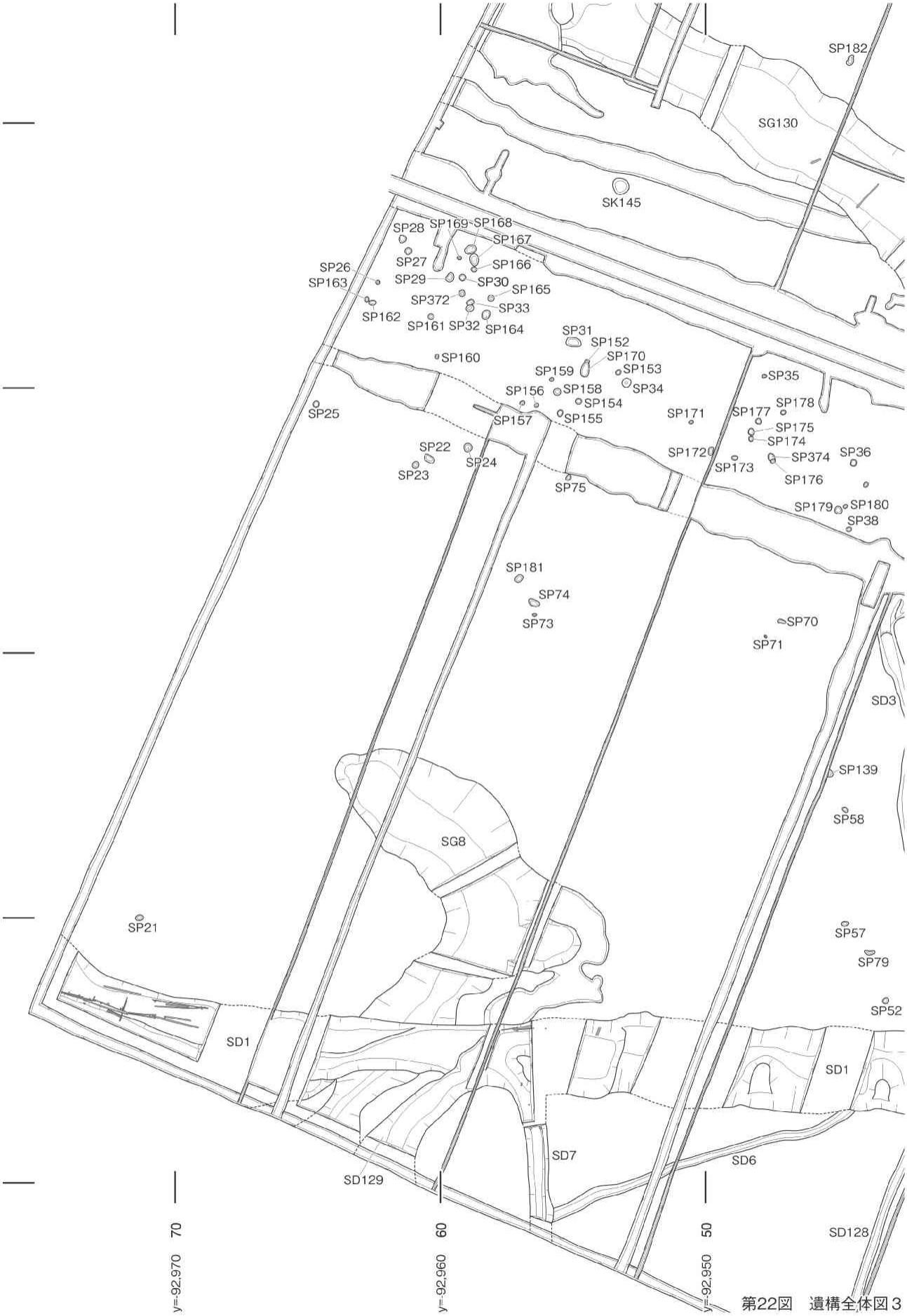
第19図　遺構全体図の割付


y=-92,970
70
y=-92,960
60
y=-92,950
50
木
石
x=-140,640 40
0
20m
1：200
x=-140,650 50
x=-140,660 60
x=-140,670 70
SD337
SD270
SD254
SD250
SD249
SD247
SP216
SD246
SP215
SP258
SP212
SP272
SP214
SD273
SP327
SD326
SD243
SP213
SD322
SP211
SP210
SD367
SP200
SD324
SD325
SP209
SP328
SG323
SP192
SP193
SP190
SP194
SP191
SP150
SP189
SG130
SP237
SP149
SP187
SP188
SP186
SP148
SP147
SP208
SP207
SP206
SP183
SP185
SP146
SP184
SG141

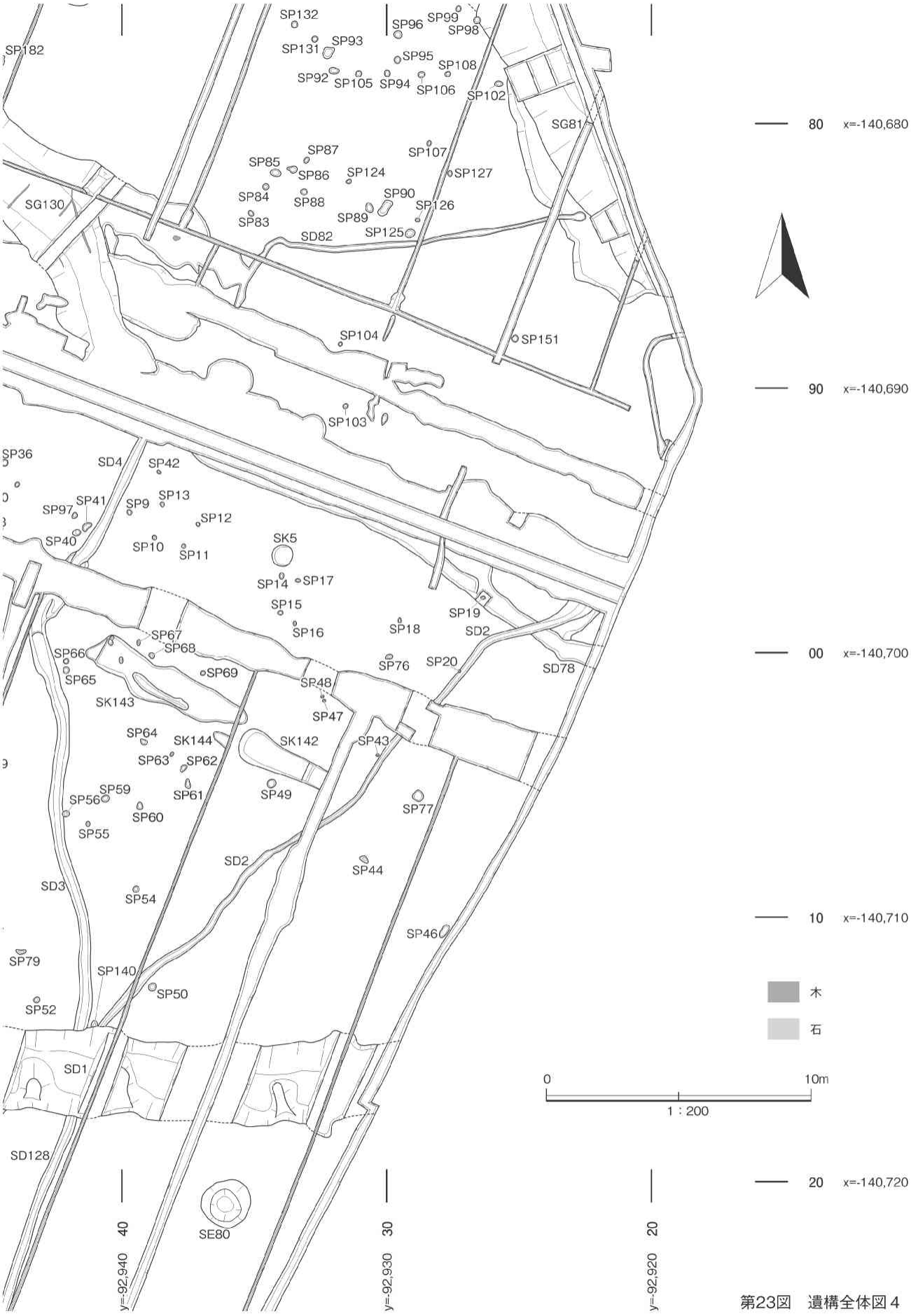
第20図　遺構全体図１


y=-92,940
y=-92,930
y=-92,920
40
30
20
SG81
SG356
SP370
SP318
SP317
SP335
SP334
SP319
SP313
SP310
SP312
SP316
SP309
SK314
SP366
SP218
SP308
SK311
SP315
SP362
SP307
SG81
SD337
SP339
SP350
SP338
SP303
SP302
SP306
SP365
SD270
SD336
SP332
SP333
SP304
SP305
SP296
SP298
SP364
SP348
SP331
SP299
SP297
SP294
SP295
SP254
SP288
SP373
SP291
SP287
SP289
SP285
SP353
SP330
SD276
SP300
SP286
SP284
SP355
SP349
SP301
SP290
SP283
SP292
SD274
SP269
SP277
SP279
SP368
SP354
SD267
SP293
SP280
SK361
SP360
SP320
SP278
SP281
SP255
SP282
SP359
SD249
SD268
SP321
SP275
SD250
SD246
SP329
SD247
SP351
SP265
SG248
SP371
SP369
SD352
SP264
SP204
SP358
SD326
SP203
SP205
SD245
SP263
SP357
SP241
SK343
SP342
SD244
SP242
SP201
SP240
SP202
SP262
SD252
SD346
SP261
SP239
SG81
SP266
SP235
SP340
SD251
SP238
SD271
SD243
SP236
SD344
SD322
SP234
SP200
SD324
SP233
SP259
SD253
SD367
SP228
SP260
SD347
SD325
SP229
SX363
SP134
SG323
SP227
SP230
SP226
SP199
SP231
SP232
SP123
SP224
SP257
SP194
SP225
SP189
SP196
SP121
SP122
SP114
SP198
SP195
SG323
SP223
SP112
SP117
SP118
SP150
SP256
SP222
SP119
SP220
SP113
SP116
SP186
SP188
SP221
SP101
SP120
SP187
SP219
SP115
SP147
SP137
SP109
SP111
SP136
SP138
SP133
SP110
SP185
SP100
SP146
SG141
SP135
SP97
SP99
SP132
SP96
SP98
SG81
SP131
SP93

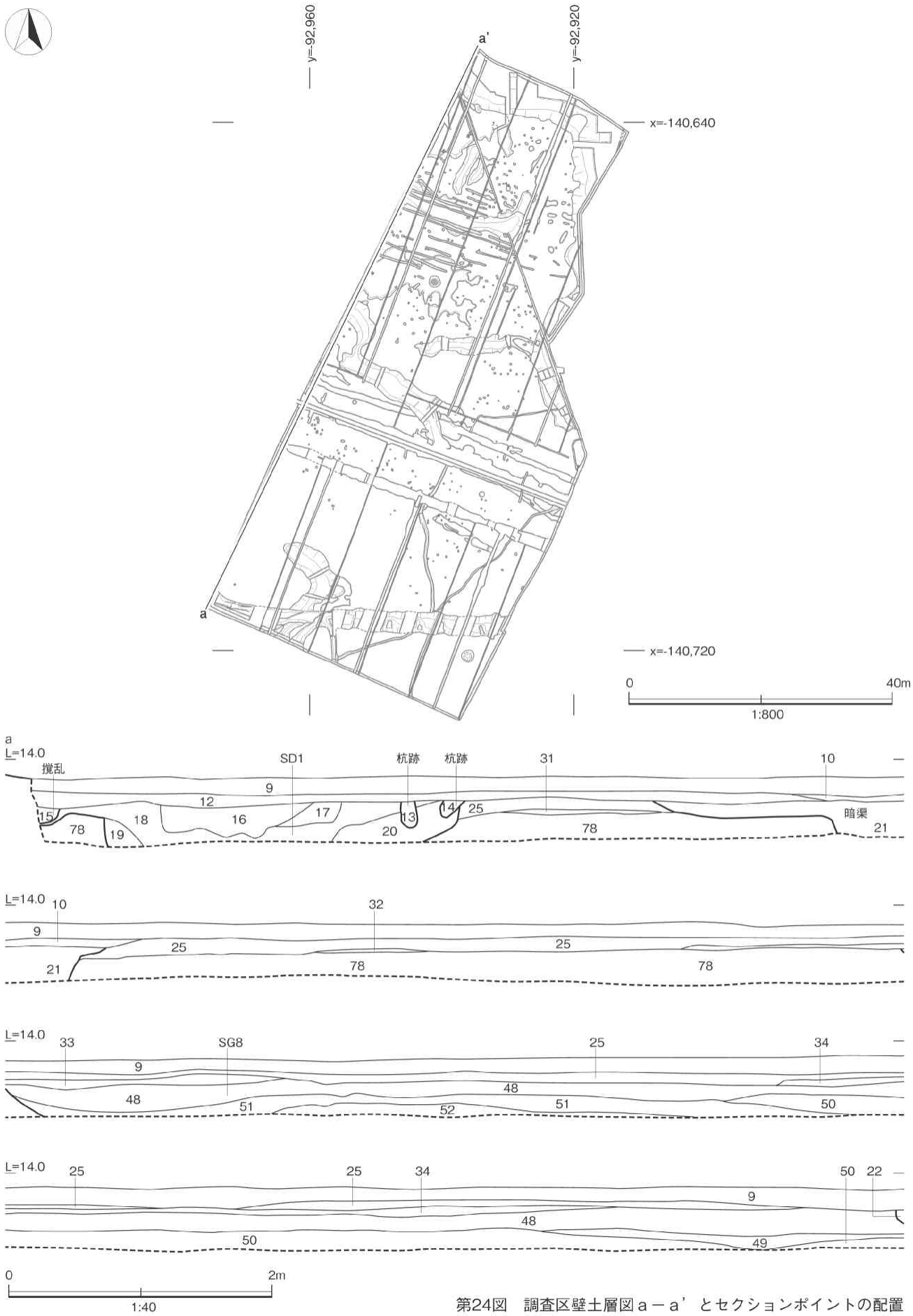
第21図　遺構全体図２


SP182
SG130
SK145
SP28
SP169
SP168
SP167
SP27
SP166
SP26
SP29
SP30
SP165
SP163
SP372
SP33
SP162
SP161
SP32
SP164
SP31
SP152
SP170
SP160
SP159
SP153
SP35
SP156
SP158
SP34
SP154
SP178
SP25
SP157
SP155
SP171
SP177
SP175
SP174
SP22
SP1720
SP374
SP36
SP24
SP173
SP23
SP176
SP75
SP179
SP180
SP38
SP181
SP74
SP73
SP70
SP71
SD3
SP139
SP58
SG8
SP21
SP57
SP79
SP52
SD1
SD1
SD7
SD6
SD129
SD128
70
60
50
y=-92,970
y=-92,960
y=-92,950

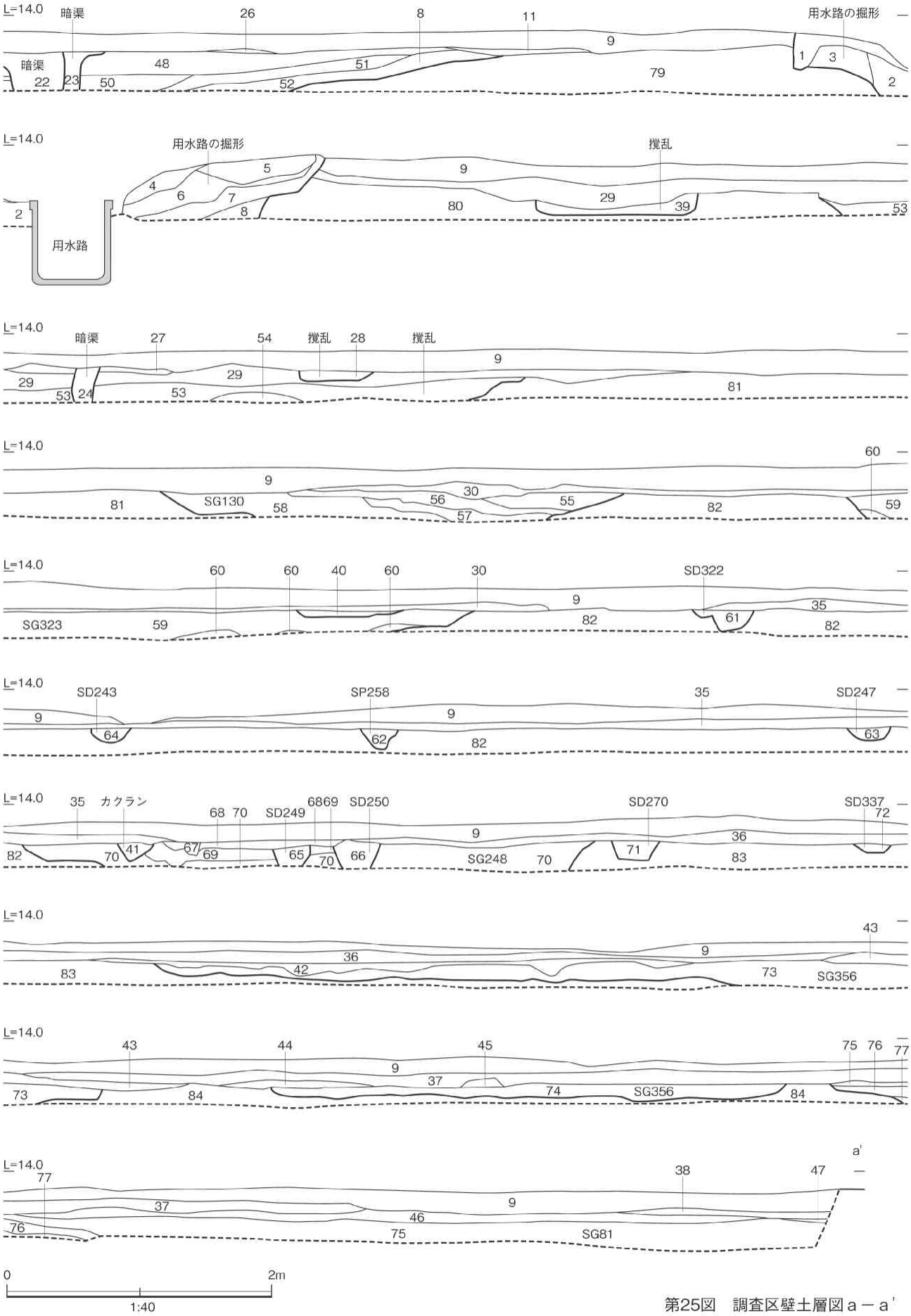
第22図　遺構全体図３


SP132
SP96
SP99
SP98
SP182
SP131
SP93
SP95
SP108
SP92
SP105
SP94
SP106
SP102
SG81
80 x=-140,680
SP87
SP107
SP85
SP86
SP124
SP127
SP84
SP88
SP90
SG130
SP126
SP83
SP89
SD82
SP125
SP104
SP151
90 x=-140,690
SP103
SP36
SD4
SP42
SP41
SP9
SP13
SP97
SP12
SP40
SP10
SP11
SK5
SP14
SP17
SP15
SP19
SP16
SP18
SD2
SP67
SP68
SP66
SP76
SP20
SD78
SP65
SP69
SP48
SK143
SP47
SP64
SK144
SK142
SP43
SP63
SP62
SP59
SP56
SP61
SP49
SP77
SP60
SP55
SD2
SP44
SD3
SP54
SP46
SP79
SP140
SP50
SP52
SD1
SD128
SE80
00 x=-140,700
10 x=-140,710
20 x=-140,720
木
石
0
10m
1：200
40
30
20
y=-92,940
y=-92,930
y=-92,920

第23図　遺構全体図４



第24図　調査区壁土層図ａ－ａ’とセクションポイントの配置

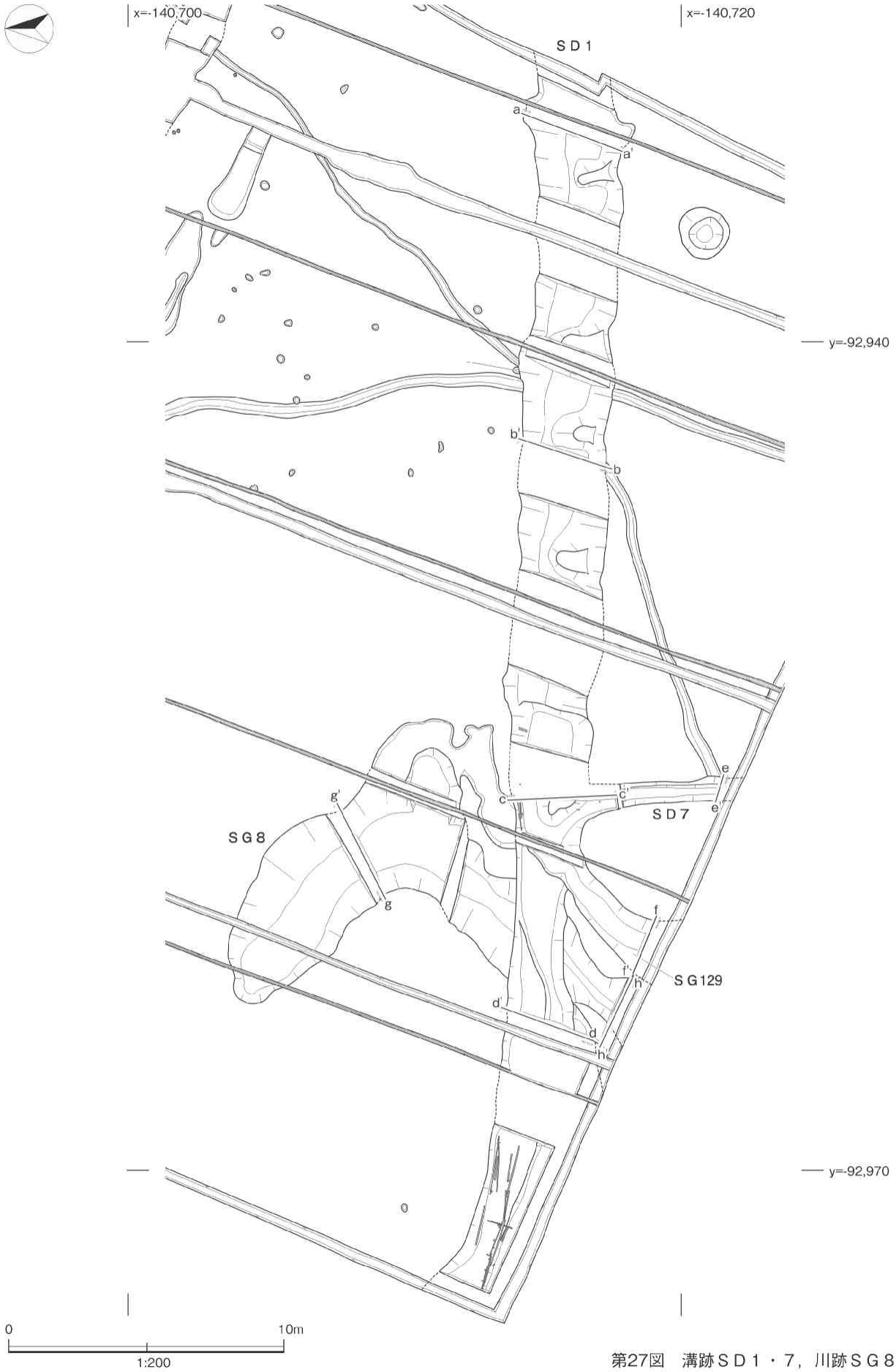


第25図　調査区壁土層図ａ－ａ'

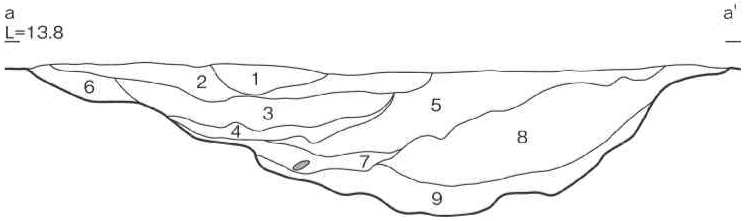
調査区壁土層図ａ－ａ'

1 10YR4/2灰黄褐色粘質土，10YR5/3にぶい黄褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂を含む，以下８層まで用水路の掘形
2 10YR4/2灰黄褐色粘土，10YR5/2灰黄褐色シルトを含む
3 10YR5/3にぶい黄褐色細砂，10YR4/2灰黄褐色粘質土を含む
4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト，植物遺体を含む
5 10YR4/2灰黄褐色シルト，10YR6/2灰黄褐色シルトを少し含む
6 10YR4/3にぶい黄褐色砂，10YR5/2灰黄褐色細砂と10YR4/2灰黄褐色粘土を含む
7 10YR4/1褐灰色粘土，10YR5/2灰黄褐色粘土と10YR5/3にぶい黄褐色砂を含む
8 5Y5/1灰色細砂，10YR5/4にぶい黄褐色砂を含む
9 10YR4/2灰黄褐色シルト，10YR4/3にぶい黄褐色細砂と植物遺体を含む，耕土
10 10YR3/2黒褐色細砂，10YR5/3にぶい黄褐色細砂を含む，旧耕土
11 10YR4/1褐灰色シルト，5Y5/1灰色シルトを含む，旧耕土
12 10YR4/2灰黄褐色粘土，10YR5/2灰黄褐色シルトを少し含む，旧耕土
13 10YR4/3にぶい黄褐色粘土，10YR5/2灰黄褐色粘土と炭を含む，杭跡
14 10YR4/2灰黄褐色細砂，10YR5/3にぶい黄褐色シルトと炭を含む，杭跡
15 10YR5/2灰黄褐色粘質土，10YR3/1黒褐色粘質土，撹乱
16 5Y5/1灰色粘土，5Y3/1オリーブ黒色粘土を含む，以下20層まで溝ＳＤ１
17 10YR3/2黒褐色シルト，10YR5/3にぶい黄褐色シルトを少し含む
18 10YR3/2黒褐色粘土，10YR4/2灰黄褐色シルトを含む
19 5Y4/1灰色シルト，5Y3/1黒褐色粘土を含む
20 10YR4/2灰黄褐色シルト，10YR3/2黒褐色シルトと炭と植物遺体を含む
21 暗渠（籾殻）
22 10YR5/2灰黄褐色細砂，5Y4/1灰色シルトと10YR5/3にぶい黄褐色砂と炭を含む，暗渠（土管）
23 10YR4/2灰黄褐色粘土，10YR5/3にぶい黄褐色シルトと10YR5/3にぶい黄褐色砂と炭を含む，暗渠（籾殻）
24 10YR4/2灰黄褐色粘土，10YR5/2灰黄褐色砂と10YR5/1褐灰色細砂を含む，暗渠（籾殻）
25 10YR4/1褐灰色粘土，10YR6/3にぶい黄褐色シルトと炭を含む，旧耕土
26 10YR4/1褐灰色粘土，10YR5/2灰黄褐色シルトと炭を含む，旧耕土
27 10YR3/2黒褐色粘土，10YR5/2灰黄褐色シルトを少し含む，旧耕土
28 10YR4/2灰黄褐色シルト，10YR3/2黒褐色粘土，10YR4/4褐色粗砂と炭を含む，撹乱
29 5Y4/1灰色細砂，10YR5/2灰黄褐色シルトと炭を少し含む，旧耕土
30 10YR4/1褐灰色粘土，10YR5/2灰黄褐色細砂と炭を含む，旧耕土
31 10YR5/2灰黄褐色粘土，10YR3/1黒褐色粘土を少し含む，旧耕土
32 10YR5/2灰黄褐色細砂，10YR3/1黒褐色粘土を含む，旧耕土
33 10YR6/2灰黄褐色砂，10YR4/1褐灰色粘土と植物遺体を少し含む，旧耕土
34 10YR3/2黒褐色粘土，10YR5/2灰黄褐色シルトと植物遺体と炭を含む，旧耕土
35 10YR4/2灰黄褐色粘土，10YR5/3にぶい黄褐色粘土を含む，旧耕土
36 10YR3/3暗褐色粘土，10YR5/2灰黄褐色粘土と炭を少し含む，旧耕土
37 10YR4/2灰黄褐色粘土，10YR4/3にぶい黄褐色シルトと植物遺体を含む，旧耕土
38 5Y3/1黒褐色粘質土，10YR5/1褐灰色粘土と植物遺体を含む，旧耕土
39 10YR5/1褐灰色シルト，10YR5/2灰黄褐色砂と炭を少し含む，撹乱
40 10YR5/2灰黄褐色粘土，10YR4/2灰黄褐色粘土を含む，撹乱
41 10YR3/3暗褐色粘土，10YR4/2灰黄褐色粘土を含む，撹乱
42 10YR4/2灰黄褐色粘土，10YR3/2黒褐色粘土と炭を少し含む，旧耕土
43 10YR3/2黒褐色シルト，10YR5/2灰黄褐色粘土と10YR4/2灰黄褐色砂を少し含む，旧耕土
44 5Y4/1灰色シルト，10YR3/2黒褐色粘土を含む，旧耕土
45 5Y5/1灰色シルト，10YR3/2黒褐色粘土と炭を少し含む，旧耕土
46 10YR3/1黒褐色粘土，5Y4/1灰色細砂を少し含む，旧耕土
47 10YR3/1黒褐色シルト，10YR3/2黒褐色粘土と植物遺体を含む，旧耕土
48 10YR5/6黄褐色粗砂，10YR5/2灰黄褐色細砂と10YR4/1褐灰色粗砂と植物遺体と炭を含む，以下52層までＳＧ８
49 10YR6/2灰黄褐色粘土，10YR5/2灰黄褐色砂と植物遺体を含む
50 10YR5/2灰黄褐色粗砂，10YR5/3にぶい黄褐色シルトと10YR7/4にぶい黄褐色火山灰と炭を含む
51 5Y5/1灰色粘質土，5Y5/1灰色シルトと植物遺体と炭を含む
52 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂，植物遺体を含む
53 5Y4/1灰色細砂，10YR4/2灰黄褐色粘質土と炭を含む，撹乱
54 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂，10YR5/3にぶい黄褐色シルトと炭を少し含む，撹乱
55 10YR5/2灰黄褐色粘質土，10YR4/2灰黄褐色粘土と炭と10YR5/2灰黄褐色砂を含む，以下58層までＳＧ130
56 5Y4/1灰色細砂，10YR4/2灰黄褐色砂と10YR5/3にぶい黄褐色シルトと炭を含む
57 5Y5/1灰色砂質土，5Y5/1灰色粘土と植物遺体と炭を含む
58 10YR5/2灰黄褐色砂，10YR4/2黄褐色シルトと植物遺体と炭を含む
59 5Y5/1灰色粘土，植物遺体と炭を含む，以下60層までＳＧ323
60 5Y4/1灰色シルト，5Y4/1灰色粘土を少し含む
61 10YR5/1褐灰色粘土，5Y5/1灰色粘土と炭と植物遺体を含む，ＳＤ322
62 5Y4/1灰色粘土，炭を含む，ＳＰ258
63 10YR5/2灰黄褐色粘土，5Y5/1灰色粘土と炭を含む，ＳＤ247
64 10YR4/1褐灰色粘土，5Y5/1灰色粘土と炭と植物遺体を含む，ＳＤ243
65 10YR5/2灰黄褐色粘土，炭を含む，ＳＤ249
66 5Y3/2黒褐色粘土，5Y5/1灰色シルトと10YR4/1褐灰色粘土と炭化粒と10YR7/4にぶい黄褐色火山灰を少し含む，ＳＤ250
67 5Y2/2オリーブ黒色粘土，10YR1.7/1黒色シルトと炭を含む，以下70層までＳＧ248
68 10YR3/1黒褐色シルト，10YR4/2灰黄褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色粘土と炭を含む
69 10YR4/1褐灰色粘土，10YR5/2灰黄褐色粘土と土器と炭を含む
70 5Y4/1灰色粘土，5Y4/2灰オリーブ色シルトと炭を少し含む
71 10YR5/2灰黄褐色粘土，5Y5/1灰色粘土と炭を少し含む，ＳＤ270
72 5Y4/1灰色粘土，5Y5/1灰色粘土と炭を少し含む，ＳＤ337
73 5Y5/1灰色粘土，5Y5/1灰色シルトと植物遺体と炭を含む以下74層までＳＧ356
74 5Y4/1灰色粘土，5Y4/1灰色シルトと植物遺体と炭を含む
75 10YR3/2黒褐色粘土，10YR4/2灰黄褐色シルトを含む以下77層までＳＧ81
76 5Y4/1灰色粘土，5Y5/1灰色シルトと植物遺体と10YR7/4にぶい黄褐色火山灰と炭を少し含む
77 5Y5/1灰色砂質土，植物遺体と炭を含む
78 7.5Y4/1灰色粘土，10YR5/3にぶい黄褐色粘土と植物遺体を含む，以下地山
79 7.5Y4/1灰色砂，7.5Y5/1灰色シルトと植物遺体を含む
80 7.5Y5/1灰色砂，7.5Y5/1灰色シルトと植物遺体を含む
81 7.5Y4/1灰色砂，7.5Y4/1灰色シルトと植物遺体を含む
82 7.5Y5/1灰色粘土，植物遺体を含む
83 7.5Y4/1灰色砂，7.5Y5/1灰色シルトと植物遺体を含む
84 7.5Y5/1灰色シルト，植物遺体を含む

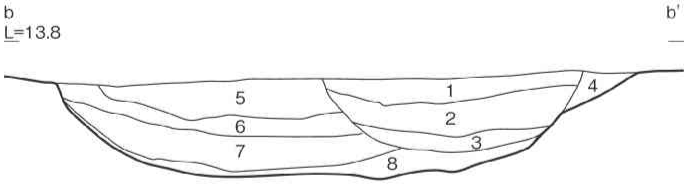
第26図　調査区壁土層図ａ－ａ'



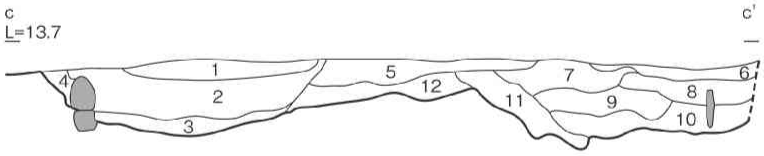
第27図　溝跡ＳＤ１・７，川跡ＳＧ８・129



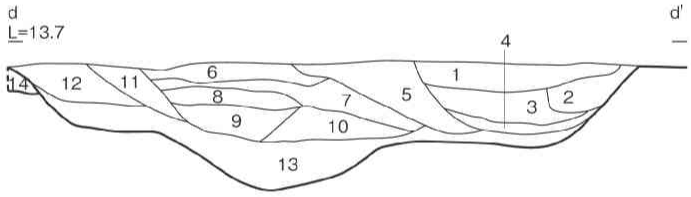
a' **溝跡ＳＤ１**
1 5Y5/2灰オリーブ色シルト，10YR3/2黒褐色シルトを含む
2 10YR4/2灰黄褐色シルト
3 5Y4/1灰色シルト，5Y4/2灰オリーブ色シルトを含む
4 5Y3/1オリーブ黒色砂
5 5Y6/2灰オリーブ色シルト，5Y3/1オリーブ黒色シルトを含む
6 5Y6/1灰色シルト，10YR5/2灰黄褐色シルトを含む
7 5Y4/1灰色砂，5Y3/1オリーブ黒色シルトを含む
8 5Y3/1オリーブ黒色粘土
9 5Y3/2オリーブ黒色粘土



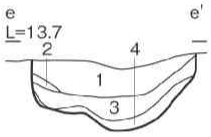
b' **溝跡ＳＤ１**
1 10YR3/1黒褐色シルト，10YR5/1褐灰色シルトを含む
2 10YR3/1黒褐色粘土
3 10YR3/2黒褐色砂
4 5Y5/2灰オリーブ色シルト，5Y3/1黒褐色粘土を含む
5 5Y3/1黒褐色粘土，5Y2/1黒色シルトを含む
6 5Y2/1黒色粘土，5Y4/1灰色粘土を含む
7 5Y3/1黒褐色粘土
8 5Y3/1黒褐色粘土，5Y4/2灰オリーブ色シルトを含む



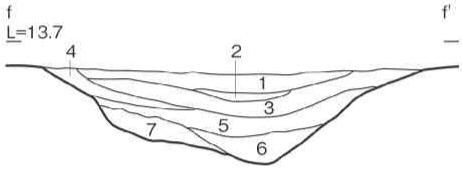
c' **溝跡ＳＤ１・７**
1 10YR4/2灰黄褐色シルト，5Y5/1灰色シルトを含む
2 5Y3/2オリーブ黒色シルト，5Y5/1灰色シルトを含む
3 5Y3/1オリーブ黒色砂，5Y5/1灰色シルトを含む
4 5Y3/2オリーブ黒色粘土，5Y5/2灰オリーブ色シルトを含む
5 5Y3/1オリーブ黒色シルト，5Y5/1灰色シルトを含む
6 5Y4/1灰色シルト，10YR5/2灰黄褐色粘土を含む
7 10YR6/2灰黄褐色シルト，10YR4/1褐灰色シルトを含む
8 5Y3/1オリーブ黒色シルト
9 5Y2/1黒色シルト，5Y5/1灰色シルトを含む
10 5Y3/1オリーブ黒色シルト，5Y5/2灰オリーブ色シルトを含む
11 5Y5/2灰オリーブ色シルト，5Y3/1オリーブ黒色シルトを含む
12 5Y5/1灰色シルト，5Y4/1灰色シルトを含む



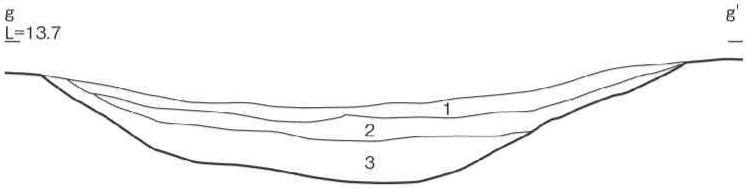
d' **溝跡ＳＤ１**
1 10YR4/2灰黄褐色シルト，5Y6/2灰オリーブ色シルトを含む
2 10YR4/1褐灰色シルト
3 10YR3/2黒褐色シルト，5Y5/3灰オリーブ色粘土を含む
4 5Y3/1オリーブ黒色砂
5 10YR3/1黒褐色シルト，10YR5/2灰黄褐色粘土を含む
6 10YR4/1褐灰色シルト，10YR5/1褐灰色シルトを含む
7 10YR4/1褐灰色シルト，5Y5/1灰色シルトを含む
8 5Y4/2灰オリーブ色シルト，5Y3/2オリーブ黒色シルトを含む
9 5Y3/1オリーブ黒色シルト，5Y5/3灰オリーブ色シルトを含む
10 5Y4/1灰色シルト，5Y5/3灰オリーブ色シルトを含む
11 10YR3/1黒褐色シルト
12 5Y5/1灰色砂，10YR4/1褐灰色粘土を含む
13 5Y2/1黒色粘土，5Y5/1灰色シルトを含む
14 10YR3/2黒褐色シルト，植物遺体を含む，ＳＧ８



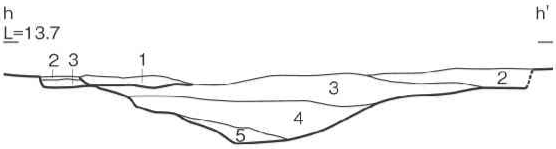
e' **溝跡ＳＤ７**
1 10YR3/1黒褐色粘土，10YR4/1褐灰色シルトと炭を少し含む
2 10YR3/1黒褐色粘土，5Y4/1灰色粘土を少し含む
3 10YR3/1黒褐色粘土，10YR4/1褐灰色粘土と植物遺体を含む
4 10YR3/1黒褐色シルト，5Y4/2灰オリーブ色シルトを含む



f' **川跡ＳＧ129**
1 10YR4/1褐灰色シルト，植物遺体を含む
2 5Y5/1灰色シルト，植物遺体を含む
3 5Y3/2オリーブ黒色粘土，植物遺体を含む
4 5Y4/1灰色粘土，植物遺体を少し含む
5 10YR5/2灰黄褐色粘土，植物遺体を含む
6 5Y5/1灰色粘土，植物遺体を多く含む
7 5Y4/1灰色粘土，10YR5/1褐灰色粘土と植物遺体を少し含む



g' **川跡ＳＧ８**
1 10YR3/2黒褐色粘質土，5Y3/2オリーブ黒色粘土と植物遺体を含む
2 5Y3/2オリーブ黒色粘質土，10YR3/1黒褐色細砂と植物遺体を含む
3 5Y3/1オリーブ黒色粘土，10YR3/1黒褐色粘質土と植物遺体を含む



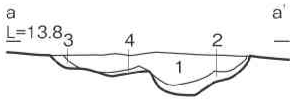
h' **川跡ＳＧ８**
1 撹乱
2 10YR2/1黒色シルト，植物遺体を少し含む，以下ＳＧ８
3 10YR3/2黒褐色シルト，植物遺体を少し含む
4 5Y4/3暗オリーブ色砂質土
5 5Y4/1灰色砂質土，5Y4/1灰色粘土と植物遺体を含む

木

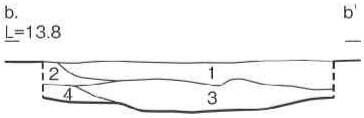
0　2m
1:40

第28図　溝跡ＳＤ１・７，川跡ＳＧ８・129

第29図　溝跡ＳＤ２・３・４・６・78・82・128



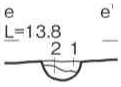
溝跡ＳＤ２
1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト，炭を含む
2 10YR5/4にぶい黄褐色シルト，炭を少し含む
3 10YR6/2灰黄褐色シルト，炭を少し含む
4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト



溝跡ＳＤ２
1 10YR4/2灰黄褐色シルト，10YR4/3にぶい黄褐色シルトと炭を含む
2 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土，10YR4/3にぶい黄褐色細砂と炭を少し含む
3 10YR5/3にぶい黄褐色粘土，10YR4/2灰黄褐色細砂と10YR4/4褐色砂と炭を含む
4 5Y4/1灰色細砂，5Y4/1灰色シルトと炭を少し含む

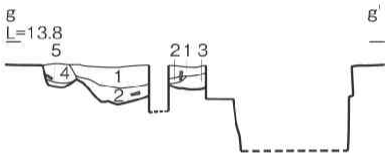
溝跡ＳＤ２・78
1 10YR4/2灰黄褐色シルト，10YR4/3にぶい黄褐色シルトと炭を含む，以下２層までＳＤ２
2 10YR5/3にぶい黄褐色粘土，10YR4/2灰黄褐色細砂と10YR4/4褐色砂と炭を含む
3 5Y5/1灰色シルト，ＳＤ78

溝跡ＳＤ２
1 5Y5/1灰色粘質土，5Y4/1灰色粘土と炭を含む

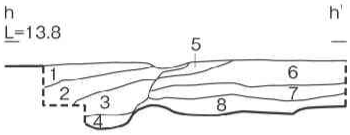


溝跡ＳＤ２
1 5Y5/1灰色シルト
2 5Y4/1灰色シルト

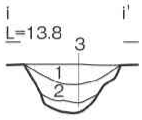
溝跡ＳＤ２
1 5Y4/2灰オリーブ色細砂，5Y5/2灰オリーブ色シルトと炭を少し含む
2 5Y5/2灰オリーブ色シルト，10YR4/2灰黄褐色細砂と炭を少し含む



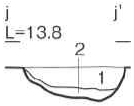
溝跡ＳＤ３
1 10YR4/2灰黄褐色シルト，5Y4/2灰オリーブ色細粒と炭を含む
2 5Y4/1灰色シルト，5Y5/1灰色シルトと炭と土器を含む
3 5Y4/1灰色シルト，炭を少し含む
4 10YR4/2灰黄褐色粘質土，10YR5/3にぶい黄褐色シルトと炭と土器を含む
5 10YR4/2灰黄褐色シルト，10YR5/2灰黄褐色シルトと炭を少し含む



溝跡ＳＤ３
1 10YR4/2灰黄褐色シルト，10YR3/1黒褐色粘質土と炭を多く含む
2 10YR3/4暗褐色細砂，10YR4/2灰黄褐色シルトと炭と焼土と土器を含む
3 5Y4/1灰色シルト，5Y3/2オリーブ黒色粘土と炭を含む
4 5Y4/1灰色細砂，5Y5/1灰色シルトを含む
5 10YR5/3にぶい黄褐色シルト，10YR4/2灰黄褐色細砂と炭を少し含む
6 10YR4/2灰黄褐色粘土，10YR5/3にぶい黄褐色シルトと炭を含む
7 5Y4/1灰色粘質土，10YR4/2灰黄褐色砂と炭を含む
8 10YR4/1褐灰色細砂，5Y5/1灰色シルトと炭を含む



溝跡ＳＤ３
1 10YR4/1褐灰色シルト，10YR4/2灰黄褐色シルトと炭を含む
2 5Y4/1灰色シルト，10YR4/1褐灰色シルトと炭を含む
3 5Y4/2灰オリーブ色粘土，5Y5/2灰オリーブ色シルトと植物遺体を含む

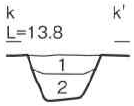


溝跡ＳＤ３
1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
2 10YR4/2灰黄褐色粘質土

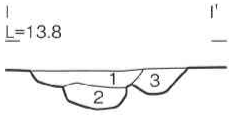
土器

0　　2m
1:40

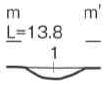
第30図　溝跡ＳＤ２・３・78



溝跡ＳＤ４
1 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト

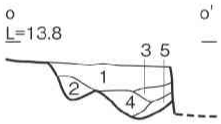


溝跡ＳＤ４
1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト，炭を少し含む
2 10YR5/1褐灰色シルト，炭を少し含む
3 10YR5/2灰黄褐色シルト，炭を少し含む

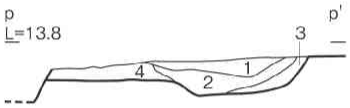


溝跡ＳＤ６
1 5Y5/1灰色粘質土，5Y4/1灰色粘土と炭を含む

溝跡ＳＤ６
1 5Y4/1灰色粘土，5Y5/1灰色シルトを含む



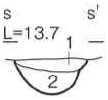
溝跡ＳＤ78
1 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土，炭を多く含む
2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
3 10YR6/2灰黄褐色粘土
4 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
5 10YR4/3にぶい黄褐色シルト



溝跡ＳＤ78
1 10YR4/2灰黄褐色シルト，炭と土器を多く含む
2 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土，炭を少し含む
3 10YR6/3にぶい黄橙色シルト
4 10YR5/4にぶい黄褐色シルト

溝跡ＳＤ82
1 5Y5/1灰色シルト，5Y4/1灰色シルトを含む

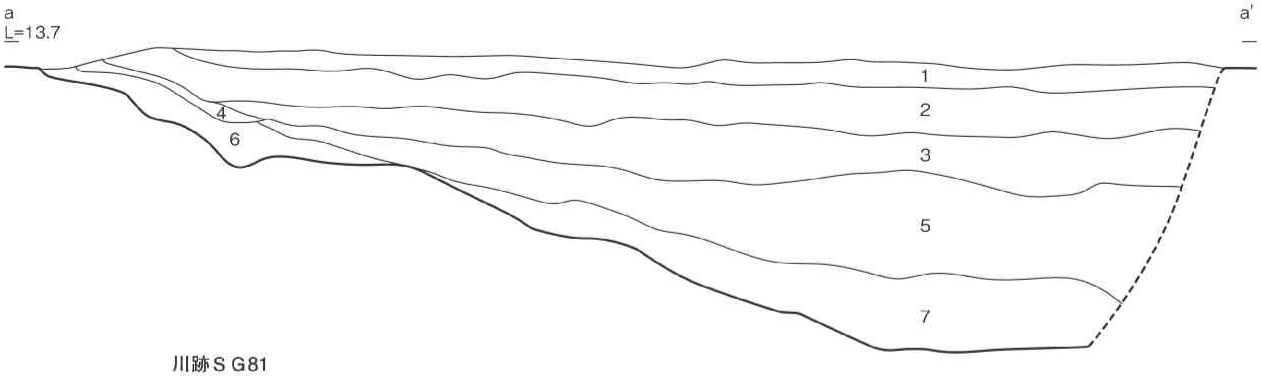
溝跡ＳＤ82
1 10YR4/1褐灰色シルト，5Y4/2灰オリーブ色シルトを多く含む
2 5Y4/1灰色シルト，5Y5/1灰色シルトを含む



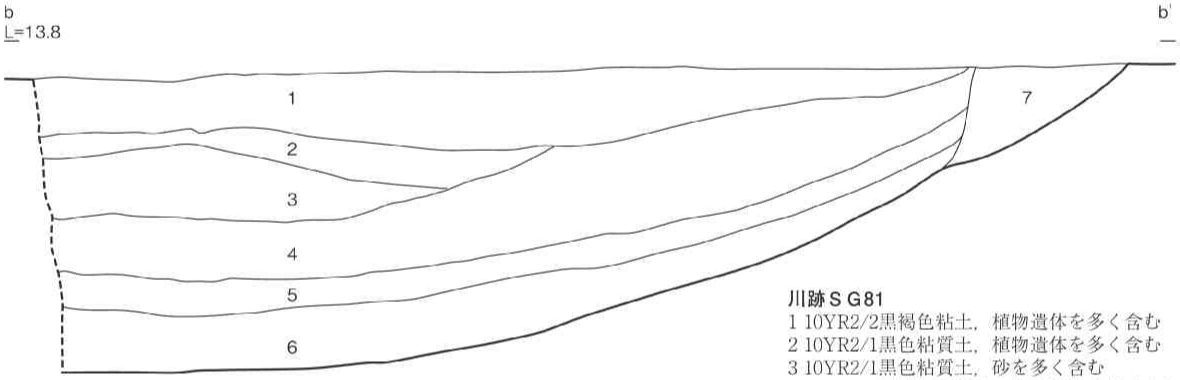
溝跡ＳＤ128
1 10YR4/1褐灰色粘土，5Y4/2灰オリーブ色シルトと炭を含む
2 5Y4/2灰オリーブ色シルト，5Y4/1灰色粘土と炭を含む

第31図　溝跡ＳＤ４・６・78・82・128

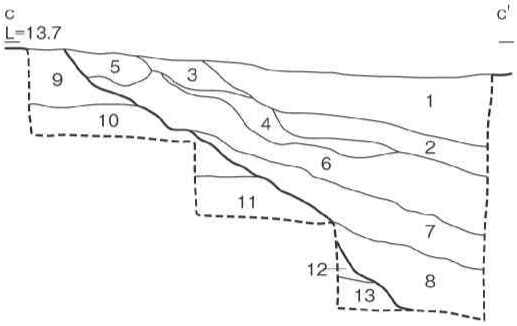
第32図　川跡ＳＧ81・130・141・248・356



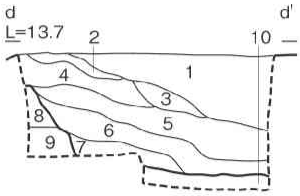
川跡ＳＧ81
1 10YR3/1黒褐色粘土，10YR4/1褐灰色粘土と植物遺体を多く含む
2 10YR4/1褐灰色粘土，5Y5/2灰オリーブ色粘土と植物遺体と炭を含む
3 10YR3/3暗褐色粘質土，10YR4/2灰黄褐色粘土と植物遺体を含む，10YR7/4にぶい黄橙色火山灰を帯状に含む
4 5Y4/1灰色砂質土，10YR3/1黒褐色シルトと植物遺体と炭を含む
5 10YR4/2灰黄褐色粘質土，流木と植物遺体を含む
6 5Y5/1灰色シルト，5Y4/1灰色砂と植物遺体と炭を含む
7 5Y4/1灰色砂，流木と植物遺体を含む



川跡ＳＧ81
1 10YR2/2黒褐色粘土，植物遺体を多く含む
2 10YR2/1黒色粘質土，植物遺体を多く含む
3 10YR2/1黒色粘質土，砂を多く含む
4 10YR3/2黒褐色粘質土，植物遺体を多く含む
5 10YR3/1黒褐色粘質土，砂と火山灰を含む
6 10YR3/1黒褐色粘質土，砂を多く含む
7 7.5Y5/1灰色シルト，炭を少し含む



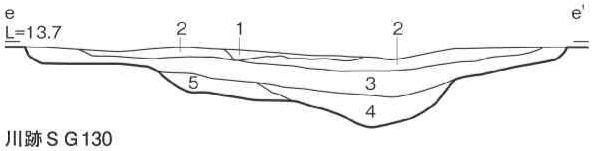
川跡ＳＧ81
1 10YR3/2黒褐色粘土，5Y4/2灰オリーブ色粘土と植物遺体を多く含む
以下８層まで川跡ＳＧ81
2 10YR2/1黒色粘土，10YR3/1黒褐色粘土と植物遺体を含む
3 10YR3/2黒褐色シルト，10YR4/1褐灰色シルトと火山灰と炭を少し含む
4 10YR3/1黒褐色粘土，10YR4/1褐灰色細砂と植物遺体を多く含む
5 10YR4/1褐灰色シルト，5Y5/2灰オリーブ色細砂と火山灰と炭を含む
6 5Y4/1灰色砂，5Y3/1オリーブ黒色粘土と植物遺体と炭を含む
7 5Y4/1灰色砂，10YR3/1黒褐色粘土と植物遺体を多く含む
8 5Y3/1オリーブ黒色砂，5Y4/1灰色粘土と植物遺体を含む
9 5Y5/2灰オリーブ色細砂，5Y5/1灰色砂を含む，以下地山
10 5Y4/1灰色砂，5Y5/2灰オリーブ色細砂と植物遺体を含む
11 5Y4/1灰色粘土，植物遺体を含む
12 5Y4/1灰色粘土
13 7.5Y4/1灰色シルト，植物遺体を少し含む



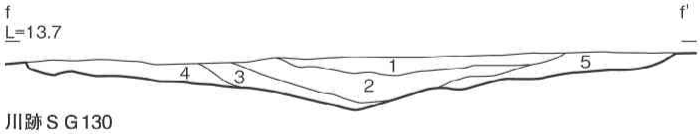
川跡ＳＧ81
1 10YR3/2黒褐色粘土，5Y4/2灰オリーブ色粘土と植物遺体を多く含む
以下７層まで川跡81
2 10YR4/2灰黄褐色細砂，10YR4/1褐灰色細砂と炭化粒と火山灰を含む
3 10YR3/2黒褐色砂，10YR4/1褐灰色細砂と炭化粒と火山灰を含む
4 10YR4/2灰黄褐色シルト，5Y4/1灰色シルトと火山灰と炭を少し含む
5 5Y4/1灰色細砂，5Y4/2灰オリーブ色シルトと炭を含む
6 5Y4/2灰オリーブ色細砂，10YR3/1黒褐色シルトと炭と流木を多く含む
7 5Y4/2灰オリーブ色シルト，5Y4/1灰色粘土を含む
8 7.5Y4/1灰色シルト，7.5Y4/1灰色砂を含む，以下地山
9 7.5Y4/2灰オリーブ色粘土，7.5Y5/1灰色細砂を含む
10 7.5Y5/1灰色細砂，10YR3/1黒褐色シルトを含む

0　2m
1:40

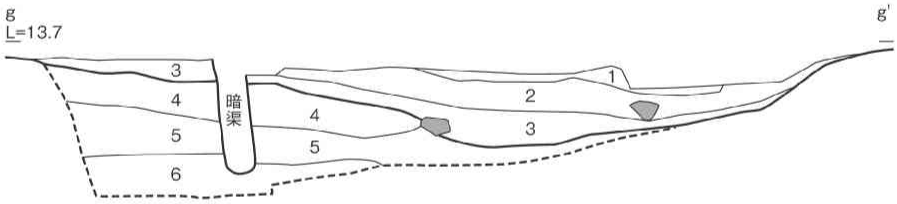
第33図　川跡ＳＧ81



川跡ＳＧ130
1 10YR2/1黒色シルト，10YR4/3にぶい黄褐色シルトと10YR7/2にぶい黄橙色火山灰を含む
2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト，10YR7/2にぶい黄橙色火山灰を含む
3 10YR3/3暗褐色シルト，炭を含む
4 10YR4/2灰黄褐色砂質土，炭と植物遺体を含む
5 10YR4/1褐灰色砂質土，炭を含む

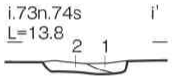


川跡ＳＧ130
1 10YR2/1黒色シルト，10YR6/4にぶい黄橙色シルトを含む
2 10YR5/1褐灰色粘質土，炭を少し含む
3 10YR4/1褐灰色砂粘質土，炭を少し含む
5 10YR5/2灰黄褐色シルト，炭を少し含む



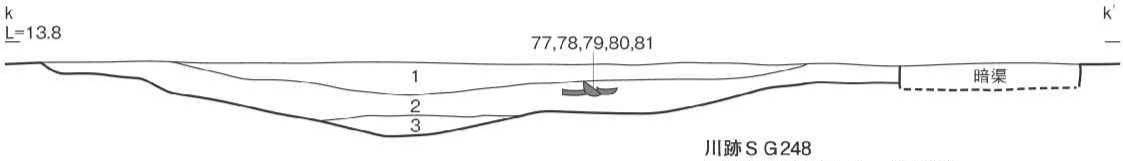
川跡ＳＧ130
1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト，10YR2/1黒色シルトと10YR7/2にぶい黄橙色火山灰を多く含む，以下３層まで川跡ＳＧ130
2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト，炭を含む
3 10YR3/3暗褐色砂質土，砂と炭を植物遺体を含む
4 10YR4/4褐色砂，以下地山
5 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土，炭と植物遺体を含む
6 10YR4/2灰黄褐色砂質土，植物遺体を含む

川跡ＳＧ141
1 5Y5/2灰オリーブ色粘土，5Y5/1灰色シルトと炭を含む
2 5Y5/1灰色細砂，5Y4/1灰色シルトと炭を少し含む

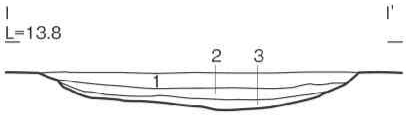


川跡ＳＧ141
1 5Y4/2灰オリーブ色粘土，5Y5/1灰色シルトと炭を含む
2 5Y5/2灰オリーブ色細砂，10YR5/2灰黄褐色シルトを少し含む

川跡ＳＧ141
1 5Y5/2灰オリーブ色細砂，10YR5/2灰黄褐色粘土と炭を含む



川跡ＳＧ248
1 5Y4/1灰色シルト，炭を含む
2 5Y5/1灰色粘土，炭と植物遺体と土器を含む
3 5Y5/1灰色粘土，5Y5/1灰色砂と植物遺体を含む

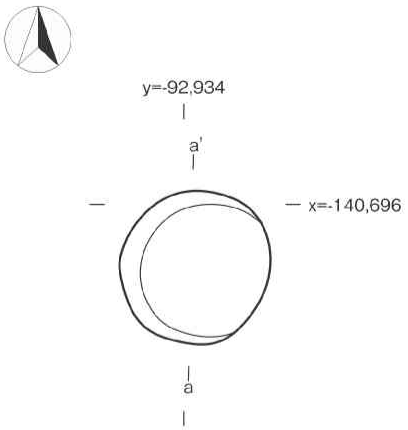


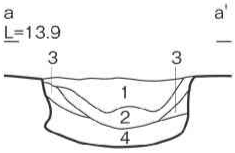
川跡ＳＧ356
1 5Y5/1灰色粘土，5Y5/1灰色シルトと炭を含む
2 5Y5/1灰色砂質土，炭を少し含む
3 5Y4/1灰色シルト，炭を少し含む

0　2m
1:40

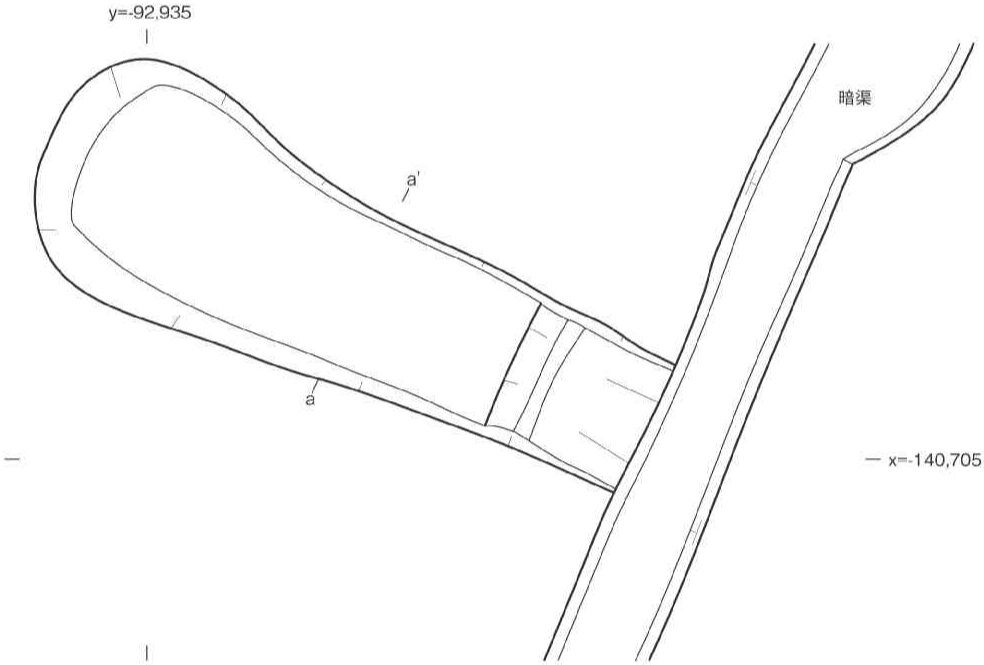
木　土器

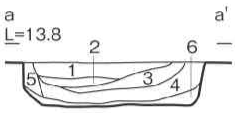
第34図　川跡ＳＧ130・141・248・356



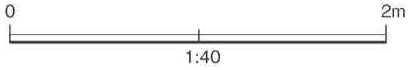


土坑ＳＫ５
1 10YR3/3暗褐色シルト
2 10YR2/2黒褐色シルト，10YR7/1灰白色シルトを含む
3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
4 10YR2/1黒色粘質土，10YR5/2灰黄褐色粘質土を含む

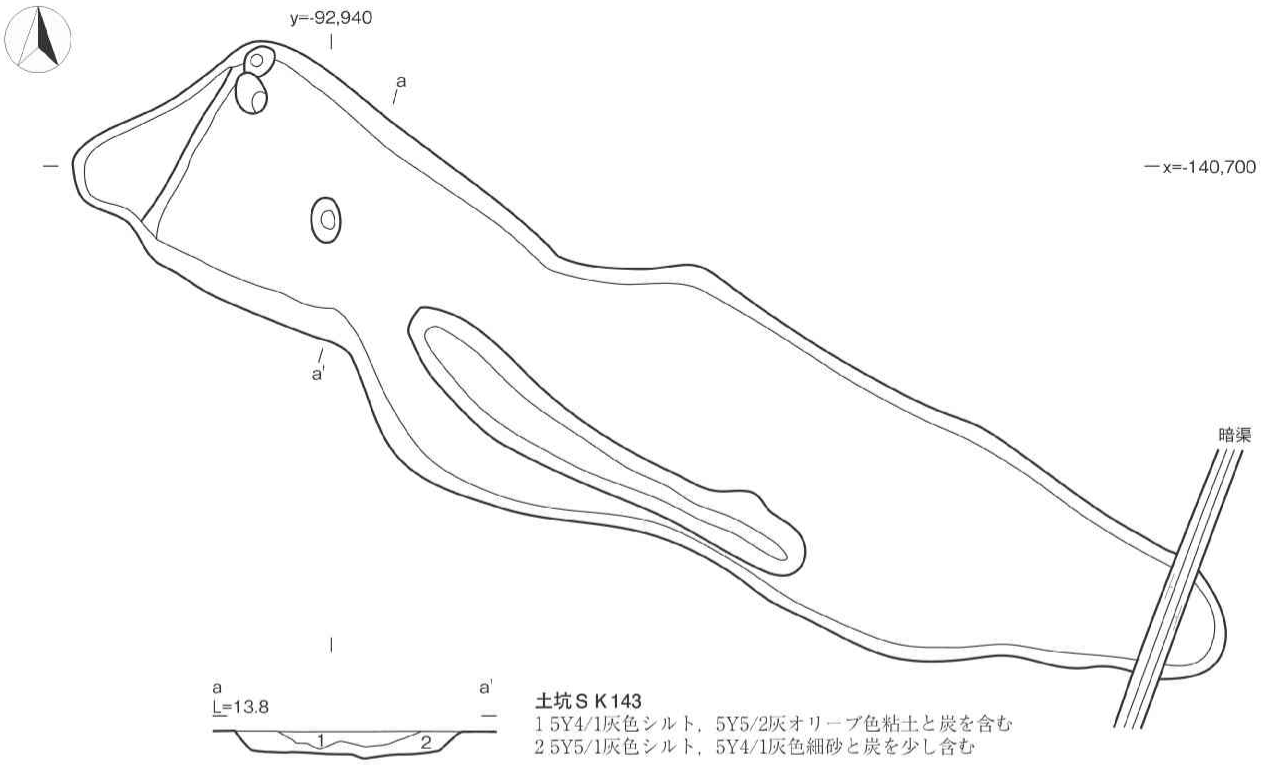




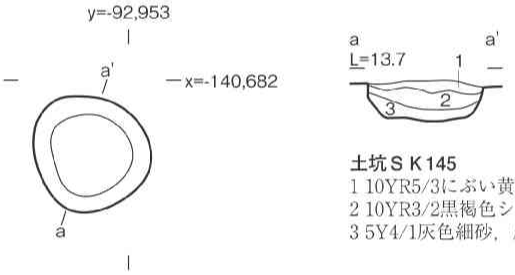
土坑ＳＫ142
1 10YR5/3にぶい黄褐色シルト，炭を少し含む
2 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土，炭を少し含む
3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土，炭を含む
4 10YR4/2灰黄褐色シルト，炭・焼土・植物遺体・土器を多く含む
5 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
6 10YR5/2灰黄褐色砂質土



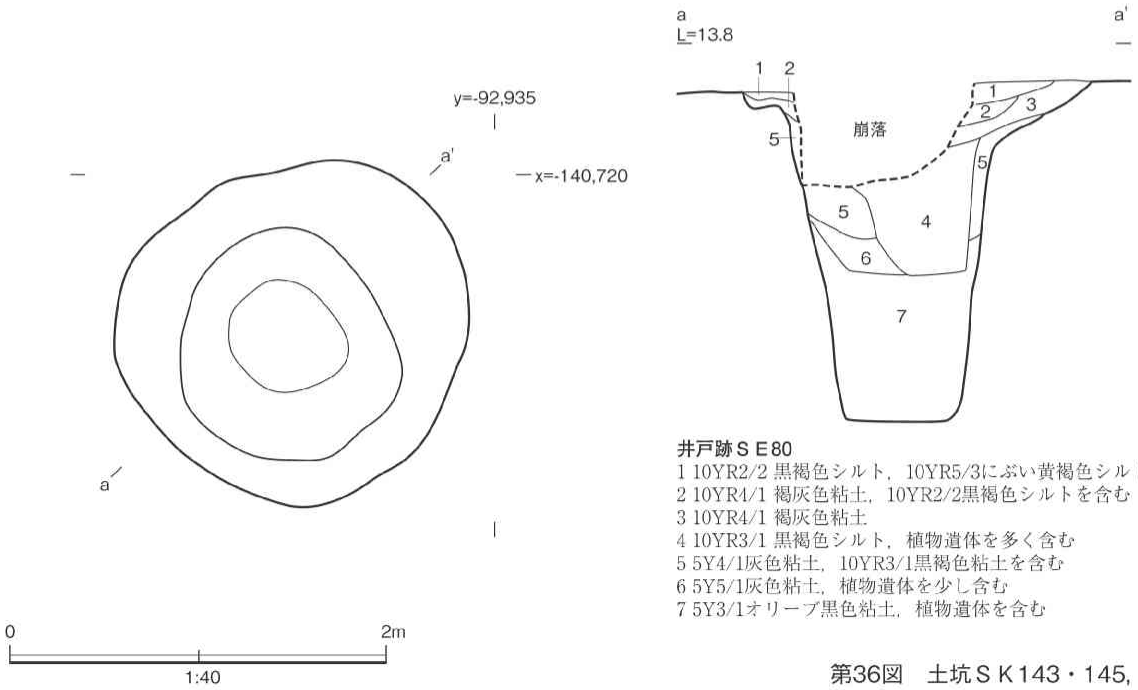
第35図　土坑ＳＫ５・142



土坑ＳＫ143
1 5Y4/1灰色シルト，5Y5/2灰オリーブ色粘土と炭を含む
2 5Y5/1灰色シルト，5Y4/1灰色細砂と炭を少し含む

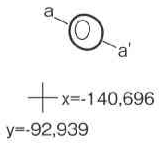


土坑ＳＫ145
1 10YR5/3にぶい黄褐色シルト，10YR3/2黒褐色シルトと炭を含む
2 10YR3/2黒褐色シルト，5Y4/1灰色粘質土と10YR7/2にぶい黄橙色火山灰と炭と土器を含む
3 5Y4/1灰色細砂，炭と植物遺体を含む

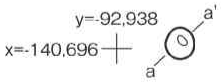


井戸跡ＳＥ80
1 10YR2/2 黒褐色シルト，10YR5/3にぶい黄褐色シルトを含む
2 10YR4/1 褐灰色粘土，10YR2/2黒褐色シルトを含む
3 10YR4/1 褐灰色粘土
4 10YR3/1 黒褐色シルト，植物遺体を多く含む
5 5Y4/1灰色粘土，10YR3/1黒褐色粘土を含む
6 5Y5/1灰色粘土，植物遺体を少し含む
7 5Y3/1オリーブ黒色粘土，植物遺体を含む

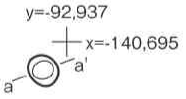
第36図　土坑ＳＫ143・145，井戸跡ＳＥ80



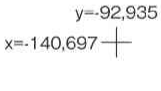
ＳＰ10
1 10YR4/4褐色微砂質粘土，黒色・灰黄褐色粘土ブロックと炭を多く含む
2 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土，炭を少し含む
3 10YR4/4褐色微砂質粘土



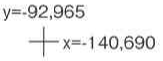
ＳＰ11
1 10YR4/4褐色微砂質粘土
2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土



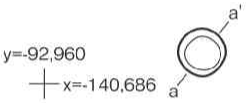
ＳＰ12
1 10YR3/3暗褐色微砂質粘土，黒色・灰黄褐色粘土ブロックと炭を多く含む
2 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土，炭と粘土を含む
3 10YR4/1褐灰色微砂質粘土



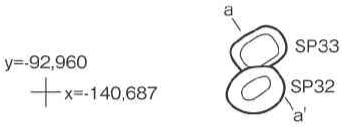
ＳＰ14
1 10YR4/3褐色微砂質粒，炭を多く含む
2 10YR4/3にぶい黄褐色，炭を少し含む

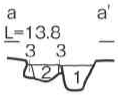


ＳＰ25
1 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土
2 10YR4/6褐色粗砂質粗砂

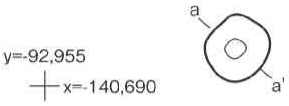


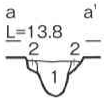
ＳＰ30
1 10YR3/3暗褐色細砂質粘土，炭を少し含む
2 10YR4/6褐色細砂質粘土，炭を含む



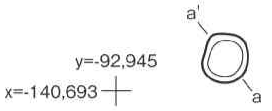


ＳＰ32・33
1 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土，炭を含む，ＳＰ32
2 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土，以下ＳＰ33
3 10YR4/1褐灰色微砂質粘土



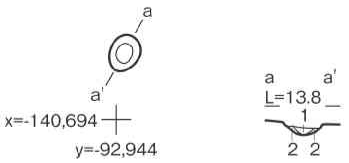


ＳＰ34
1 5Y4/1灰色粗素砂質粘土
2 5Y4/3暗オリーブ色粗砂質粘土

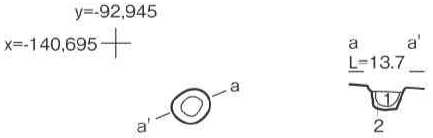


ＳＰ36
1 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土
2 10YR4/6褐色微砂質粘土

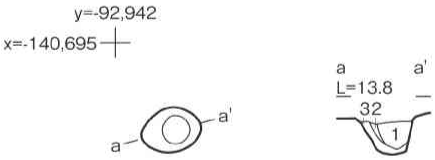
第37図　柱穴ＳＰ10・11・12・14・25・30・32・33・34・36



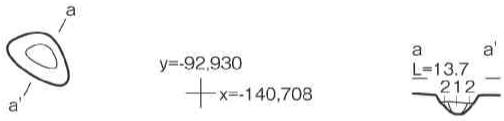
ＳＰ37
1 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土
2 10YR5/2灰黄褐色微砂質粘土



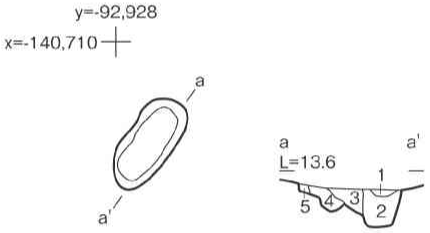
ＳＰ38
1 10YR4/4褐色微砂質粘土
2 10YR4/1褐灰色微砂質粘土



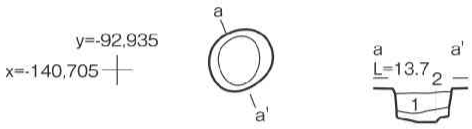
ＳＰ40
1 10YR3/2黒褐色微砂質粘土，10YR4/1褐灰色粘土を含む
2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土
3 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土



ＳＰ44
1 5Y4/1灰色粗砂質粘土，炭を含む
2 5Y4/1灰色粗砂質粘土，炭を少し含む

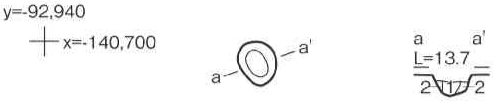


ＳＰ46
1 5Y5/1灰色微砂質粘土
2 5Y4/1灰色微砂質粘土
3 5Y5/2灰オリーブ色微砂質粘土
4 5Y5/3灰オリーブ色微砂質粘土
5 5Y4/3暗オリーブ色微砂質粘土

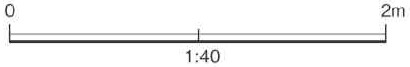


ＳＰ49
1 10YR4/6褐色微砂質粘土
2 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土

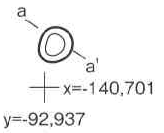
ＳＰ66
1 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土
2 10YR3/3暗褐色微砂質粘土



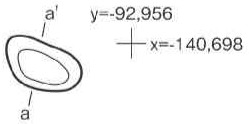
ＳＰ68
1 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土
2 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土



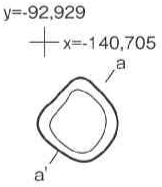
第38図　柱穴ＳＰ37·38·40・44・46・49・66・68

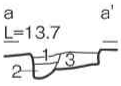


ＳＰ69
1 10YR4/4褐色微砂質粘土，炭を含む
2 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土

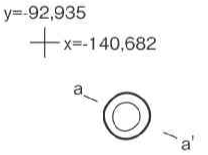


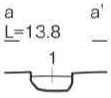
ＳＰ74
1 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土
2 10YR4/1褐灰色粗砂質粘土



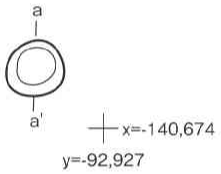


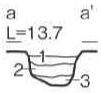
ＳＰ77
1 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土
2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土
3 10YR4/4褐色微砂質粘土





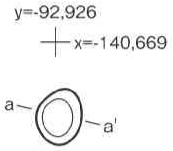
ＳＰ84
1 5Y5/1灰色シルト，5Y4/1灰色粘土と炭を含む



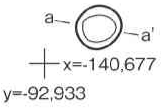


ＳＰ110
1 10YR4/2灰褐色微砂質粘土
2 10YR4/4褐色微砂質粘土
3 10YR3/3暗褐色微砂質粘土

ＳＰ116
1 10YR4/4褐色微砂質粘土
2 10YR4/1褐灰色微砂質粘土



ＳＰ119
1 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土
2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土

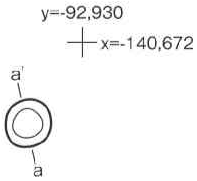


ＳＰ131
1 10YR4/4褐色微砂質粘土，炭を少し含む

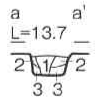
木

0　2m
1:40

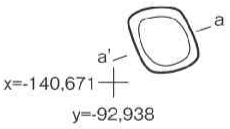
第39図　柱穴ＳＰ69･74･77･84･110・116・119・131

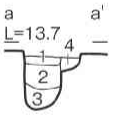


ＳＰ133
1 10YR4/4褐色微砂質粘土
2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土

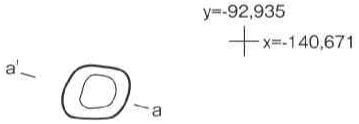


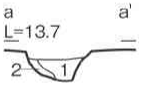
ＳＰ134
1 10YR3/3暗褐色微砂質粘土
2 10RY4/2灰黄褐色微砂質粘土
3 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土



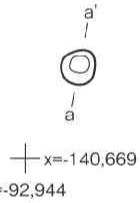


ＳＰ137
1 10YR3/3暗褐色微砂質粘土，炭を含む
2 10YR4/4褐色微砂質粘土，炭を多く含む
3 10YR4/6褐色微砂質粘土
4 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土

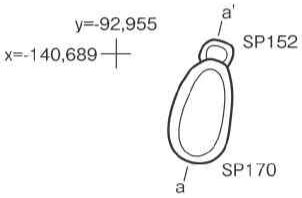


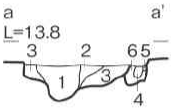


ＳＰ138
1 10YR4/4褐色微砂質粘土
2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土

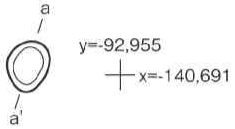


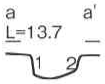
ＳＰ150
1 10YR4/1褐灰色微砂質粘土
2 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土



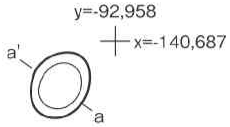


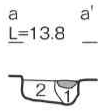
ＳＰ152・170
1 5Y4/3暗オリーブ色粗砂質粘土，炭を少し含む，以下３層までＳＰ170
2 5Y5/4オリーブ色粗砂質粘土
3 5Y4/1灰色微砂質粘土
4 5Y5/2灰オリーブ色粗砂質粘土，以下ＳＰ152
5 5Y4/1灰色粗砂質粘土
6 5Y5/6オリーブ色微砂質粘土





ＳＰ155
1 5Y4/3暗オリーブ色粗砂質粘土，炭を少し含む
2 5Y4/2灰オリーブ色粗砂質粘土



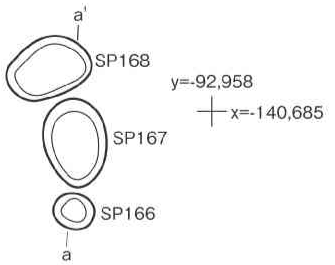


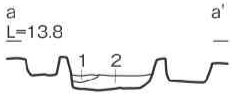
ＳＰ164
1 5Y5/1灰色細砂，10YR5/2灰色オリーブ色粘土と炭を少し含む
2 10YR6/2灰黄褐色粘土，10YR6/1褐灰色シルトを含む

木

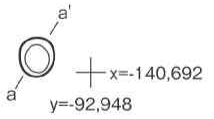
0　　2m
1:40

第40図　柱穴ＳＰ133・134・137・138·150·152・170・155・164

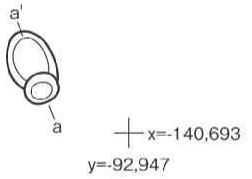


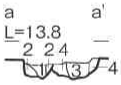


ＳＰ167
1 10YR4/3にぶい黄褐色細砂質粘土
2 10YR4/4褐色微砂質粘土

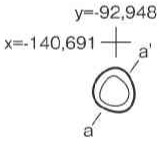


ＳＰ174
1 10YR4/4褐色微砂質粘土
2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土

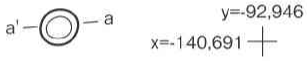




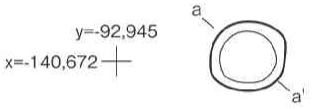
ＳＰ176・374
1 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土，以下２層までＳＰ176
2 10YR4/6褐色微砂粘土
3 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土，以下ＳＰ374
4 10YR4/4褐色微砂質粘土

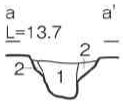


ＳＰ177
1 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土
2 10YR4/4褐色粗砂質粘土

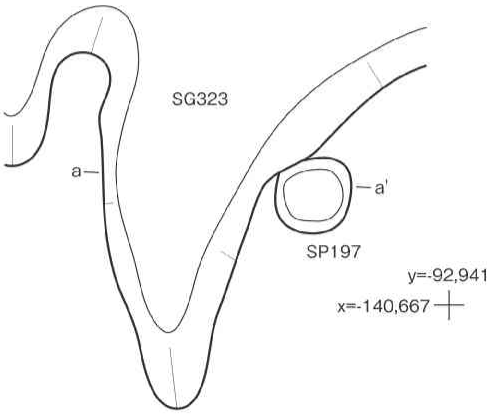


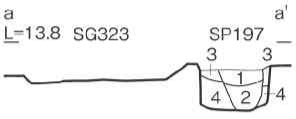
ＳＰ178
1 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土
2 10YR4/1褐灰色微砂質粘土





ＳＰ185
1 10YR4/4褐色微砂質粘土
2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土

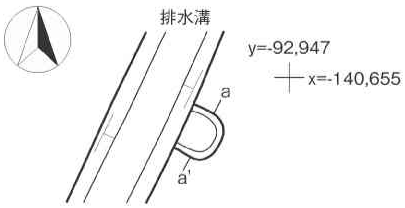


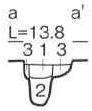


ＳＰ197
1 10YR4/2灰黄褐色砂質土，5Y6/1灰色シルトと炭を含む
2 10YR4/1褐灰色粘土，炭を少し含む
3 10YR4/2灰黄褐色粘土，5Y5/1灰色シルトと炭を少し含む
4 5Y5/1灰色シルト，5Y4/1灰色粘土を少し含む

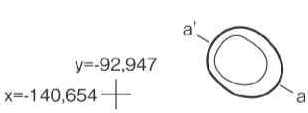
0　2m
1:40

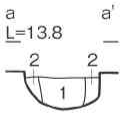
第41図　柱穴ＳＰ167･174･176･177・178・185・197，川跡ＳＧ323



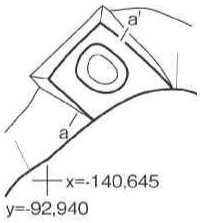


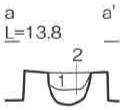
ＳＰ215
1 10YR5/2灰黄褐色粘土，5Y5/1灰色シルトと炭を含む
2 5Y4/1灰色シルト，5Y4/1灰色粘土と炭を少し含む
3 5Y5/1灰色シルト，5Y5/1灰色粘土と炭を少し含む



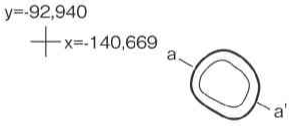


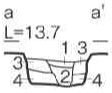
ＳＰ216
1 10YR5/2灰黄褐色粘土，5Y4/1灰色シルトと炭を含む
2 5Y5/1灰色シルト，5Y5/1灰色粘土と炭を少し含む



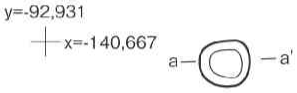


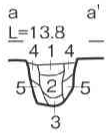
ＳＰ218
1 10YR5/2灰黄褐色シルト，10YR3/1黒褐色シルトと炭を含む
2 10YR5/2灰黄褐色粘土，5Y5/1灰色シルトを少し含む



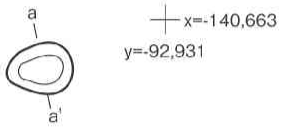


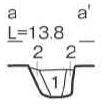
ＳＰ220
1 10YR4/2灰黄褐色微砂質粘土
2 10YR4/4褐色微砂質粘土
3 10YR4/3にぶい黄褐色微砂質粘土
4 10YR4/1褐灰色微砂質粘土



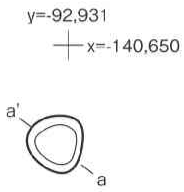


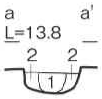
ＳＰ257
1 10YR5/3にぶい黄褐色細砂，5Y5/2灰オリーブ色シルトと炭を含む
2 5Y5/2灰オリーブ色粘質土，炭を少し含む
3 5Y4/1灰色シルト，炭を少し含む
4 10YR5/2灰黄褐色シルト，5Y4/1灰色細砂と炭を含む
5 5Y5/1灰色粗砂，5Y5/2灰オリーブ色シルトと植物遺体を少し含む



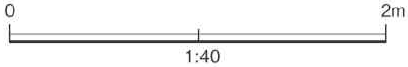


ＳＰ259
1 5Y5/1灰色シルト，10YR4/2灰黄褐色粘土と炭を含む
2 5Y4/1灰色細砂，5Y4/1灰色粘土と炭を少し含む

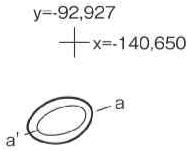


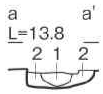


ＳＰ286
1 5Y4/1灰色粘質土，5Y5/1灰色シルトと炭を少し含む
2 5Y5/1灰色細砂，10YR5/2灰黄褐色粘土を含む

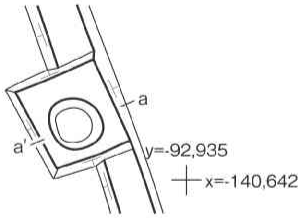


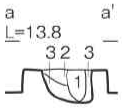
第42図　柱穴ＳＰ215・216・218・220・257・259・286



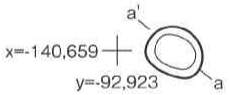


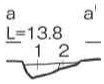
ＳＰ292
1 10YR4/2灰黄褐色粘土，5Y5/2灰オリーブ色シルトと
　10YR5/2灰黄褐色粘土と炭を少し含む
2 5Y5/1灰色シルト，10YR5/1褐灰色粘土を含む



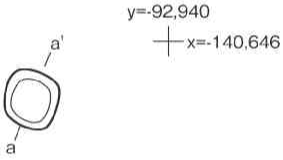


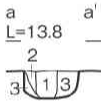
ＳＰ335
1 10YR5/1褐灰色粘土，5Y4/1灰色シルトと炭を含む
2 10YR4/1褐灰色粘質土，5Y4/1灰色シルトと炭を少し含む
3 5Y5/1灰色シルト，5Y4/1灰色粘土を少し含む



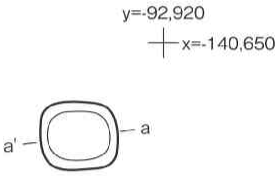


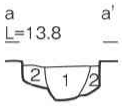
ＳＰ342
1 10YR4/2灰黄褐色シルト，10YR6/1褐灰色シルトと炭を多く含む
2 5Y5/1灰色シルト，10YR5/2灰黄褐色粘土と炭を少し含む



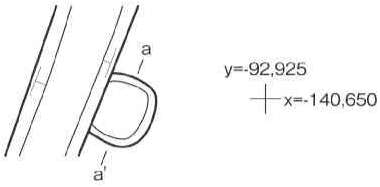


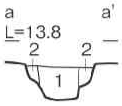
ＳＰ350
1 10YR3/3暗褐色粘土，10YR5/2灰黄褐色粘土と炭を多く含む
2 5Y5/1灰色シルト，5Y4/1灰色シルトと炭を少し含む
3 5Y5/1灰色シルト，10YR5/2灰黄褐色粘土を少し含む





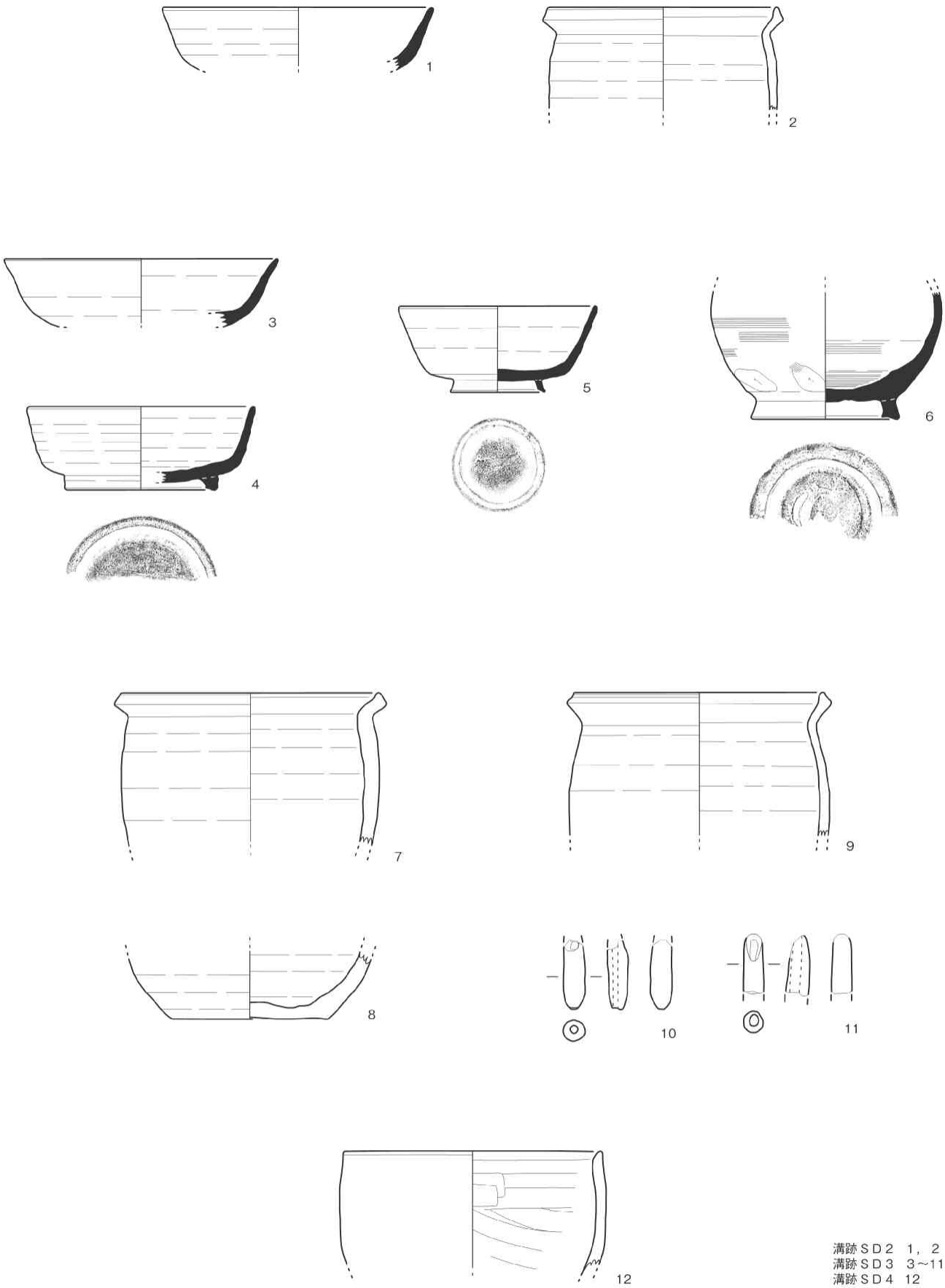
ＳＰ353
1 10YR5/2灰黄褐色粘土，5Y4/1灰色シルトと炭を含む
2 5Y5/1灰色細砂，10YR5/2灰黄褐色粘土と植物遺体を少し含む



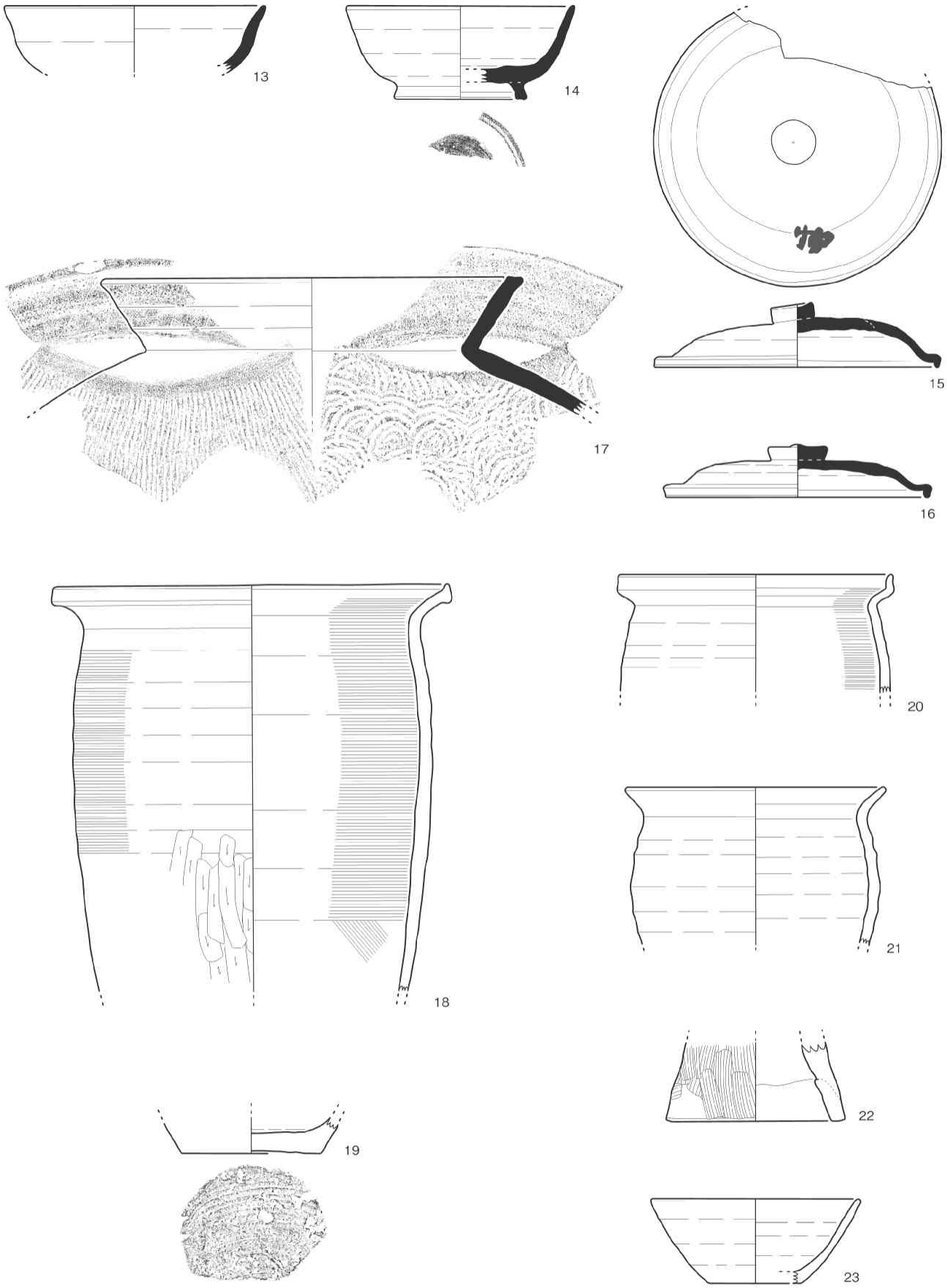


ＳＰ368
1 10YR5/2灰黄褐色粘土，5Y4/1灰色シルトと炭を含む
2 5Y5/1灰色細砂，5Y4/1灰色シルトと炭を少し含む

第43図　柱穴ＳＰ292・335・342・350・353・368

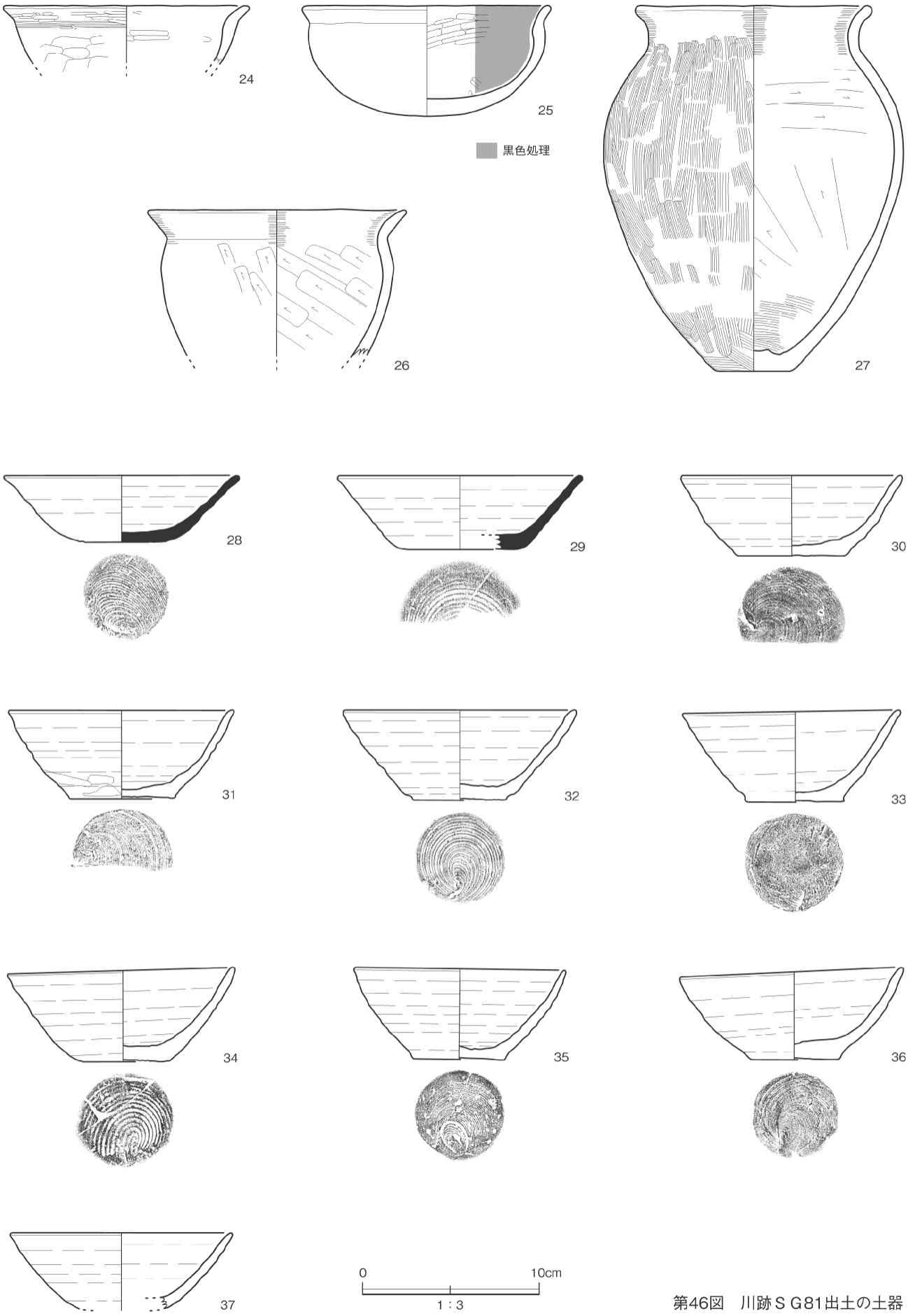


第44図　溝跡ＳＤ２・３・４出土の土器・土製品

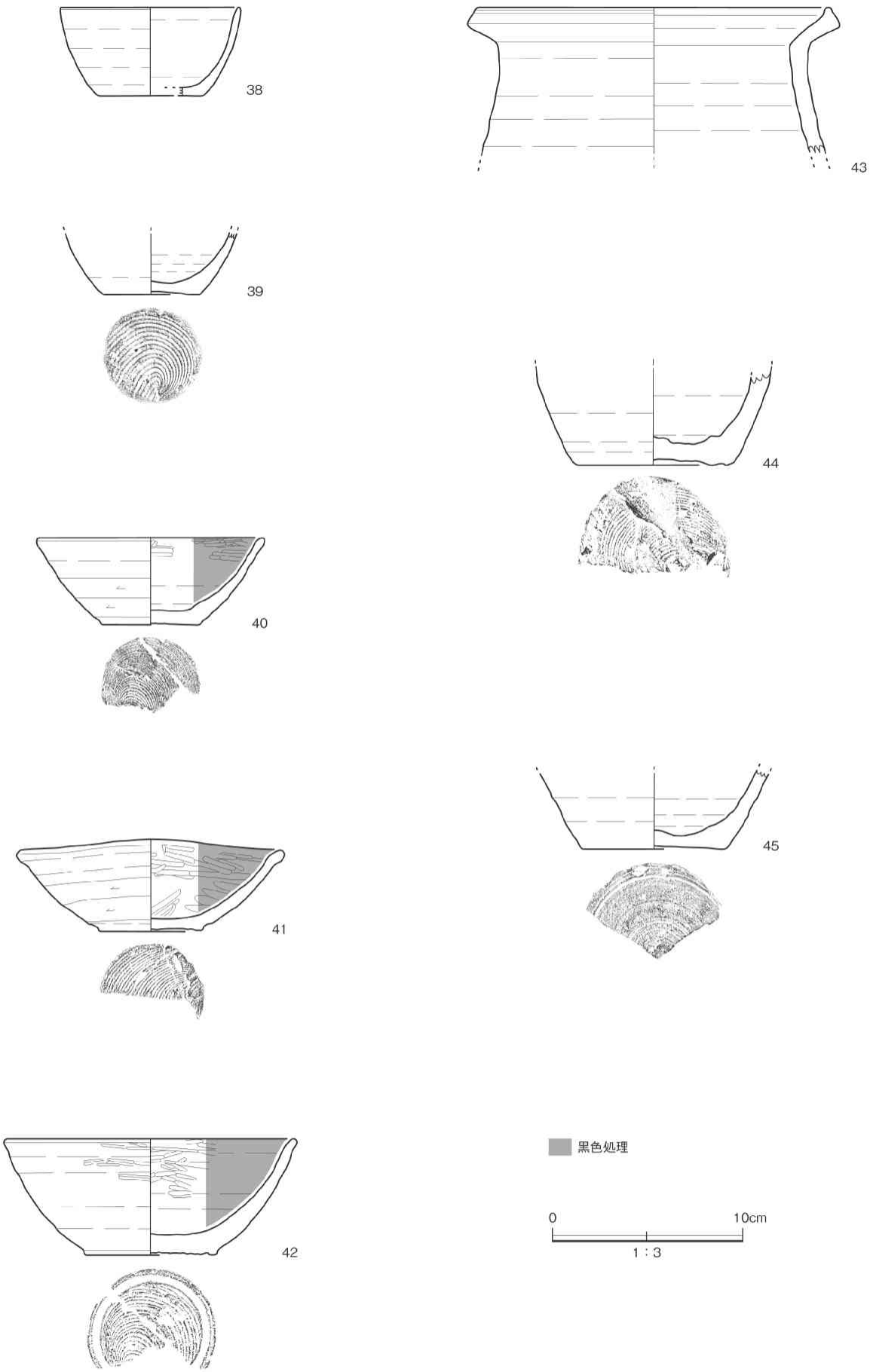


溝跡ＳＤ78　13～21
溝跡ＳＤ322 22
溝跡ＳＤ325 23

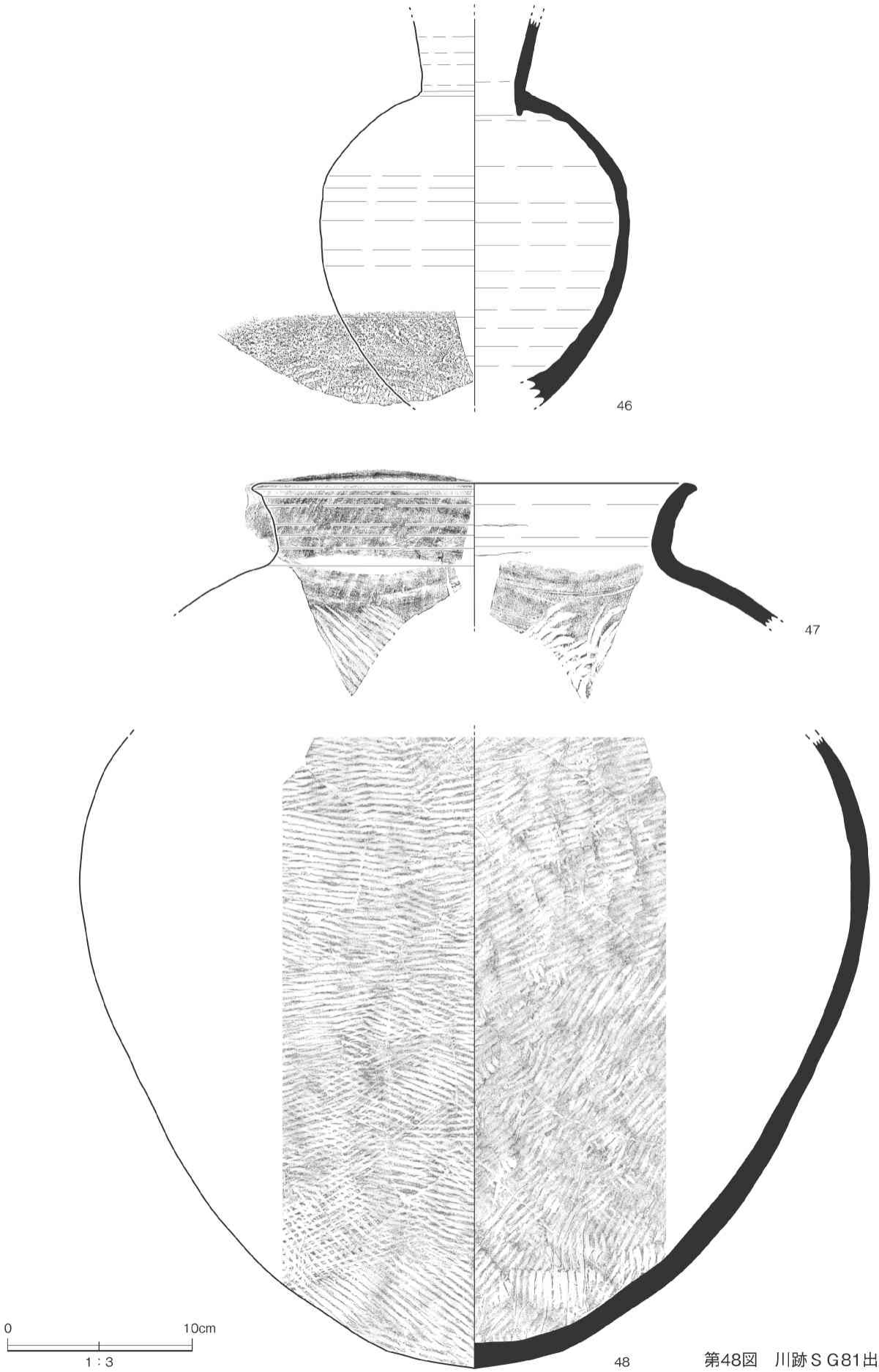
第45図　溝跡ＳＤ78・322・325出土の土器



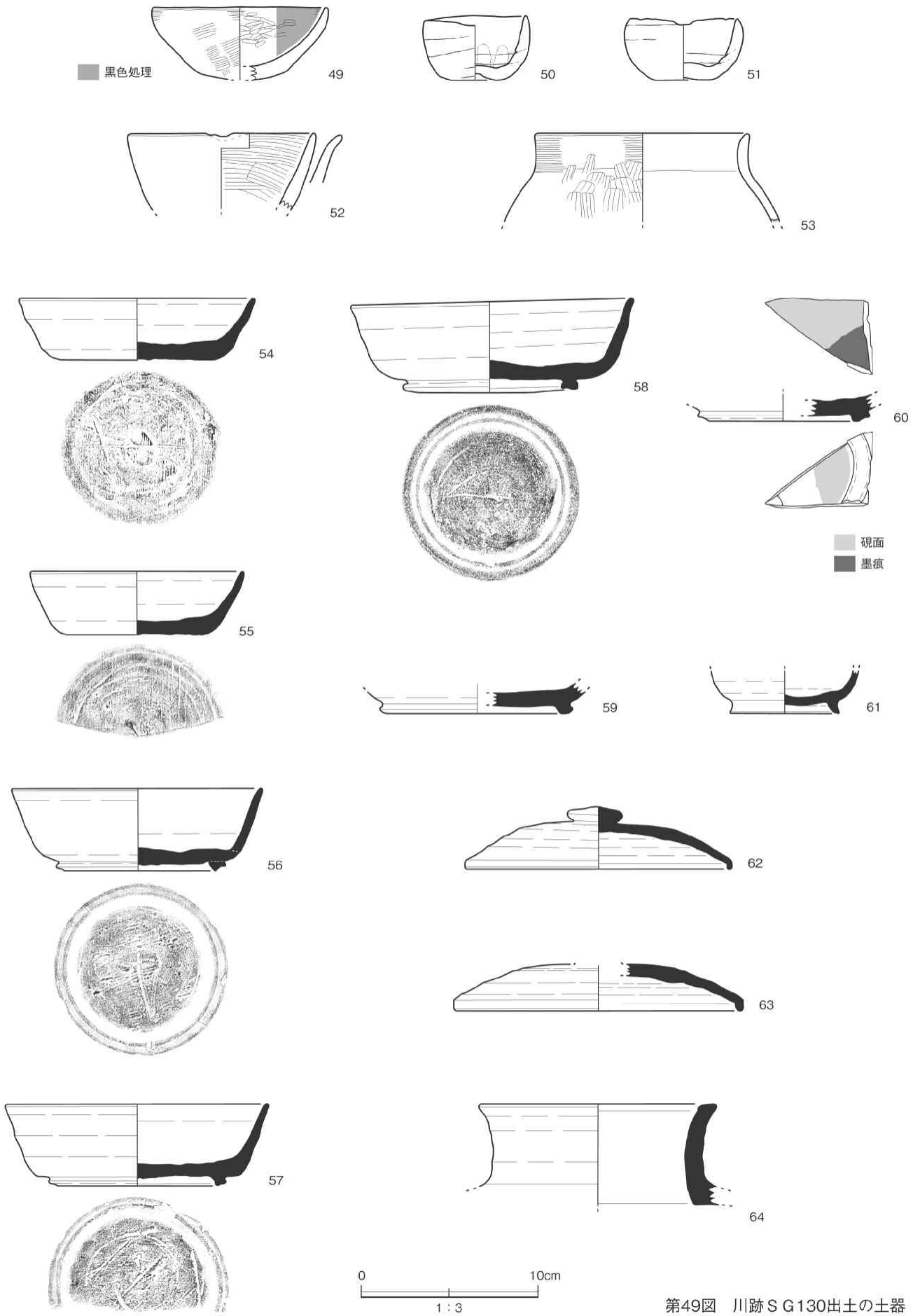
第46図　川跡ＳＧ81出土の土器



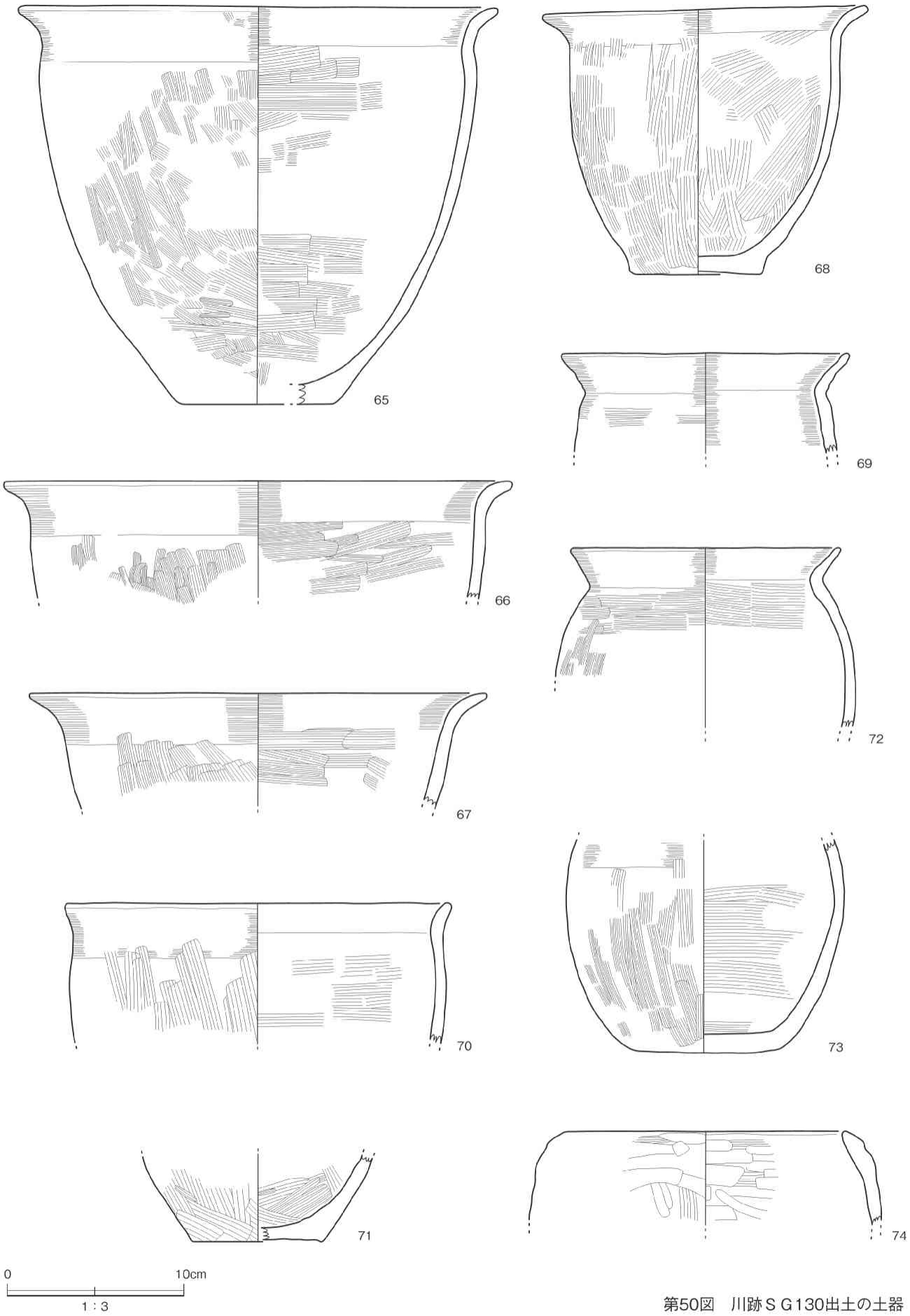
第47図　川跡ＳＧ81出土の土器



第48図　川跡ＳＧ81出土の土器

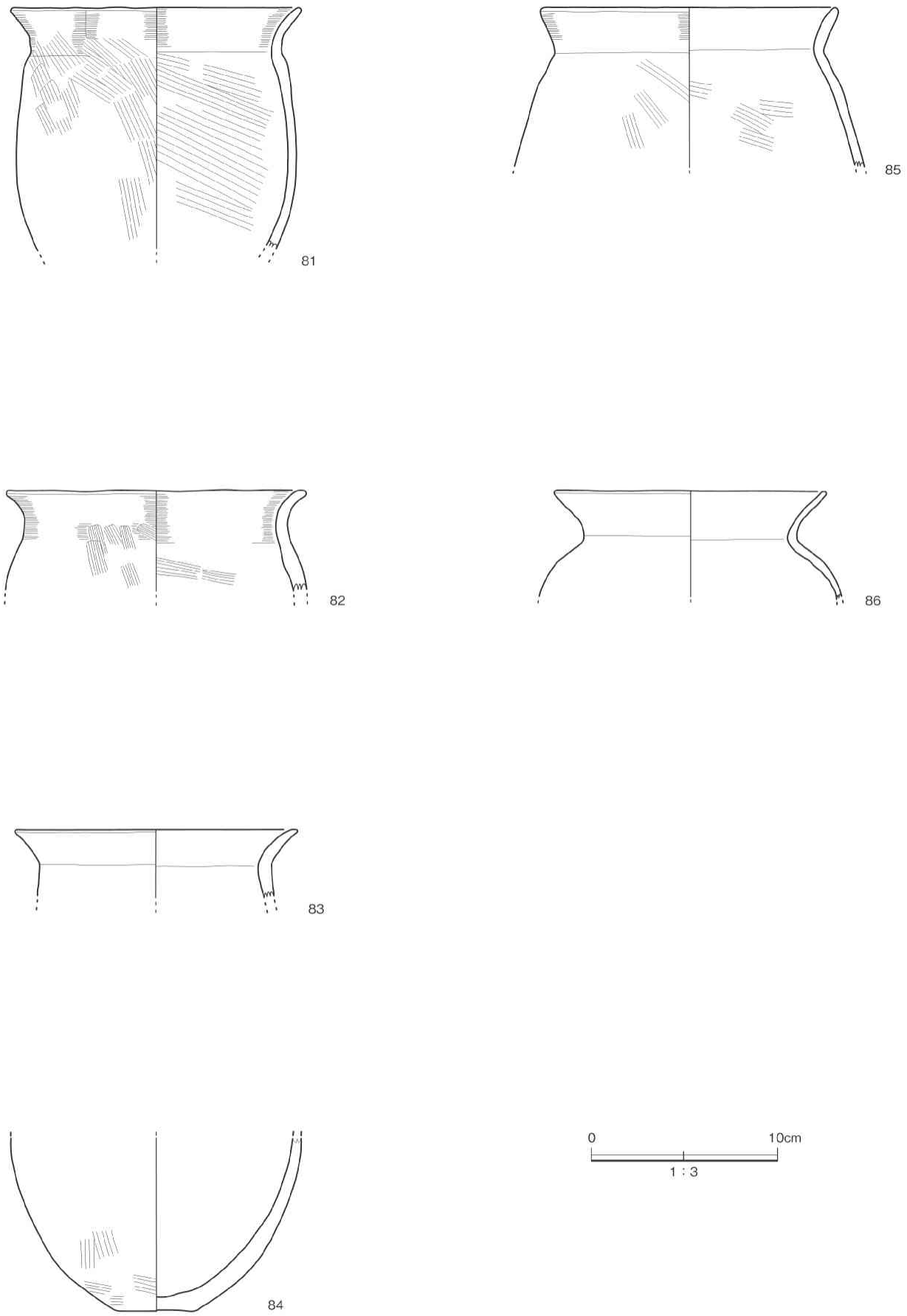


第49図　川跡ＳＧ130出土の土器

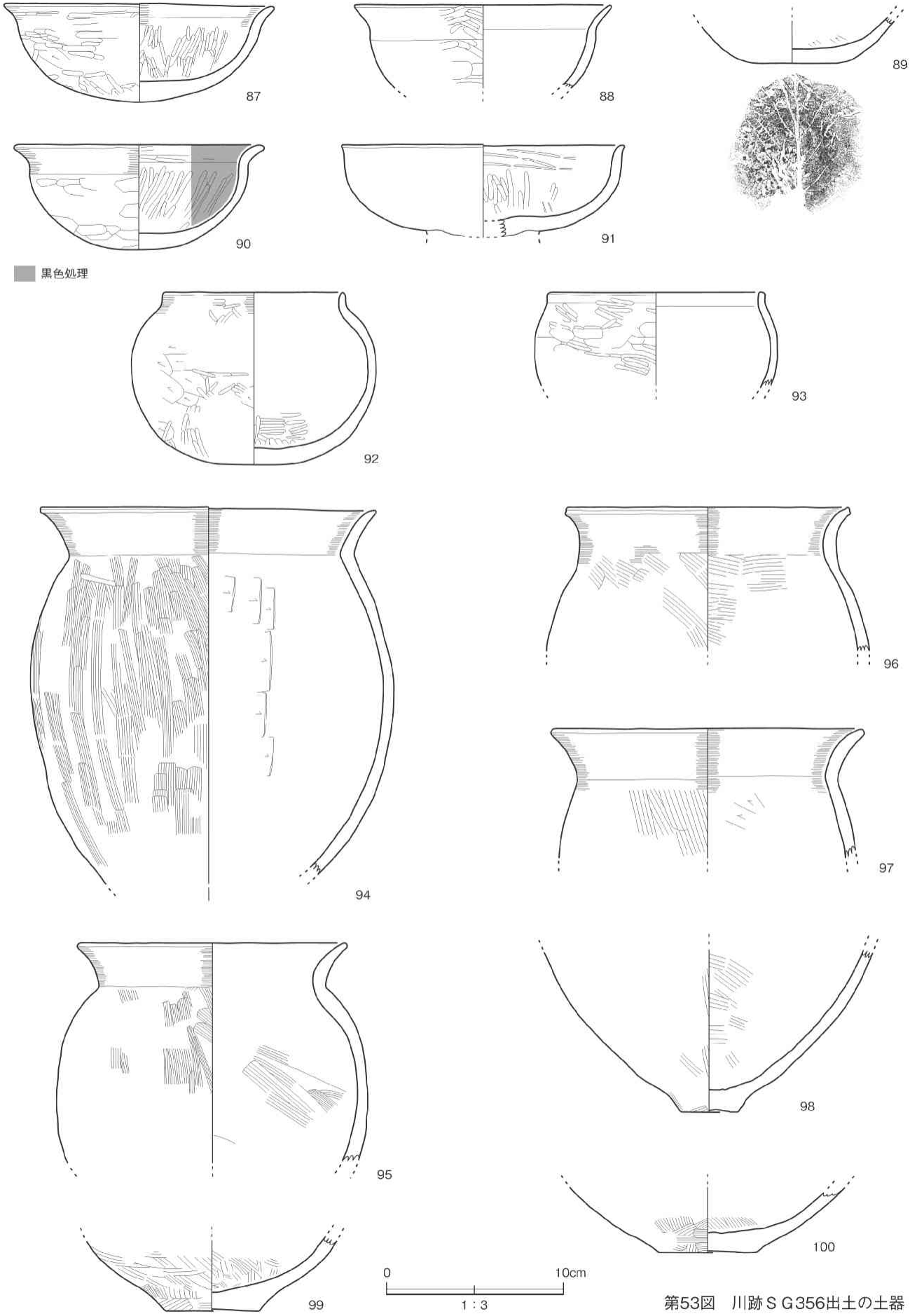


第50図　川跡ＳＧ130出土の土器

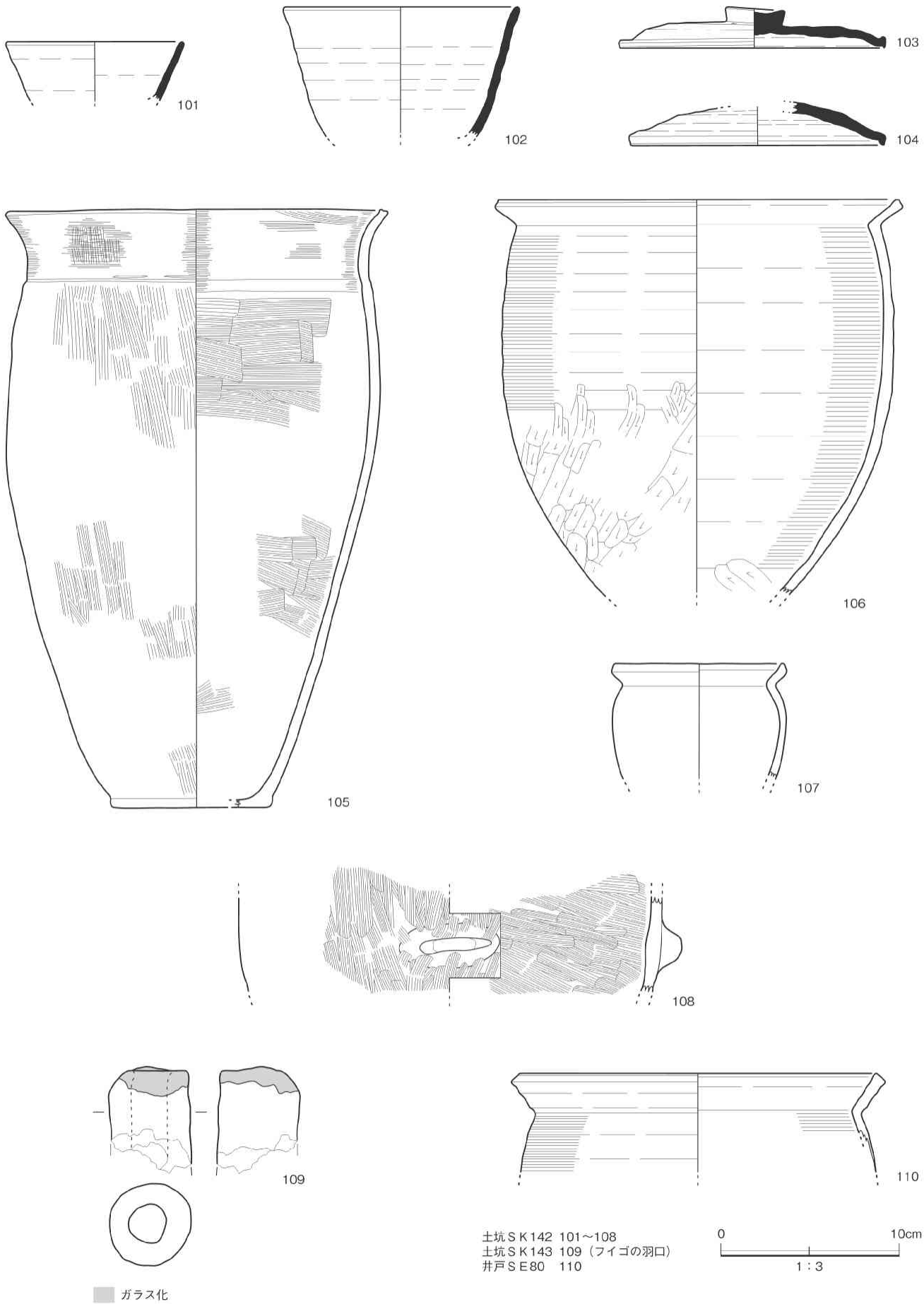
第51図　川跡ＳＧ248出土の土器



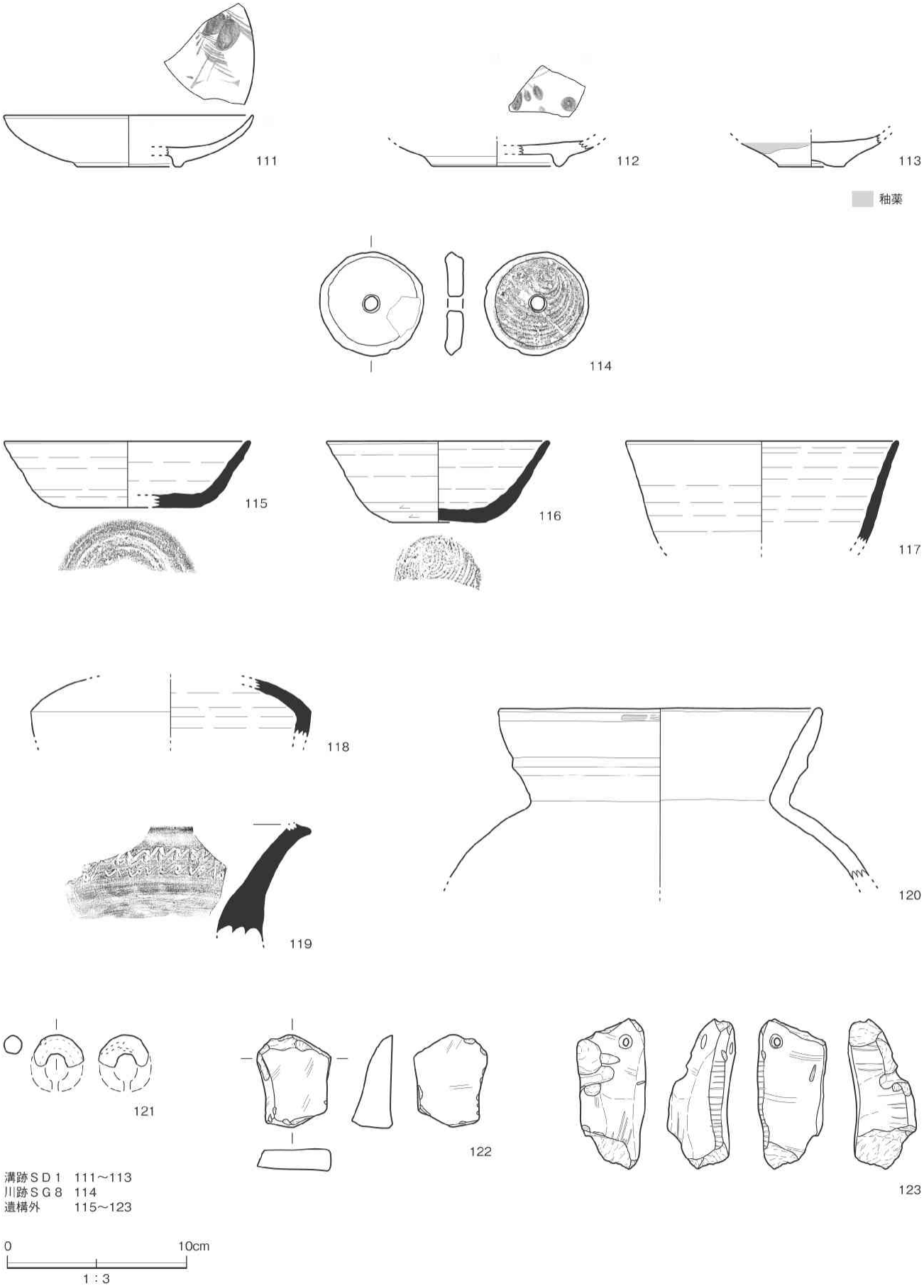
第52図　川跡ＳＧ248出土の土器



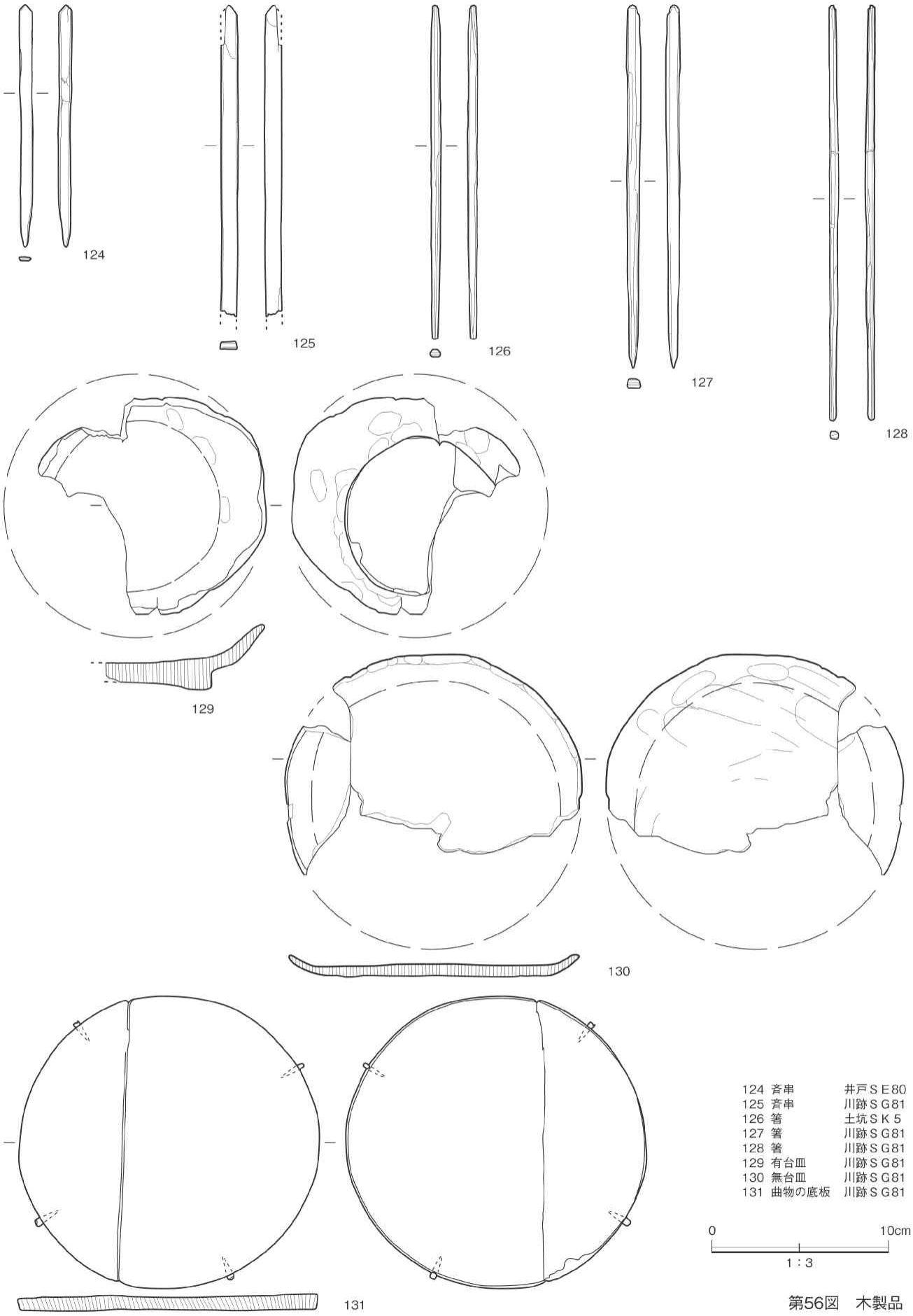
第53図　川跡ＳＧ356出土の土器



第54図　土坑ＳＫ142・143出土の土器・フイゴの羽口，井戸ＳＥ80出土の土器



第55図　溝跡ＳＤ１，川跡ＳＧ８，遺構外出土の土器・紡錘車（114）・環状土製品（121）・砥石（122・123）



124	斉串	井戸ＳＥ80
125	斉串	川跡ＳＧ81
126	箸	土坑ＳＫ５
127	箸	川跡ＳＧ81
128	箸	川跡ＳＧ81
129	有台皿	川跡ＳＧ81
130	無台皿	川跡ＳＧ81
131	曲物の底板	川跡ＳＧ81

0　10cm
1：3

第56図　木製品

写真图版

調査区全景（上が北東）

調査区遠景（北東から）

溝跡ＳＤ２，ｂ－ｂ’（東から）

溝跡ＳＤ２・78，ｃ－ｃ’（南から）

溝跡ＳＤ２，ｄ－ｄ’（北東から）

溝跡ＳＤ２，ｅ－ｅ’（北東から）

溝跡ＳＤ２，ｆ－ｆ’（南西から）

遺物出土状況（溝ＳＤ３，南東から）

溝跡ＳＤ３，ｇ＾－ｇ’（北東から）

溝跡ＳＤ３ｉ－ｉ’（北から）

溝跡ＳＤ４，ｋ－ｋ’（北東から）

溝跡ＳＤ４，ｌ－ｌ’（南から）

溝跡ＳＤ６，ｍ－ｍ’（東から）

溝跡ＳＤ６，ｎ－ｎ’（北東から）

遺物出土状況（溝跡ＳＤ 78，南東から）

溝跡ＳＤ 78，ｏ－ｏ’（東から）

溝跡ＳＤ 78，ｐ－ｐ’（西から）

溝跡ＳＤ 82，ｑ－ｑ’（北西から）

溝跡ＳＤ 82，ｒ－ｒ’（西から）

溝跡ＳＤ 128，ｓ－ｓ’（北から）

溝跡ＳＤ１，ａ－ａ’（北西から）

溝跡ＳＤ１，ｂ－ｂ’（東から）

溝跡ＳＤ１・７，ｃ－ｃ’（南西から）

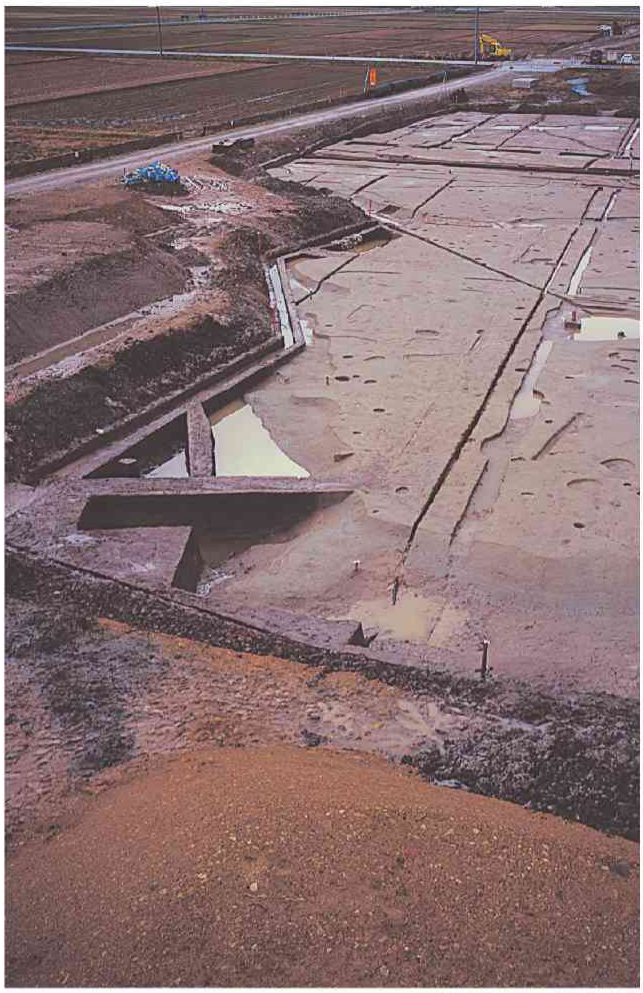
溝跡ＳＤ１，ｄ－ｄ’（北東から）

溝跡ＳＤ７，ｅ－ｅ’（北東から）

川跡ＳＧ 129，ｆ－ｆ’（北東から）

川跡ＳＧ８，ｇ－ｇ’（南から）

川跡ＳＧ８，ｈ－ｈ’（北から）



川跡ＳＧ81（北から）

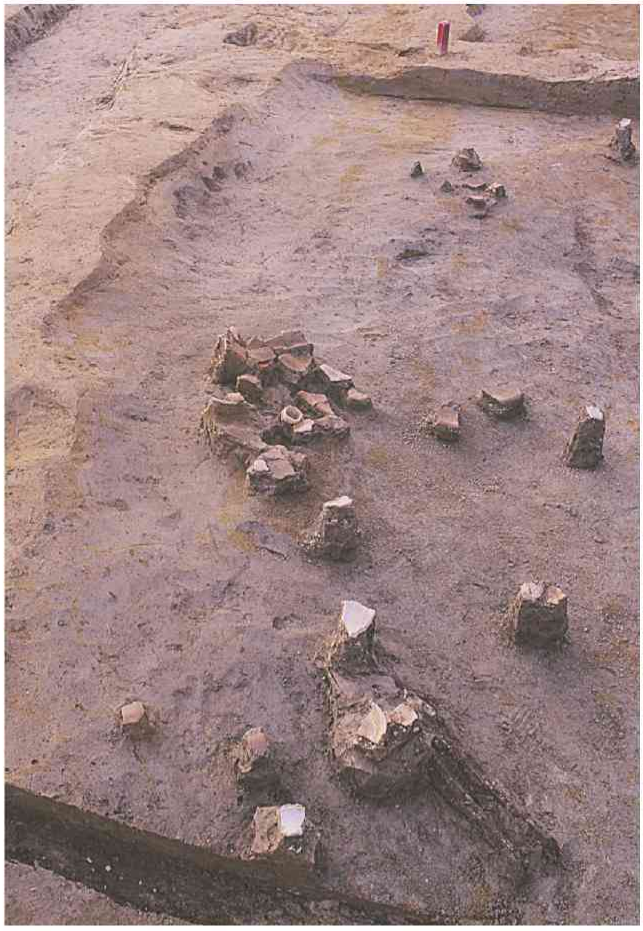
川跡ＳＧ81，ａ－ａ’（南東から）

川跡ＳＧ81，ｂ－ｂ’（北西から）

川跡ＳＧ81，ｃ－ｃ’（南東から）

川跡ＳＧ81，ｄ－ｄ’（南東から）

遺物出土状況（川跡ＳＧ 130，南東から）



遺物出土状況（川跡ＳＧ130，東から）

川跡ＳＧ130，ｅ－ｅ’（南東から）

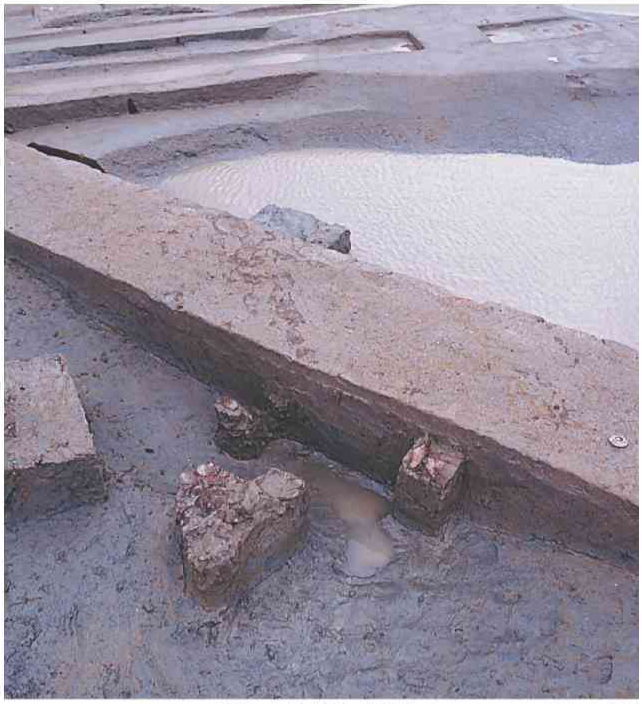
川跡ＳＧ130，ｆ－ｆ’（北東から）

川跡ＳＧ130，ｇ－ｇ’（西から）

川跡ＳＧ141，ｈ－ｈ’（北西から）

川跡ＳＧ141，ｉ－ｉ’（北西から）

川跡ＳＧ141，ｊ－ｊ’（北から）



遺物出土状況（川跡ＳＧ 248，北東から）

遺物出土状況（川跡ＳＧ 248，北東から）

川跡ＳＧ 248，ｋ－ｋ'（西から）

川跡ＳＧ 356，Ｉ－Ｉ'（南東から）

遺物出土状況（川跡ＳＧ 356，北東から）

遺物出土状況（川跡ＳＧ 356，東から）

土坑ＳＫ５（東から）

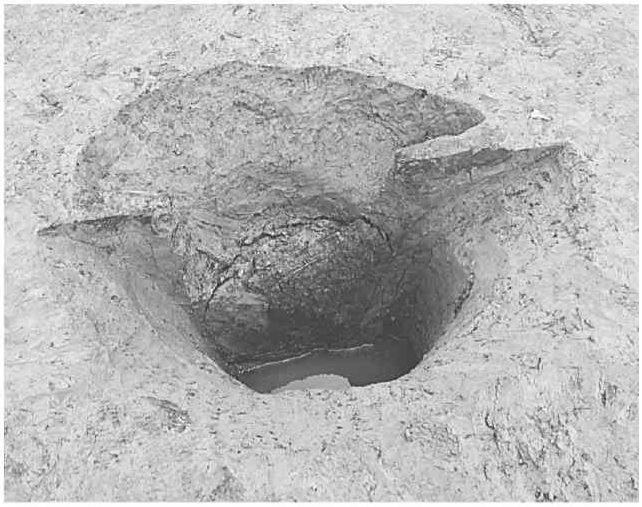
土坑ＳＫ 142（南東から）

遺物出土状況（土坑ＳＫ 142，南東から）

土坑ＳＫ 142（南東から）

土坑ＳＫ 143（南西から）

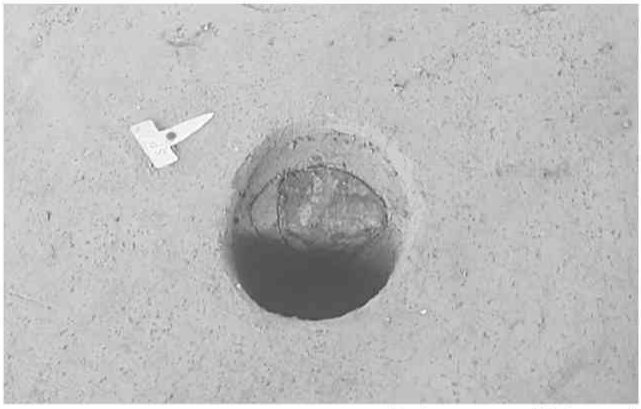
土坑ＳＫ 145（東から）



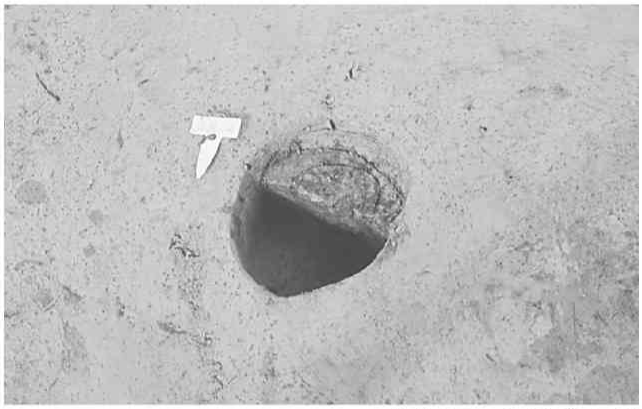
井戸跡ＳＥ 80（南東から）

井戸跡ＳＥ 80（南から）

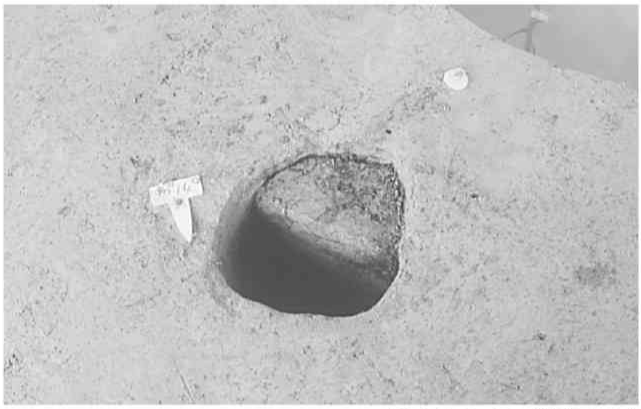
柱穴ＳＰ 10（南から）



柱穴ＳＰ 11（南東から）



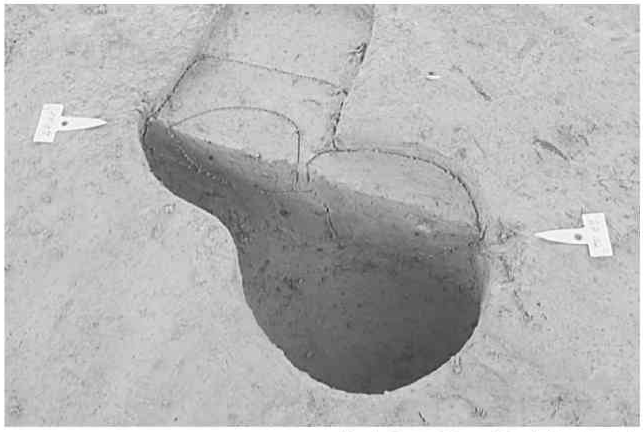
柱穴ＳＰ 12（南東から）



柱穴ＳＰ 14（南東から）

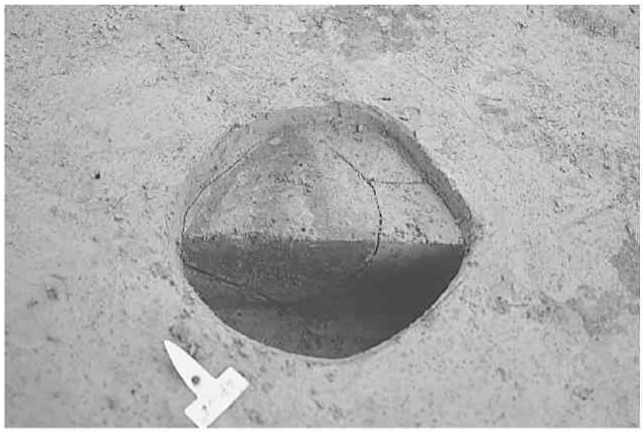
柱穴ＳＰ 25（東から）

柱穴ＳＰ 30（東から）

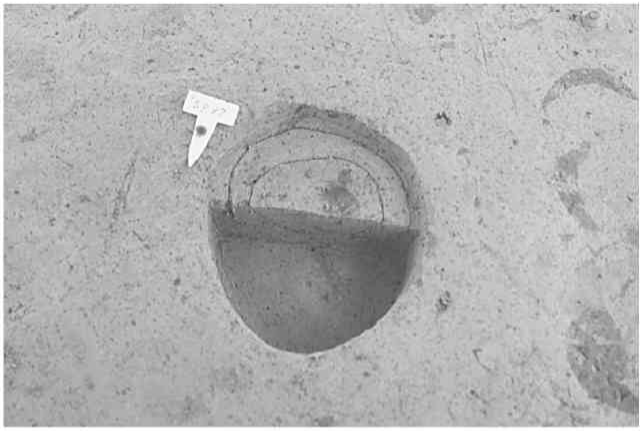


柱穴ＳＰ 32・33（南西から）

柱穴ＳＰ 34（南西から）

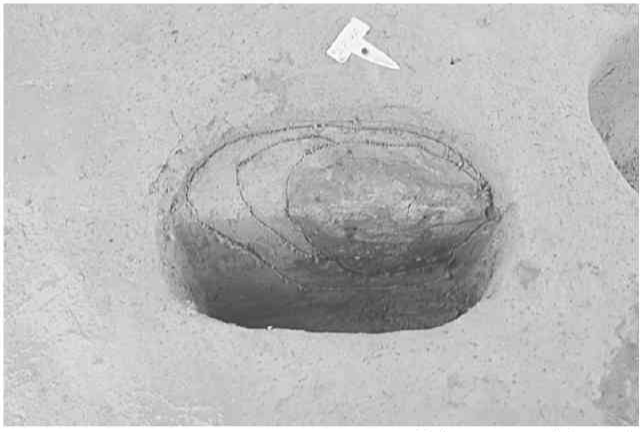


柱穴ＳＰ 36（北東から）

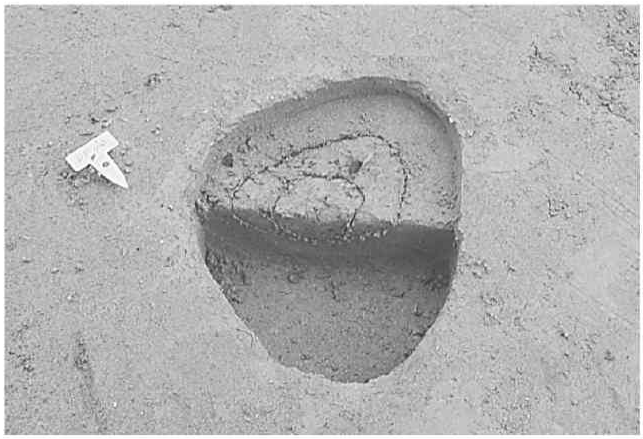


柱穴ＳＰ 37（西から）

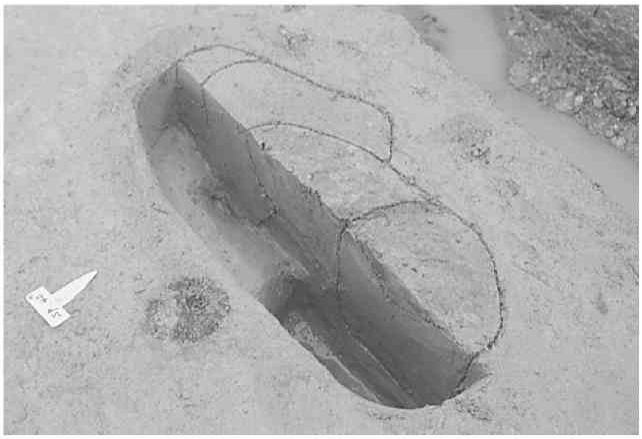
柱穴ＳＰ 38（北西から）



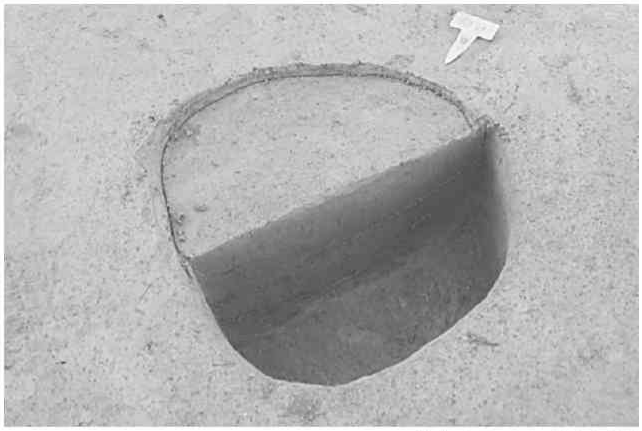
柱穴ＳＰ 40（南から）



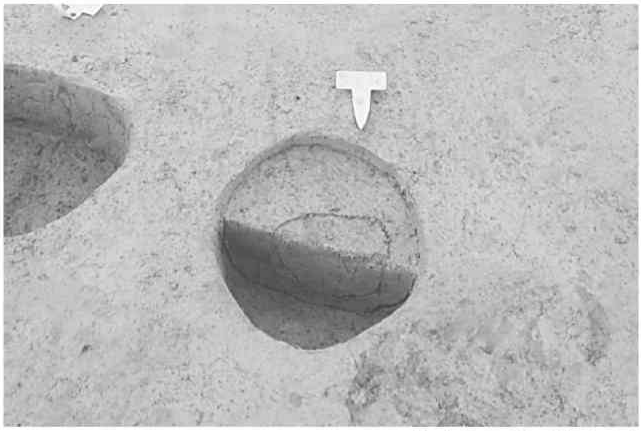
柱穴ＳＰ 44（北西から）



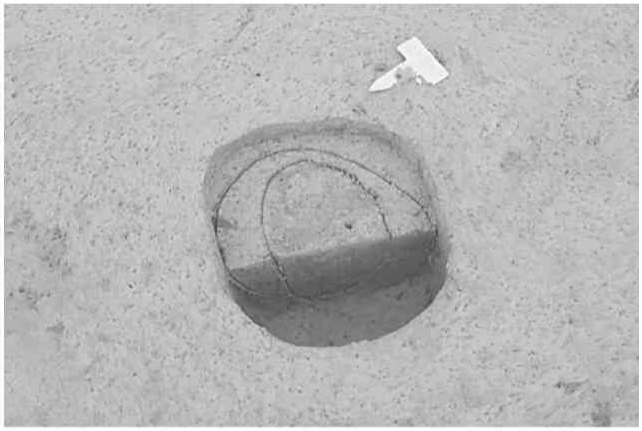
柱穴ＳＰ 46（南西から）



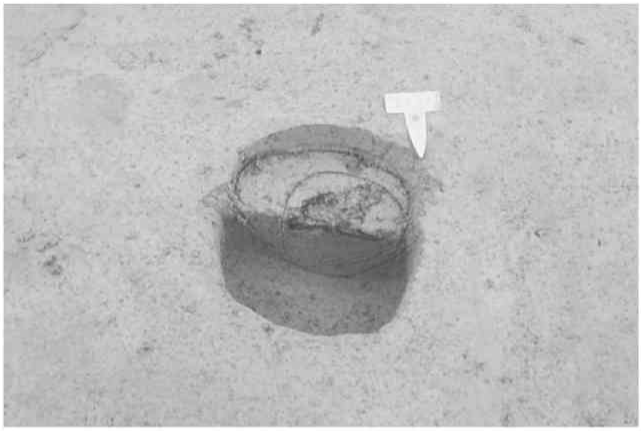
柱穴ＳＰ 49（西から）



柱穴ＳＰ 66（東から）

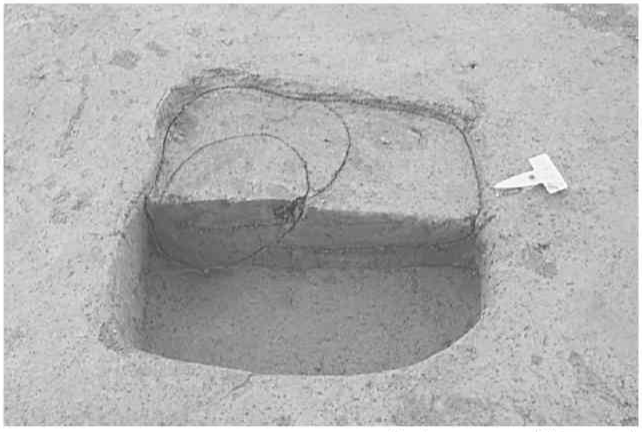


柱穴ＳＰ 68（南東から）

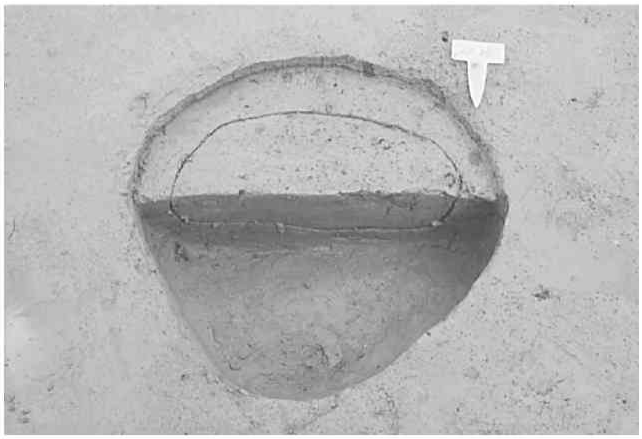


柱穴ＳＰ 69（南西から）

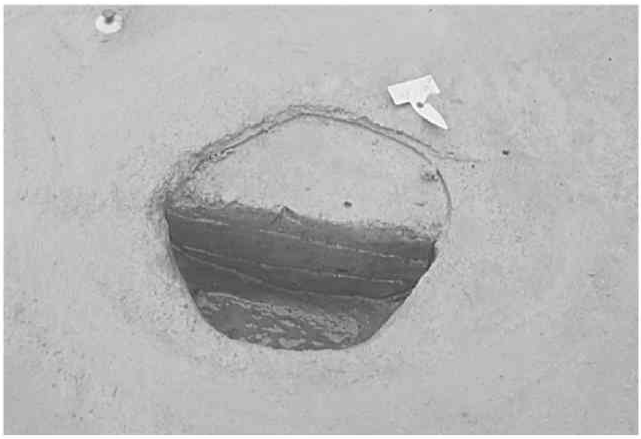
柱穴ＳＰ 74（東から）



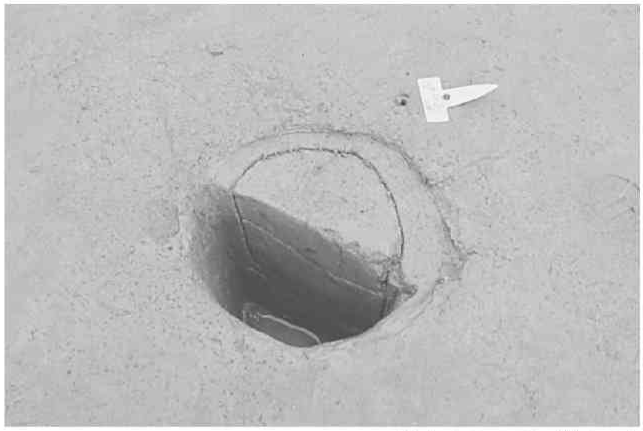
柱穴ＳＰ 77（北西から）



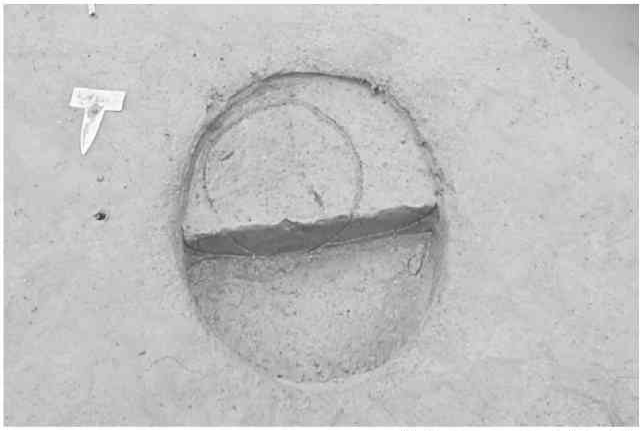
柱穴ＳＰ 84（南西から）



柱穴ＳＰ 110（西から）

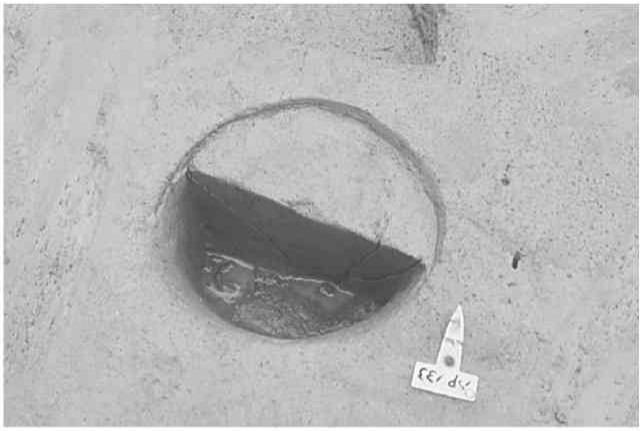


柱穴ＳＰ 116（北から）

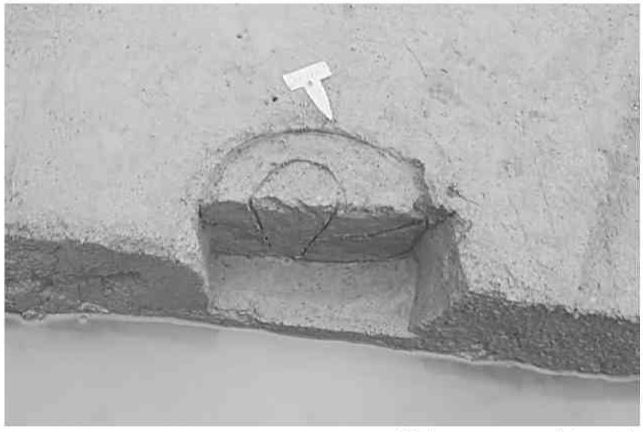


柱穴ＳＰ 119（南から）

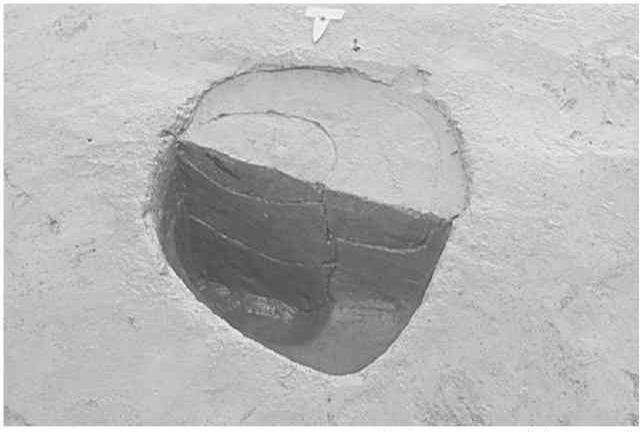
柱穴ＳＰ 131（南西から）



柱穴ＳＰ 133（北東から）

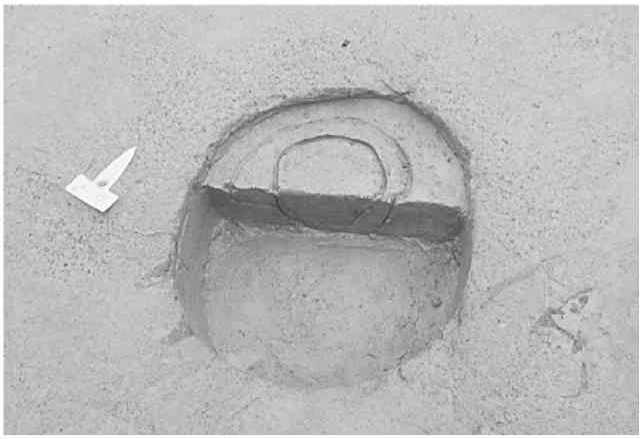


柱穴ＳＰ 134（東から）

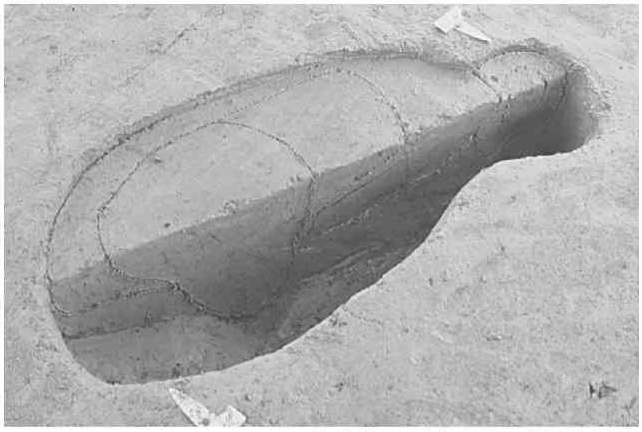


柱穴ＳＰ 137（北西から）

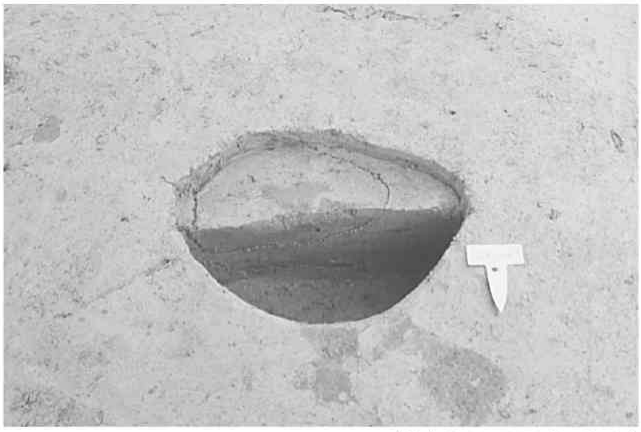
柱穴ＳＰ 138（北東から）



柱穴ＳＰ 150（東から）



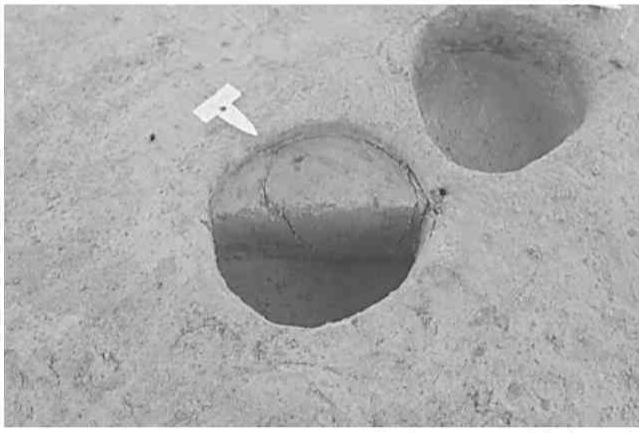
柱穴ＳＰ 152・170（南東から）



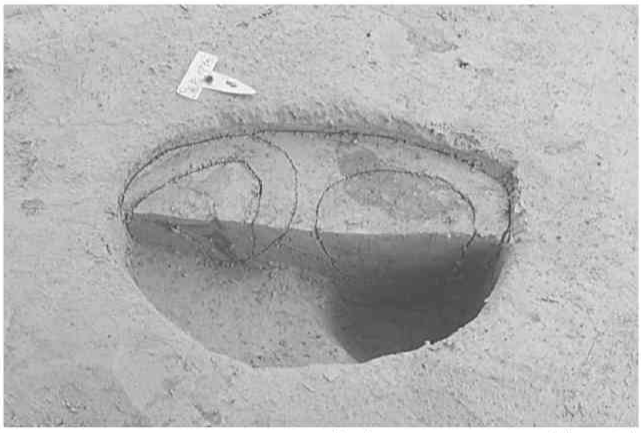
柱穴ＳＰ 155（西から）

柱穴ＳＰ 164（北東から）

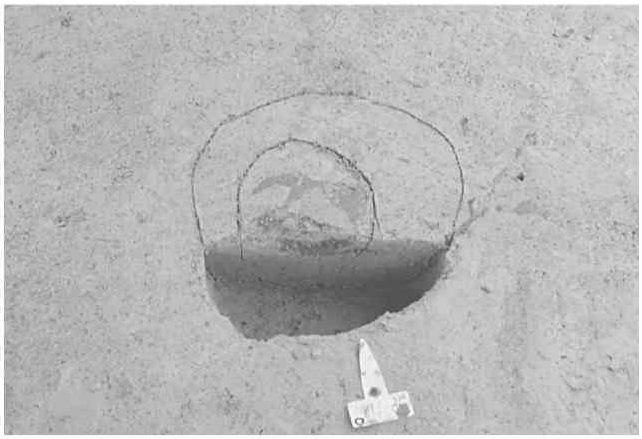
柱穴ＳＰ 167（東から）



柱穴ＳＰ 174（南東から）

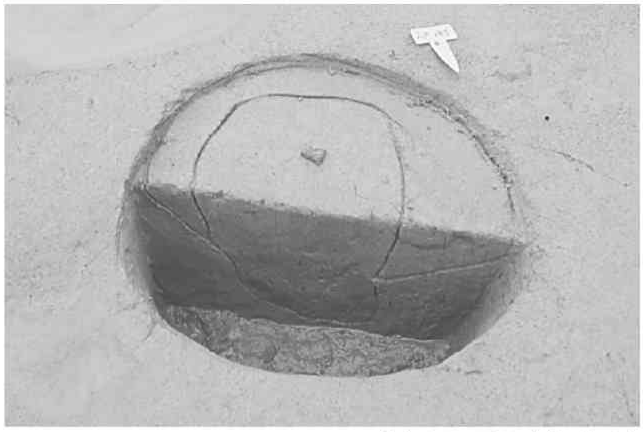


柱穴ＳＰ 176・374（東から）



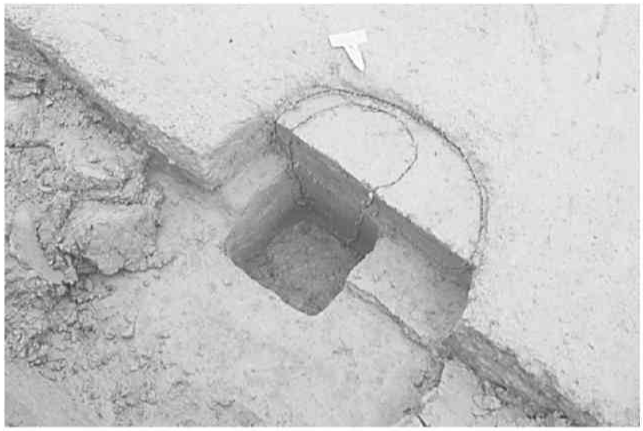
柱穴ＳＰ 177（南東から）

柱穴ＳＰ 178（北から）

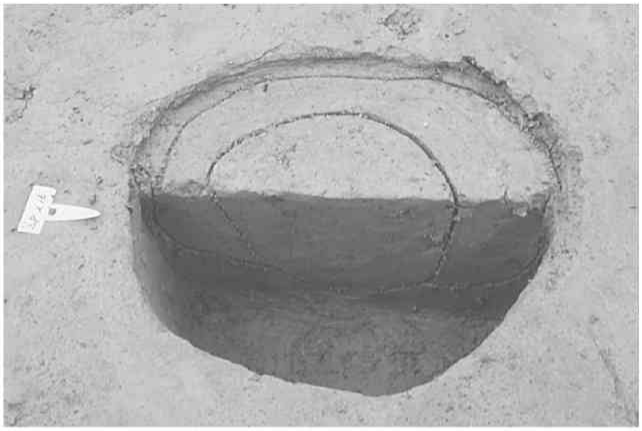


柱穴ＳＰ 185（南西から）

柱穴ＳＰ 197（南から）

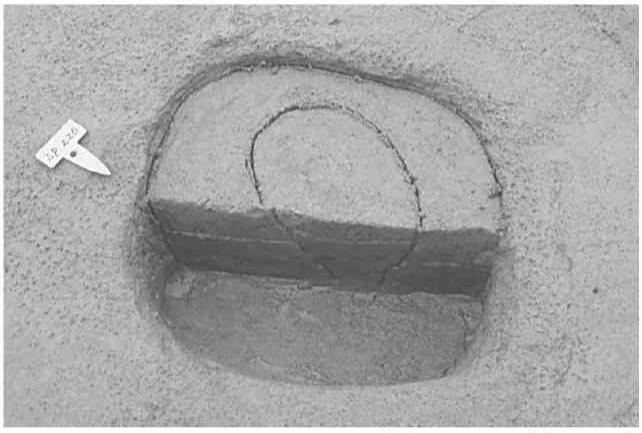


柱穴ＳＰ 215（南西から）



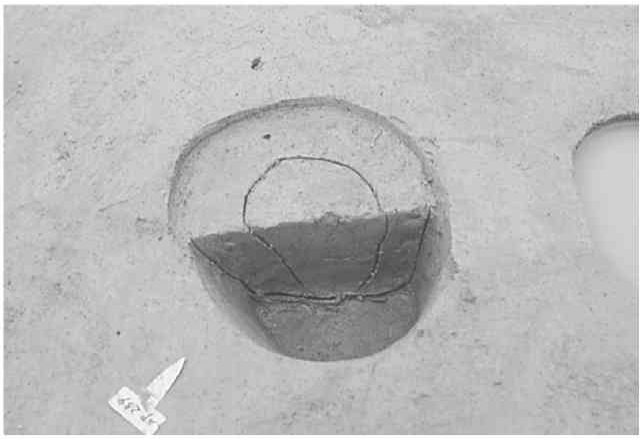
柱穴ＳＰ 216（北東から）

柱穴ＳＰ 218（南東から）

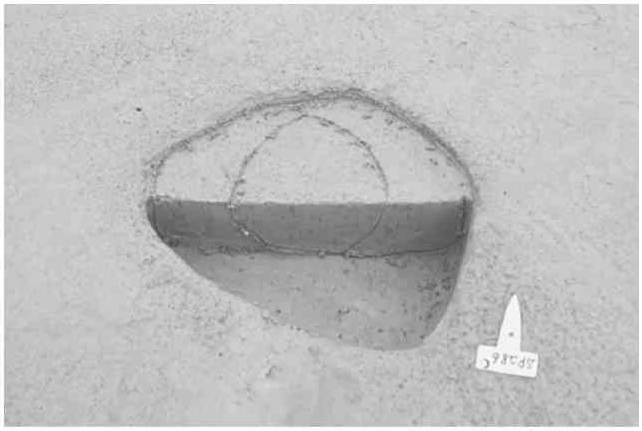


柱穴ＳＰ 220（南西から）

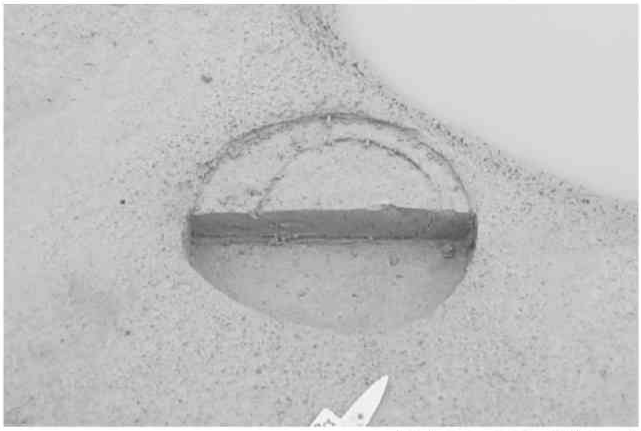
柱穴ＳＰ 257（南から）



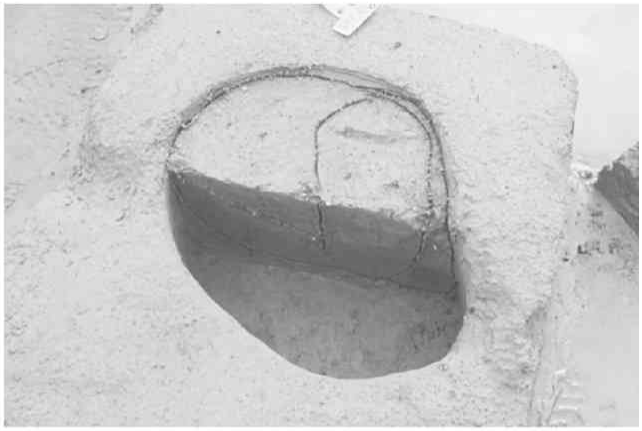
柱穴ＳＰ 259（西から）



柱穴ＳＰ 286（北東から）

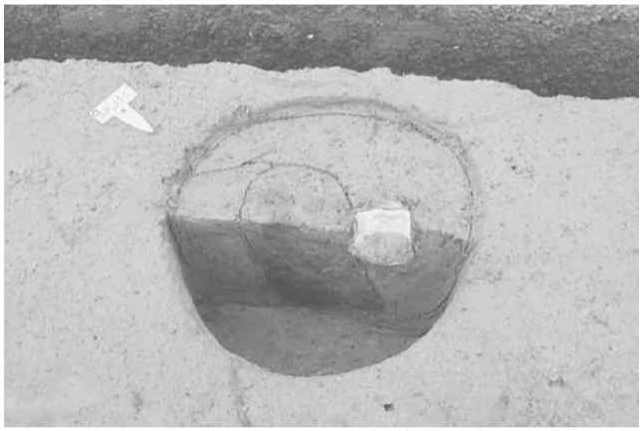


柱穴ＳＰ 292（北から）

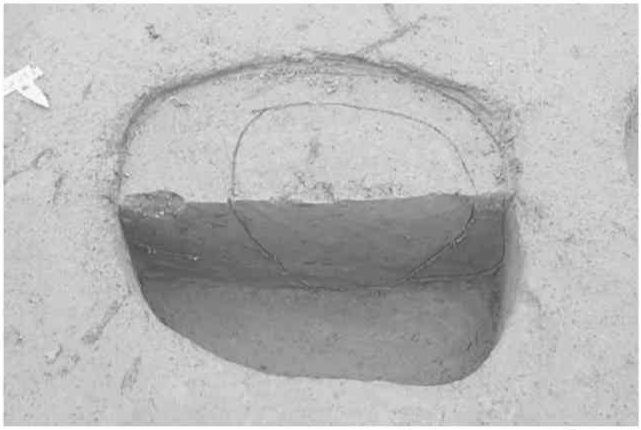


柱穴ＳＰ 335（北から）

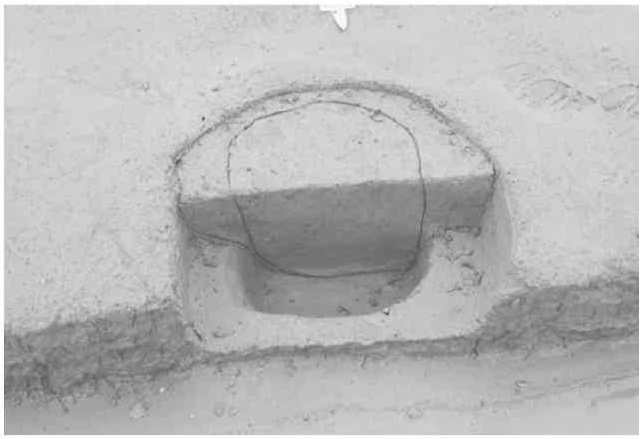
柱穴ＳＰ 342（北東から）



柱穴ＳＰ 350（東から）



柱穴ＳＰ 353（北から）



柱穴ＳＰ 368（北西から）

作業状況

溝跡ＳＤ２（1・2）・ＳＤ３（3～9）・ＳＤ４（12）・ＳＤ 322（22）・ＳＤ 325（23）出土の土器

13

14

15（墨書「物」）

18

15

19

16

20

17

21

溝跡ＳＤ 78 出土の土器

川跡ＳＧ 81 出土の土器

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

川跡ＳＧ 81 出土の土器

49

50

51

52

53

56

54

57

55

58

59

61

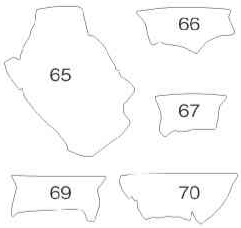
62

60

63

64

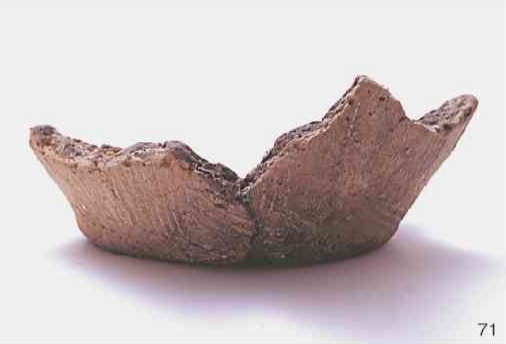
川跡ＳＧ 130 出土の土器



72

73

68


71

74

川跡ＳＧ 130 出土の土器

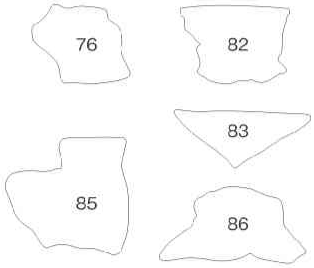
川跡ＳＧ 248 出土の土器

79

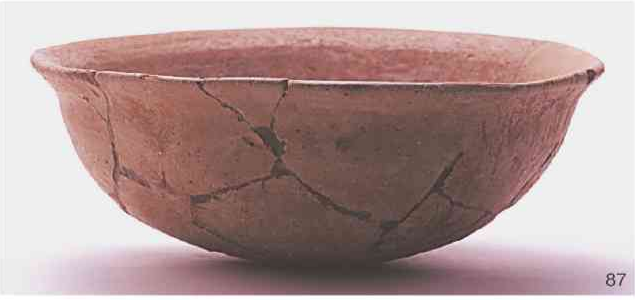
80

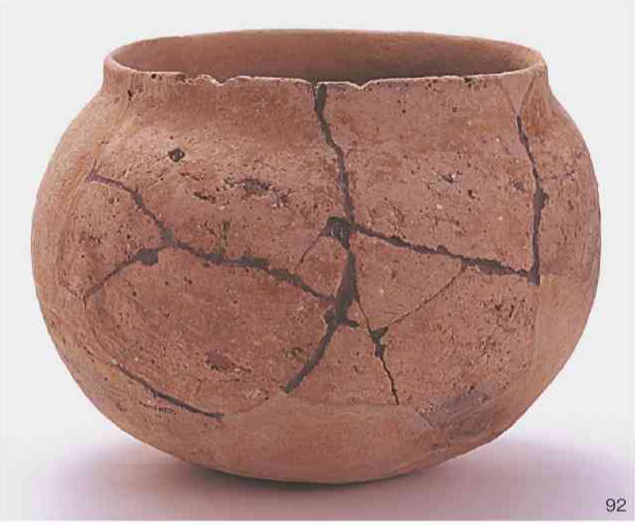
81

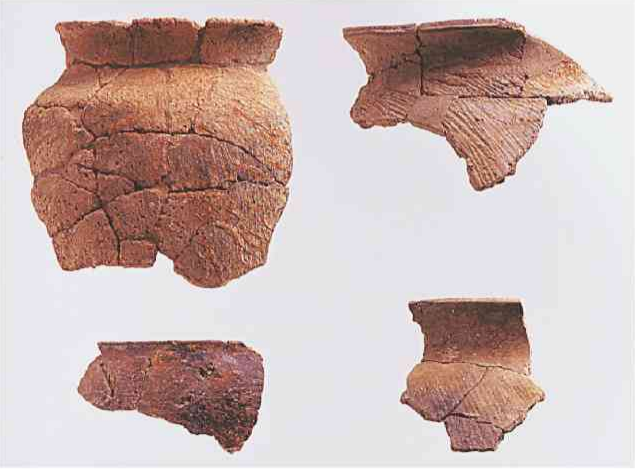
84

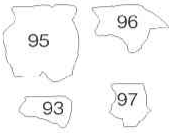


川跡ＳＧ 248 出土の土器









川跡ＳＧ 356 出土の土器

101

102

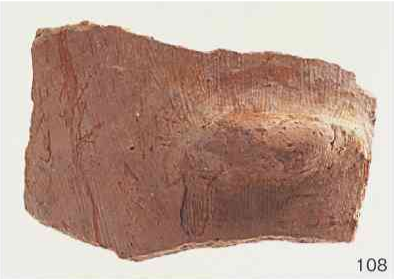
103

105

104

106

107


108

110

土坑ＳＫ 142　101 ～ 108
井戸ＳＥ 80　　110

土坑ＳＫ 142，井戸ＳＥ 80 出土の土器

左上：111　左下：112　右：113

115

116

左：120　右：119

117

118

左上：10　右上：11　下：121

上：109　下 114

3・4（管状土製品）：溝ＳＤ３
109（フイゴの羽口）：土坑ＳＫ 143
111 ～ 113：溝ＳＤ１
114（紡錘車）：川跡ＳＧ８
115 ～ 120：遺構外
121（環状土製品）：遺構外

溝跡ＳＤ１，川跡ＳＧ８，土坑ＳＫ 143，遺構外出土の遺物

左：123　右：122

左：125　右：124

左：126　中：127　右：128

129

130

131

124：斉串：井戸ＳＥ80　125：斉串：川跡ＳＧ81　126：箸：土坑ＳＫ5　127：箸：川跡ＳＧ81
128：箸：川跡ＳＧ81　129：有台皿：川跡ＳＧ81　130：無台皿：川跡ＳＧ81　131：曲物の底板：川跡ＳＧ81

砥石（122・123），木製品（124～131）

無台皿と箸（無台皿：130　箸：上 127・下 126）
※箸置きは川跡ＳＧ 81 より採集した小枝片

報告書抄録

ふりがな	みなみだいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	南田遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第173集
編著者名	水戸部秀樹
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　ＴＥＬ　023‐672‐5301
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みなみだいせき 南田遺跡	やまがたけん 山形県 つるおかし 鶴岡市 おおあざしみずしんでん 大字清水新田 あざみなみだ 字南田	6203	平成17年度 新規登録	38°　43′　40″	139°　45′　52″	20060919 ～ 20061130	3400㎡	日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
みなみだいせき 南田遺跡	集落跡	古墳時代	川跡	4	土師器	６世紀第１四半期、８世紀中頃、８世紀第４四半期～９世紀第１四半期、９世紀第４四半期～10世紀第１四半期の４時期にわたる遺物が出土した。 （文化財認定箱数：20）
		奈良時代	溝跡 土坑 井戸 川跡	4 2 1 1	土師器 須恵器 木製品（斉串）	
		平安時代	川跡	1	土師器 須恵器 木製品（斉串・皿・箸）	

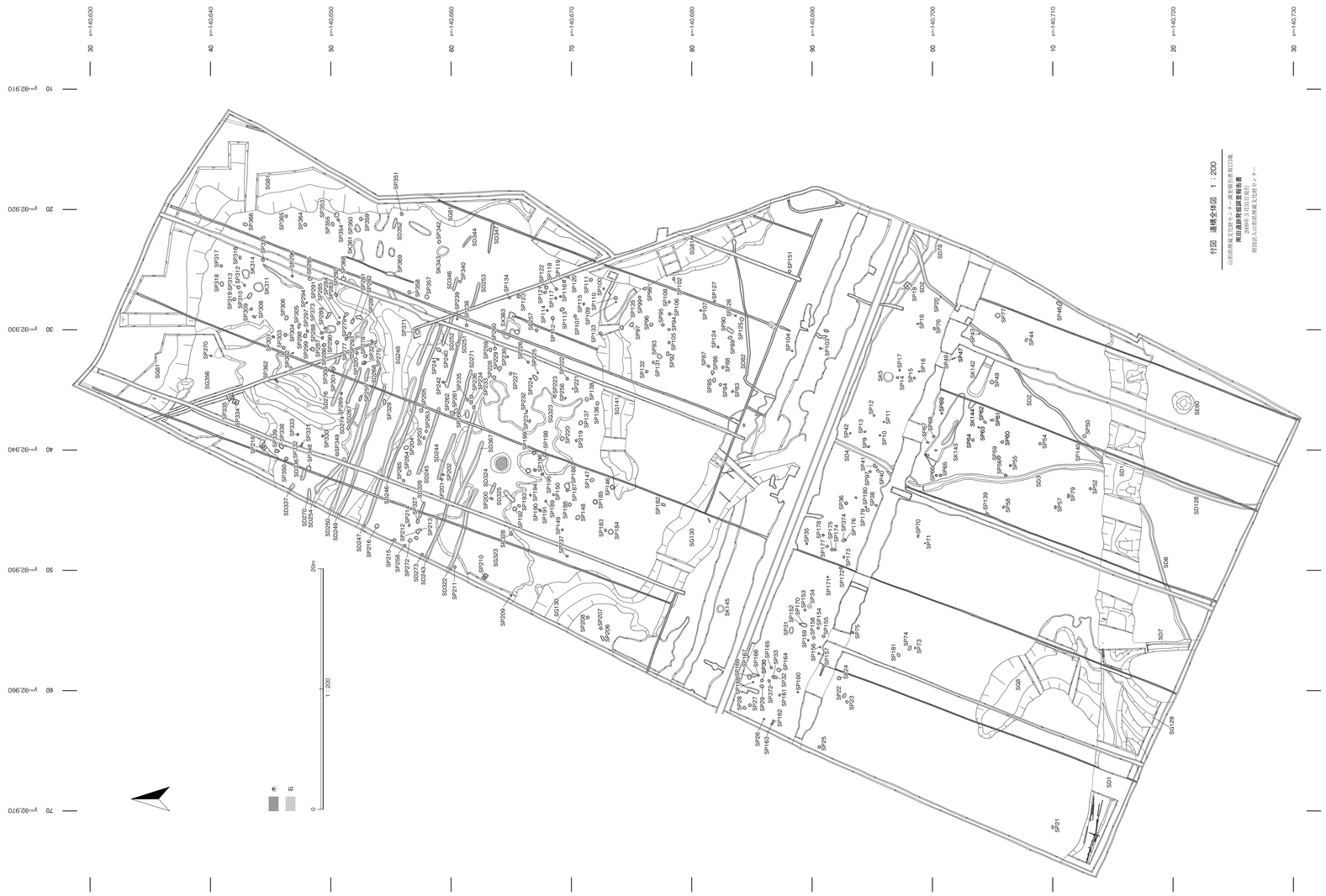
要約	６世紀第１四半期に属する遺構は、川跡ＳＧ81・ＳＧ130・ＳＧ248・ＳＧ356があり、土師器の坏・甕・手づくね土器・直口壺・壺・無頸壺などが出土した。 ８世紀中頃に属する遺構は、川跡ＳＧ81があり、須恵器の無台杯・有台坏・有台坏の転用硯・坏蓋・甕、土師器の甕・鉢などが出土した。 ８世紀第４四半期～９世紀第１四半期に属する遺構は、溝跡ＳＤ２・ＳＤ３・ＳＤ４・ＳＤ78、土坑ＳＫ142・ＳＫ143、井戸ＳＥ80、柱穴群などがあり、須恵器の坏・有台坏・坏蓋・壺・甕、土師器の甕・鉢、管状土製品、フイゴの羽口などが出土した。人為的な遺構が見られるのは、この時期に限られる。 ９世紀第４四半期～10世紀第１四半期に属する遺構は、川跡ＳＧ81があり、須恵器の無台杯・壺・甕、土師器の無台杯・有台坏・甕などが出土した。 住居跡などが検出されず、調査区の西側に川跡ＳＧ81があることから、集落の本拠は調査区の西側に存在するものと考えられる。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第173集

南田遺跡発掘調査報告書

2009年3月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999‐3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　023‐672‐5301
印刷　アベ印刷株式会社
〒990‐0894　山形県山形市大字船町82番地
電話　023‐681‐1951


付図 遺構全体図 1：200
山形県長井市 左沢ターミナル跡地発掘調査報告書
南陽遺跡発掘調査報告書
2009年3月31日 発行
財団法人山形県埋蔵文化財センター
x=140,630
x=140,640
x=140,650
x=140,660
x=140,670
x=140,680
x=140,690
x=140,700
x=140,710
x=140,720
x=140,730
y=-92,910
y=-92,920
y=-92,930
y=-92,940
y=-92,950
y=-92,960
y=-92,970
1：200
0
20m
北
凡